

---

## Precious Melody 4 -String Of Love-

七海くれは

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Precious Melody 4 - String Of  
Love -

### 【Nコード】

N45920

### 【作者名】

七海くれは

### 【あらすじ】

聞こえるは、蝉時雨。本格的な夏は、目の前。

親の都合に振り回される少年、風間爽太。

10年の歳月を経て、幼少期を過ごした故郷へと戻る。

そこで彼は懐かしき出会いと、新しい出会いを果たすのであった。

誰もが夢見る『Precious Melody』を捜し求める青  
春ストーリー。  
運命の糸は、誰を選ぶか。

## 序章・偶然の奔流

「さあ、行こうか」

「あつ、はい」

低く、だがよく通る声か、私立汐野学園の職員室に響き渡る。その声の主は、この学園の3年E組担任、須藤孝太郎のものであった。その声に呼応して立ち上がるは、風間爽太。父親の仕事の都合により、幼少期から幾度となく転居・転校を余儀なくされてきた少年。今回ようやく生まれ故郷に戻ってくる事が出来た……が、10年という歳月は、彼の記憶にあつた街並を全て変えてしまっていた。

高校生活最後の一年を、汐野学園3年E組で過ごす事になった爽太の顔に、緊張の色は全くない。

「さて、着いたぞ。どうだい、ぼくと一緒に入る？ それともぼくが呼ぶまで待つかい？」

「あー、そんなのどっちだっていいっすよ」

「おや、そう。それじゃ、ぼくが呼ぶまでちよつと待っててもらえるかな」

孝太郎の問いかけに無言でうなずく爽太。彼も無言でうなずくとゆっくりとドアを開ける。

その向こうには、担任が来るのを待ちきれない様子の生徒が何人もいた。

「そーら、席に着けー。さっさとホームルーム終えて帰らせてやるからー」

彼は教師らしく、冗談交じりに生徒達に席に着くよう促す。

このクラスの生徒達は一応は分別がついているらしく、教師の声に逆らおうとする者はいないようだ。

「うむ、みんな素直でよろしい。……さて、始業式お疲れさんでした。長かったね、校長先生の話」

「ホントだよ！　　たくよお、もつと短くしろつてのあのハゲ！  
ふあゝあ、眠いぜ」

「はい神崎さん、ぼくの気持ちを代弁してくれてありがとう。あつ、  
これ校長先生には秘密だからな」

再び冗談を言い、場を和ませる孝太郎。その顔を保ったまま、落  
ち着いた声で続ける。

「そうそう、さっきも言ったかも知れないけど……実は今、廊下に  
新しい仲間が来ています」

「来たつ！　　どどど、どつちでつすかつ！？　　女の子でつすかつ！  
？」

「うるさいよ原田くん。どっちだっていいじゃないか、もうすぐわ  
かるんだから」

「先生。雑談はもう結構ですので、早いところその転入生とやらを  
紹介していただけませんか」

教室内が喧騒に包まれそうになるのを、教室後方からの鋭い声が  
制する。

その声の主はこのクラスの委員長、藤堂樹里。

彼女は普段から近寄りがたい雰囲気醸し出しており、ある意味  
では担任であるはずの孝太郎よりも発言に重みがあるという。

「おつとと、悪かったね。それじゃー、入ってきてもいいぞ」

その声と共にドアが開けられ、爽太が入る。

その途端、四方八方から歓声が上がったのは言うまでもなく、中  
でも女子生徒の反響が大きかったようだ。

「ほーれ、静かに。んじゃ、自己紹介してください」

「はい……。えっと、風間爽太……です。よろしく」

さすがの彼もこの雰囲気気圧されたか、やや緊張しながら自己  
紹介を進めてゆく。

彼が名を乗った瞬間、驚きを顔に表した女子生徒がいた。

彼女の名は、橋本瑞奈。そして彼女には、爽太に見覚えがあった。

その様子を察知した隣の男子生徒が、瑞奈に小声で話しかける。

「瑞奈ちゃん、どーしたんでっすか？」

「……ふえっ？ あ、海斗くん……。あ、あのね、あの子……」

「あの子？ 前に立ってるあいつのことですっすか？」

「う、うん……。もしかしたらただけだね、わたしの知ってる人かも知れないんだ」

「へえ……。じゃーあとで聞いてみりゃいいじゃないでっすか」

「ヤダよあ……。間違ってたら恥ずかしいもん……」

「なら、オレっちが代わりに聞いてやるでっす。それならいいだろ？」

「……うん」

瑞奈がうなずくと、につこりと微笑む彼の名は原田海斗。先ほど騒いで注意を受けたのも彼であった。

彼らが相談をしている間にも、爽太の自己紹介は続いていた。

「……そんなわけなんで、みんなよろしくな」

「はい、ありがとう。それじゃ席に着いてもらおうかな。えっとキミの席は……。ありゃ、教卓のまん前か」

「うげ、マジだ。ま……。いつかあ」

見ると、教卓の前の席がひとつ空いている。

爽太がしぶしぶそこに座ると、隣の女子生徒が声をかけてきた。

「よろしくな、お隣さん。おれも転入生だったからよ、仲良くやってこうぜ」

「あ、おう……。こちらこそ」

「それでは、新しい仲間の風間くんをよろしくしてやって欲しい。

さて、今日はこれでおしまいだ。明日からいきなり本格的な授業が始まるから、しっかり準備を整えておくように」

「はい」

「という事で皆さん、さようなら。気をつけてな」

孝太郎がホームルーム終了の号令をかけると、生徒達は次々と立ち上がり、転入生の爽太の周りに集まり出す。

爽太の隣に座っていた女子生徒はその影響をもろに受け、集団か

ら這い出してきた。

「ったくよお、おれの時といい、こいつらってホントミーハーって  
いうか……」

「みやびよん、平気？ でも……こりやマジですごいわ」

人だかりの外で顔を見合わせたこの2人は、青山果緒梨と神崎都。  
彼女らは幼なじみであり、常に行動を共にしているイメージがあ  
る。

都の方は自分も数ヶ月前に転入してきたばかりということもあり、  
爽太の気持ちも分かるのだろうか。

質問攻めも佳境を迎えた頃、海斗が爽太に質問を投げかけた。

「よお、新入り」

「なんだい、熱血くん」

「オレっちは原田海斗です。……まあ、それはいいや。お前、瑞  
奈ちゃん知ってるでっすか？」

「うん？ どちらの瑞奈ちゃんだよ？」

「橋本瑞奈。この名前に、聞き覚えはないでっすか？」

「……あー！ あるぜ！ あのチビ奈だろ？ 懐かしいなあ、久々  
に聞いたよその名前。んで、そいつがどうかしたのか？」

「やっぱり！ ……瑞奈ちゃん、来るでっす」

海斗に呼ばれ、おずおずと爽太に近づく瑞奈。

そしてこの瞬間、2人は10年越しの再会を果たしたのだった。

「えっ……？ お前、本当にあの……？」

「うん……。爽太くん、久しぶり……」

「え？ なになにに、どったの？」

人ごみを掻き分け、果緒梨と都も爽太に近づく。

「お前、瑞奈と知り合いだったのか？」

「う、うん。いやあでも、まさかこんなところで再会するとはな。元  
氣してたかよ？ ……しっかし、相変わらずちまいなあ」

「そんな事……ないよ。わたしだって成長してるんだよ？ 爽太く

んだってちつちやいじゃない」

「うるせっ！ さすがにチビ奈よりやでーと思うけどな」

「じゃーよ、おれが見てやつからよ、2人とも背中合わせて立ってみるよ」

都がそう提案すると、2人は言われた通りに背中合わせで立つ。

そして都は目測で背比べを始めた。

「うーん、爽太のがほんの少し高いかな？」

「ほーれ見る！ やっぱりお前のほうがチビじゃんか！」

「うう……」

「何言つてんだよ。おれよか、かおりゆんよか小せえじゃねえか。

それに……くそっ！ おれよりかわいい顔しやがって！ うらやましいぜ！」

「……っ！ か……かわいい、か……はあ」

都がそこまで言い終えた途端、爽太は落ち込みながら自分の席に戻っていつてしまった。

彼女は何気なく言っただつもりだったが、爽太にはかなりのダメージを与える事になったようだ。

「やべ……。おれ、何かひでえ事言っちゃった……？」

「オレは……男だ！ これでも……！ チビって言われんのは仕方ねーけど、だからって女の子扱いするのだけはやめてほしいかな……」

……

「わ……悪かったよ」

「爽太くん……」

「……ふん。付き合ってられないや」

爽太の席の周りに集まるクラスメイトを見下すような目で見ながら教室を去る樹里。その行動に気づいた者は、誰もいない。

新しい季節が呼び込んだ、新しい仲間。

彼らの物語は、ここから始まる。



## 第1章：意外な素顔

転入生の風間爽太が汐野学園の3年E組に仲間入りしてから早や2ヶ月あまりが経過し、彼はすっかりこのクラスに馴染んでいた。

気さくな性格と小柄な容姿のおかげで女子生徒からの評判も高いようだが、委員長と呼ばれている樹里とは未だにろくな会話もしていなかった。

会話と言っても、爽太が遅刻をした時に多少やり取りをした程度であった。

樹里は、過去に都ともいざこざを起こしており、常に誰も寄せ付けない雰囲気醸し出していた。

この日も誰と交わることもなく、ひとりで帰ってゆく。

「……はあ。今日はどうしよっかな」

校門を出てそうつぶやいた彼女はおもむろにメガネを外し、同時に結んでいた髪を下ろす。

実は彼女は、学校内と学校外では違う顔を使い分けており、どちらかと言えば今の学校外の方が素の自分を出しているようだ。

「……うん！ やっぱしこうでなくっちゃな！ さて、ゲーセン行くぞー！」

時間は午後の4時。夏の太陽は未だ沈む様子を見せず赤々と燃え続けている。

「さて、あれは空いてるかな？」

たった一人でゲームセンターに入る樹里。そして、吸い寄せられるように一つのゲーム筐体に向かう。

だが、どうやらギャラリィが周りを取り囲んでおり、とても今すぐには出来なさそうだ。

彼女もそのギャラリィに混ざってプレイを見守ると、向こう側の台では樹里と同じ服を着た女子生徒がプレイしているのが確認でき

た。

「へえ、私以外にもこれやる子がいたんだ。誰だろ……っつて、えっ！？」

興味本位でそちらに目をやると……プレイ中の女子生徒の後ろにもやはり同じ制服を着ている女子生徒が2人立っていた。

樹里は、その全員の顔を知っている。

（ちよつと何で！？　なんで神崎さんたちがいるわけ！？　いや、あの子はわかるけど……どうしておとなしそうな橋本さんまでいるのよ！？）

樹里は『委員長と呼ばれる自分がゲームセンターにいる事実』の発覚を恐れ、見つからぬように後ろに引っ込み、自分の番を待った。

10分後、ようやく彼女の番が訪れる。筐体をはさんだ向こう側の相手は……まだ樹里と同じ服を着ている女子生徒のままであった。画面上部にカウントされた連勝数がそれなりに大きな数になっていることから、樹里は相手を強敵と認識した。

「みやびよんすごいよ！　勝ちまくりじゃーん！」

「へへっ、ざつとこんなもんよ！　負ける気しねえな！」

「次は誰かな？　……あつ、わたしたちと同じ制服の人だよ」

筐体を挟んで聞こえてくる声は、やはり聞き覚えのあるものだった。

「まさか私がここにいるとは思っまい……。でも、こんな背の高いのって私くらいしかいないだろうな……バレたらどーしよ」

そんな心配をよそに、対戦が始まった。だが始まった途端、樹里の懸念は吹っ飛んでいった。

「結構やるけど、私の相手じゃ……ないな！」

終始有利に勝負を展開した樹里が、結局最後までそのペースを崩さぬまま終わらせてしまった。

「あつちゃ〜、やられちゃったね」

「マジかよ！　3タテなんて久々に食らったぜ」

そう言いながら、相手は席を立つ。その立った女子生徒は……やはり都であった。彼女らはそのまま後ろを振り向いて行ってしまう。「ほっ……。こっち来なくてよかった」

事実の発覚がなくなり安心した樹里は、これ以降10連勝ほどしてから席を立った。

彼女がゲームセンターから出る頃、ようやく日が傾こうとしていた。時間は午後6時。

優等生と呼ばれる彼女であるが、それは学校にいる時のみであり、一たび学校から出ると自分の気の向くままに遊び歩いているようだ。この日もまだ帰ろうとはせず、一人で近所のカフェに立ち寄っていた。

「いらっしやい」

「アイスレモンティー。ガムシロップ2つで」

「かしこまりました」

カフェに入るやいなや、店員にそれだけを告げて店の奥のほうの席に移動する。

そしておもむろにカバンを開き、一冊の本を取り出す。だがそれも教科書や参考書の類ではなく、彼女が好んで読む漫画本であった。「……お待たせしました。アイスレモンティーでございます。……ごゆっくり」

注文してから10秒もしないうちに先ほどと同じ店員が現れ、一言だけ言い残してレモンティーを置いてゆく。

「はや……。でもこの店、あの人しかいないのかな？ 広いとは言えないけど、常に何人かは私のようなのが居座ってそうなのに」

テーブルに置かれたレモンティーにストローを挿しながらつぶやいた樹里。

確かに、この店には先ほどの店員以外には従業員らしき人間が見当たらないが、それにもかかわらず清掃が行き渡っている。

そしてただ1人の店員も、暇をもてあますと客と雑談をしていた

り、自分でコーヒーなどを淹れて飲んでいるなどの余裕も見せているようだ。

この時もカウンター席に座っている2人の女性客と話をしていた。「んっ？ なーんかあのコに見られてる気分ー」

「我々が気になるのでしょうか？」

「ちつとアタシ行つてくるわ」

「穩便にね、穩便に」

樹里がその様子をまじまじと見つめていると、突然1人の女性客が近づいてきた。

「なーに？ アタシらになんか用？」

「ひぎっ！？ いえ、あの……」

突然話しかけられたため言葉を詰まらせる樹里。だが、その女性 はさらに続ける。

「あらら？ アンタその制服、汐野学園のよね？」

「あ……はい……」

「なによー、アタシの後輩ちゃんじゃないのよー。ね、今いくつ？」

「3年……です」

「3年、ね。あら、アタシの弟とタメなんじゃん。あとさーねーお嬢、瑞奈ちゃんも3年生だったわよね？」

女性は顔だけを後方に向け、カウンターに座っている別の女性客に話しかける。

「ええ。……あの子ときたら、受験が近いのでスクールの日程を減らしてはどうかという私の提案を断つたりして……」

「いんじゃない？ それだけ、あのコがお嬢の事気に入ってるってことじゃん？」

（な……なんなのよこの人たち！？ 瑞奈って……もしかして橋本さんのことか？）

「あ、あのっ！」

「なっ、なによいきなり？」

思わず声を張り上げてしまった樹里。言ってから後悔したが、今更覆すわけにもいかなないので意を決してそのまま続ける。

「あの……っ！ お2人は橋本さんをご存知……なのでしょうか？」

「瑞奈ちゃんでしょ？ 知ってるわよ、アタシの友達だしー。あと、ここの常連でもあるわね。ねーマスター？」

「うん、よく来てくれてるよ。他にもいろいろ連れて、ね」

「いろいろ……って？」

「ふむ。キミはもしかして、あの子達の事を知っているんじゃないかな？」

マスターと呼ばれた店員に尋ねられ、樹里は思索を巡らす。

「……はい。私は……あの子達と同じクラスで、みんなから委員長と呼ばれている藤堂樹里という者……です」

「何ですって……？ 藤堂さん？ 嘘をおっしゃい。瑞奈の話から推測される人物像と全く一致しませんわ」

「……」

背の高い方の女性客の言葉を受け、樹里は初めて学校の外で学校内での姿になった。

メガネを装着し、髪を結わいただけの変化だが、先ほどの印象とは一変した顔がそこにあった。

「これが……あの子たちが見ている私です。これで一致しませんか？」

「……私が浅はかでしたわ。申し訳ありません」

「へえ、すごい変わりよう……。これじゃー、言われなきゃわかんないわね」

「でもわからないな。どうして学校の中では仮面をつけているんだい？」

「……言いたくありません」

「そうか。無理に聞き出すような真似はしないよ。悪かった」

「……じゃーさ、どーして初対面のはずのアタシらには、2つの顔持ってるって明かしたわけ？」

「え……?」

「もしかしてアンタ、ホントはすっごく言いたい、わかってほしいって思ってたんじゃない?」

「そんなこと……ないです……」

「そうですね? 本当に秘密にしておきたいのならば、今のように我々に正体を明かす必要はないはずです」

「う……」

「それとも、私達ならば瑞奈たちに告げ口をしないででもお思いでした?」

「あつ……!」

「そうですね。あなたが今明かした事は、少なからずあの子たちに漏洩する可能性を含む事になりました」

先ほどまでカウンター席に座っていた女性が、樹里の座るテーブルまでやってきて話を続ける。

「壁に耳あり障子に目あり、どこで誰が見ているか分からないのです。それなのに正体を明かしてしまった。……さあ、どうします?」

「……言えません!」

「隠さなくたっていいじゃないーじゃん。言っとくけど、アタシ自分が興味持った事はとことんまで追及するタイプだから、もう逃げられないと思つたほーがいわよ」

「うっ……く……。わ……。わかりました……」

ついに観念した樹里は、ゆっくりと自分の事を語り始めた。

「私は……小さい頃からずっといろんな習い事をさせられ、みんなと遊ぶ時間がなかったんです。そんな私を異端者だと思ったのでしよつか、私に対し絡んでくる子もいました」

「あー、いじめね」

「そのようなものですね。ですが私はそんな下等生物どもなど相手にせず、無視を決め込みました。そのせいなのか……いつしか私の周りからは誰もいなくなつたんです」

樹里は若干声のトーンを落としながらも、毅然と話を続ける。女

性客2人も、樹里の真摯な態度にまっすぐに向き合いながら耳を傾けていた。

「確かに少しは寂しいと思いましたが、どうせ誰からも相手されないのならこっちから相手なんかするものかと考えるようになって今に至ります」

「……………」

「私は一人でなんだつて出来る、だから一人でも寂しくない…………つて思えるようになったら、みんなをうらやましいと思うことも、みんなと遊びたいと思うこともなくなりました」

マスターはここで突然外に行き、何かをいじったあと戻ってきた。…………でも、私のような人間がその辺のゲーセンなんかで遊んでるのを見たら、きつとみんな物珍しがってくるでしょう？」

「まー、確かにね」

「そういう反応を初めから遮断するためと、それで嘸し立てるようなクズどもになんで私が怯えねばならないのかという理由で、私は学校とそれ以外の顔と使い分けてるんです」

「…………ちよつといい？ いろいろ言いたい事ができた」

「え…………？」

「確かにアンタは自分で言うように何でも出来ちゃうかもしれない。でも、それに顔を使い分ける必要があるのかつてのがすーごい微妙なわけよ。ね、お嬢？」

「ええ。どうにも解せませんわ」

「なに？ 今まで積み重ねてきた委員長なイメージが崩れるのがイヤだから？ それとも、こーゆーことやってるのがバレたらマズい人がいるとか？」

「……………」

「ま、アタシはなんでアンタがそーしてんのかがわかったからこれ以上は追求しないけれども、これだけは言っておくわ。…………この世は一人で渡り歩いて行けるほど甘くはないわよ」

それだけ言い残すと、その女性は去っていった…………が、すぐに戻

ってきた。

「あつと、言い忘れたけど、アタシの名前は原田みさきっていうの。なんかあつたらここに来るか、この連絡先までね。ほれ、お嬢のもちよーだい」

みさきと名乗ったその女性は樹里に名刺らしきものを2枚手渡し、それぞれについて説明する。

「これは、このキレイなおねーさんの名刺。南野優香っていうの。なんかアンタら似たもの同士っぽいから、話してみたら？」

合計2枚の名刺を受け取った樹里は、その2枚をまじまじと眺める。

「原田……？　もしかして！　……あのっ！」  
「なーにー？」

「みさきさん……って、もしかして弟さんがいらっしやいます？」

「いるわよ。さっきも言ったけどね。……あー、もしかして同じクラスだったりする？」

「はい……恐らく。弟さんの名前……原田海斗くん、ですよね？」

「あつたりー。なんだ、アンタけっこうこの常連と知り合いなんじゃん。……そーだ！　アンタも常連になっちゃえば？」

「あら、それは良い考えですわね」

「そうだね。そうすればうちの儲けが……」

「うっわ、やらしんだ！　ジュリー、あんな大人になっちゃダメだかんね！」

「……ジュリー？」

樹里は突然呼びなれない名で呼ばれ、一瞬戸惑った。

みさきはウインク交じりに、その呼び名について説明をした。

「アンタのあだ名よ。あ・だ・な！　今まで呼ばれた事なかったっしょー？」

「は、はい……。名前以外の呼ばれ方なんて、委員長以外には……」  
「だしよー？　……これが、アンタがどんなに頑張っても今まで手に入れられなかったものよ」



「……？ あだ名が、ですか？ それなら委員長が……」

「ちーがーうーわーよ！ そのあだ名を考えてくれる、友達！ わかるでしょー？ 友達ってのは、てめえ一人じゃできないの。自分と相手の間に友情が芽生えなきゃ、できないの！」

「はっ……！」

彼女の言葉は樹里の心を打った。自分は何でも一人で出来ると思いでいたが、『誰かと友情の関係を結ぶ』ことは自分一人では出来ないというのを思い知ったようだ。

樹里はその言葉を心に刻み込むと、カウンターの3人の前に歩み寄って礼を言った。

「みなさん、ありがとうございます！ 私が……間違っていました。明日から……勇気を出してクラスみんなと関わっていこうと思います！」

「あら、そうですね？ ……ふふっ。それでは、あなたがこの店の常連の一人となる日を、心よりお待ちしておりますわ」

「アタシらの前でそー言えたんだから大丈夫よ。がんばなさいね！」

「はい！ 本当にありがとうございます！ ……では、今日はもう帰ります。また……来ます！」

そう力強く言い残すと、樹里はカフェを出て行った。

「あっ、そうだ。ここって何ていう名前だったけ？……Hexagramか。よし、覚えたぞ」

翌日、樹里は学校での顔のまま家を出る。しかし、その気になれば学校でも素顔を晒す覚悟は出来ているようだ。

そして、ゆつくりと教室のドアを開ける……が、まだ早すぎたのか、誰一人として来ていなかった。

「あちゃ、ちょっと早かった……。仕方ない、ちょっと待つか」

樹里はメガネだけを外し、机に突っ伏してしまふ。……この行動

は、昨日までの彼女にはなかったものだ。そして、数分もしないうちに眠りに就く。

樹里が眠ってから5分後、ようやく少しずつ生徒が集まってきた。彼らは、あの樹里が机に突っ伏して寝ているという、彼女からはとても考えられない行動を取っている事に驚きを隠せない。

中には小声でその事について話していたり、携帯のカメラで撮影する者もいた。

その音が聞こえたのか、ゆっくりと体を起こす樹里。そして、普段通りの口調で言い放つ。

「ん……っ。なに？ 私が寝てたのがそんなに珍しいの！？ 私はパンダか。寝てるだけで人が寄ってくるパンダか！？」

その語気鋭い声に驚き、蜘蛛の子を散らすように去ってゆく生徒達。

だが樹里は、それを言ってから後悔していた。

（あーもう、私ったら何でまたああいう事言うかね。昨日、みんなと打ち解けようって決意したのに……！）

しかし、言ってしまったものは変えられないのでおとなしくメガネをかけ直し、ただ時間が過ぎるのを待っていた。

……その時、女子生徒が3人まとまってやってきた。都と果緒梨、そして瑞奈だ。

（……はっ！ 神崎さんに青山さん、それに橋本さん！ そういえばあの子たち、昨日ゲーセンにいたっけ……。よし、ちょっと聞いてみよう！）

樹里はさらに勇気を振り絞り、3人に声をかけようとした……が、出来なかった。彼女らは教室に着く前からずっと会話を続けており、とても他人が入る余地などなかった。

ましてや今まで接点がない樹里が入り込む事は、それこそ不可能に近かった。

（ダメだあ。あれじゃとても入れないや。……チャンスはまだある

はずだ、そこを見逃さずに……！」

結局何の進展もないまま、昼休みに突入してしまう。

（ここだよ、樹里。『いっしょにお昼食べよう』って言うだけなんだぞ！）

昼休みでも、やはり瑞奈たちは一つの場所に集まっている。

樹里は昼休みでも他の誰かと交わる事はなかったが、今初めて他の誰かの場所に落ち着こうとしている。

そして、ついに彼女の口が開かれた。

「……あ、あのっ！」

「ふえっ？ あっ、藤堂さん。どうしたの？」

「あ……の……えっと……。い、いっしょにお昼どう……かなって……。う……」

「えー？ 委員長とかよお。どういう風の吹き回しだ？」

「う……。ダメ……かな……？」

「そんな事ないけど、どうしたの？ いつも一人だったのに」

「……ごめんなさい！ やっぱり……いい！」

場の空気に耐えられなくなった樹里は、一目散にその場から去ってゆく。

「あっ！ 藤堂さん！」

「なんなんだあ？ いったい」

「もー、みやびょんがヘンなこと言うからよ？」

「がう……だつてえ……。おれ、あいつ苦手だよ。いっつも気に障るような事言ってきたやがるしよお」

「確かにね……。でも、今までの藤堂さんだったら絶対今のようない事しなかったと思う。ホントにどうい風吹き回しかな？」

瑞奈たちが樹里の行動に疑問を抱く中、当の本人は屋上に来ている。

「あつっう……。はあ、やっぱダメだったか……」

強い日差しを避けるように壁際を伝って歩く樹里。そして、手近なベンチに腰を下ろす。

「うわ、ここもあつつう……。……。食べよ。おなかすいた……。」

結局、この日も一人ぼっちの昼食になる……。……。と思ったら、彼女の視界に一人の男子生徒が入ってきた。

「ん、あれ？ 委員長か？」

「風間……。くん。ここにいたんだ」

「まあな。委員長もここで昼メシ？」

爽太は樹里の問いかけに答えながら、自分もベンチに腰掛ける。

「う、うん……。」

「なんだよ、ちゃんと会話できんじゃないか」

「えっ……。？」

「だってさあ、委員長って必要な事以外なんもしゃべってないじゃないか。てつきり感情とかそういうのないもんだと思ってた」

その言葉に、樹里は力チンと来てしまった。

「ちよつとそれ、聞き捨てならないな。私に心がないだって？」

「ちよ、いや、違つて。何もそこまでは……。」

「同じだろ！？ だったらこつちも言わせてもらうけど、私だってあんたのこと最初見た時は女の子かと思っただけだから。女の子のくせに学ランなんか着ちゃって何考えてんだ、って」

「……。っ！ お、オレは……。男だ……。」

女の子扱いされる事を極端に嫌う爽太は、この時も樹里の言葉攻めに屈してしまった。

「だらしない。この程度で落ち込むなんて。……。心がないって言われる方がよっぽどキツイよ」

そう言い残し、食事も残したまま屋上を去る樹里。しかし彼女はまたも自責の念に駆られていた。

（あーもう、どうして私って素直になれないの！？ あんな憎まれ口まで叩いて……。）

複雑な気分のまま教室に戻り、残った昼食を片付ける樹里。そし

て、次の授業の開始を待った。

放課後……。樹里は三たび勇気を振り絞る場面に直面した。始業時、昼休みと連続で失敗しているので、今度こそという思いも強まっている。

そして、またも瑞奈たちに声をかける。

「……あ、あのっ！」

「藤堂さん？ 今度はどうしたの？」

「えっと……あの……。い、いつしよに……帰らない……？」

「え……？ う、うん、いいけど……。いいよね？」

「あたしもいいけど……。どしたの？」

「……うん。どうしたってわけでもないんだけど……た、たまには誰かと帰るのも……。悪くはないんじゃないかな、って……」

煮え切らない態度の樹里に、都が舌打ち混じりに割り込む。

「……で、なんでおれらなわけ？ 他にもいるじゃねえか」

「う……」

(言うんだよ！ 昨日ゲーセンにいたよね？ って！)

「うん……。えっと、昨日……。さ、みんな学校帰りにどこか行っただでしょ？」

「げ、なんでバレてんだよ！？」

「実は昨日ね、みんなを見かけたの。声はかけられなかったけど……」

「えっ……。？ じゃあ藤堂さん、もしかして……？」

「うん。私も……。ゲーセンにいたんだ」

「ええええええええええええっ！？ マジで！？ マジで委員長ゲーセンにいたの！？」

「う、うん。……驚いた？」

「そりゃ驚くぜ、なあ！？」

都が後ろを振り向いて同意を求めると、果緒梨も瑞奈も首を縦に振る。

「……この際だから言うけど、私、昨日あのゲームで神崎さんと戦って勝ったよ」

「は！？ あのゲームって、格ゲーのあれか！？」

「うん」

「ウソだよ。確かに都ちゃんは女の子に負けちゃってたけど、藤堂さんじゃなかったと思うよ……？ 確かにおつきい体の子だったけど、藤堂さん以外にもいると思った……」

「ああ、それはね……。ちよつと待ってて」

瑞奈の指摘を受け、樹里はメガネを外す。同時に結わいていた髪も解いた。

彼女らの前には、先ほどとは別人のような樹里が現れた。

「……すっげえ！ まるで違う奴みてえだ！」

「え！？ ちょ、マジで！？ え、このメガネなしで見えんの？」

「それ……伊達なんだ。度が入ってないの。かけてみな？」

言われるがまま、果緒梨は樹里のメガネをかける。……しかし彼女の目の前の光景は何一つ変わらなかった。

「あー、マジだわ。ありがと、ほい」

「……うん。この顔だったら昨日見たかも。でも、まさか藤堂さんだったなんて……」

「ごめんね、だますつもりじゃなかったんだ。ただ……私のイメージが崩れるのが怖くて……。本当はすっごく遊んでるんだけど、みんな私は委員長だと思ってるし……」

「う、うん……。本当は委員長でもなんでもないのにね」

「その期待というか、イメージを裏切りたくなかったし。だから、学校から出たらこっちの顔を使って、私だと分らないようにしてたの。……でも、そんなに変わる？」

「うん……。言われてみればそんなには変わってないんだよね。

でもやっぱり、藤堂さんは委員長ってイメージが強かったから、こっちの藤堂さんもいるって言われても信じがたいな」

「でもよお、だったらなんで今まで隠してたんだよ？」

「だから……。自分のイメージが崩れるのが怖くて、それでなかなか切り出せなくて……」

「そうじゃねえよ。なんで怖がる必要があるんだって言うてんだよ。おれらがゲーセンとかで遊んでる委員長を後ろ指差して笑うても思ってたのかよ!？」

「それは……。なければ、いいかな……。って」

「少なくともおれらは絶対にそんなことはしない! なあ? ム力つくことされたからって仕返しだなんて最低な奴のすることだしな!」

再び都が2人に同意を求めると、やはり2人とも首を縦に振る。

しかも先ほどよりも、深く。

その時、瑞奈がゆっくりと口を開く。

「藤堂さん、もういいんだよ。強がらなくても……。本当は、わたしたちと仲良くなりたかつたんでしょ?」

「……。うん。今までみんなにあんな態度取ってきて何だ今更って感じだけど……」

「まあ、確かにそうだな」

後方から声がしたかと思うと、その声の主はいつの間にか樹里の目の前に来ていた。……。爽太だった。

彼は、樹里を見上げながら言う。

「委員長さんよ、そういえばオレが転入してきた時からずっとつかかってきたよな」

「う……」

「今日だってそうだ。オレは女の子扱いされんのダメだって知っててあんな事したよな?」

「……。ごめん」

「ごめんて済む問題かあ? 仮面委員長さんよ」

「爽太くん……。もうやめてよ……」

「……。ちっ。チビ奈がそういうなら……。わーったよ、やめてやんよ。女をいじめるのは性に合わないしな」

「……なんだよ、いつまでも根に持つちゃって」

「あんだと？」

樹里がつい口を突いて出してしまった言葉を、爽太は聞き逃さなかった。周囲の空気は一気に重くなってゆく。

「こつちが先に折れてやったのに、またそついう態度取るか？ フツ」

「折れてやった？ そんな風になら目線でも言うのやめたらどうなの？」

「バカ言つてんじゃねーつての。上からも言われてんのはこつちだつての。それにそついうことは、委員長の仮面被った遊び人だけに言われたくねーな」

「……つー!!」

限界だった。樹里は、爽太に向けて平手打ちを見舞おうとした。

……しかし、寸前のところで思いとどまった。左手を、右手が必死に抑えていた。

爽太は、そのあまりの迫力により尻餅をついてしまう。

「……いい気味だよ。ダメ人間はダメ人間らしく、そつやって地べたに這いつくばってるのがお似合いだ」

冷たく言い放ち、教室から去ろうとする……前にもう一度口を開く。

「やつぱり私は……みんなとは相容れないのかも。残念だけど……。それじゃ」

その場の全員の注目を浴びる中、樹里は今度こそ教室から出てゆく。全員、ただ啞然とするしかなかった。

「藤堂さん……」

「見たかみんな、あれが奴の本性だぜ。あれをまともに食らってたら、オレどうなってたかわかんねー」

「……いや、今回はお前が悪い」

「は!?!? なんてだよ都!」



「委員長はね、勇気を出してあたしらに自分のもう一つの顔を明かしてくれたんだよ？ 爽太くんもちつとは見てたっしょ？」

「見てたけど、それとこれとは話が……」

「今までずっと隠してきた事を明かす辛さ……あたしもよくわかんないけど、その勇気を踏みじめる権利は誰にもないはず」

「おれが代わりに……お前を殴りてえくらいだ。委員長の気持ち……どうしてわかってやれねえんだよ！」

「……わかった！ わーかった！ 悪かったよ！ ……こういう時、やっぱり謝りに行った方がいいの？」

「うん。……今なら間に合うよ。爽太くんがちゃんと謝れば、きっと許してくれるよ」

「サンキュー、チビ奈。……悪いけど、これ持ってって。どうせまたカフェ行くんだろ？ 委員長探して、謝れたら取りに行くからさ」

「うん！ がんばってね！」

瑞奈に自分の荷物を預けた爽太は、さっさと行ってしまふ。

(爽太くん……)

学校を出た樹里は、教室での光景を思い返していた。

(……あれはあっちが悪いんだ。また蒸し返すから……)

先ほどの行為を後悔しながらも、自分にそう言い聞かせることで無理矢理に納得して一直線にどこかに向かう。

向かった先はもちろん、昨日も行ったゲームセンター。

「……今日は20連勝くらいしないと気が済まないな」

運がいい事に今日はあまり混み合っておらず、すんなり自分の番が回ってきた。それから1時間以上は、彼女の独壇場であった。

「さて、どこを探しゃいいんだ？」

樹里を探しに出たのはいいが、爽太には樹里の行きそうな場所の見当がついていなかった。……しかし、先ほどの言葉を思い出し、行き先を特定した。

「そう言えば確かゲーセンに行つてたんだっけか、昨日は。ホントにいるのか……？」

半信半疑ではあるが、近くのゲームセンターに入つてみる爽太。人波をすり抜けつつ、樹里を探す。

「うわ、ホントにいるし！」

彼女は意外と簡単に見つかった。昨日と同様に、次々と対戦相手を退けている。

爽太は恐る恐る樹里に近づこうとするも、彼女の発する気迫とも呼べるものに気圧されて近づけなかった。

「ホントに別人みたいだな。仕方ない……終わるまでなんかオレもゲームやって待つてるか」

爽太は樹里に声をかけるのをあきらめ、一時的にその場を離れる。しかし、樹里の方が先に彼に気づいていた。

(……？ あれは風間くん？ 何しに来たんだ……って、いけないいけない、集中しないと負け……あーあ、一本取られちゃった)

爽太は1時間以上は時間を潰したはずだが、それでも樹里には未だに席を立つ様子が見られない。

他の相手も、樹里と戦つても勝てないと悟つたのかほとんど寄り付かなくなつてしまった。

「……なんだよだらしない。まだ20人抜きしてないってのに……」  
吐き捨てるように言いながらあきらめて席を立つと……彼女の目にクレイゲームに挑戦している爽太の姿が映る。

「あれ？ やっぱり風間くん……。……あーもー違う！ ヘタッピだな、見てらんないよ！」

そう言いながらも彼の一挙手、一投足が気になる樹里。

実は、彼女は格闘ゲーム以外にクレイゲームも得意としており、部屋には大小さまざまのぬいぐるみが置かれているのだ。

……そして、爽太が悪戦苦闘しているのをいよいよ見ていられなくなつた彼女は、たまらず彼の元へ歩み寄つた。

「……ちよつとどいてな！」

突然声をかけられた爽太は、目を白黒させる他出来なかった。

「どれ取りたいの？ 私がやってあげるから、お金！」

「あ、ああ……。ほい」

「うん、確かに。……で、どれ？」

「えつと……。あの奥の方にちよつと出てるのあるじゃん。あれいける？」

「私を誰だと思ってるのよ。黙って見てなつて！」

厳しい口調で言い切ると、爽太もそれで降口を挟まなくなった。

その間に樹里はアームを目標地点まで持ってゆき、ボタンを放す。

「これで大丈夫なのか？」

「この私がこれでいいって決めたことよ？ 間違いなはずがないじゃない」

自身ありげに言い切る樹里と、不安が拭い去れない爽太。

しかし数秒後、爽太は樹里の手元に落ち着いたためいぐるみを見て、改めて彼女の凄さを体感するのだった。

「すっげー！ オレが5回以上しくじつたのを一発かよ！」

「ざつとこんなもんだよ。……はい」

「え？ いいのか？」

「何言つてんだよ。だって……風間くんのお金で取つたんだよ？」

「あ、そうだったっけ。サンキュー」

「……。さっきは……。ごめんなさい。いきなり殴ろうとして……」

「いや、オレの方こそ……。言いすぎたよ。ごめんな」

「……お互い様ってことでいいのかな？ じゃ、この件はこれでおしまいつて事でいい？」

「うん、いいよ。……さて、用も済んだし、カフェ行って荷物取りに行かぬーとな」

「え……。？ カフェって、もしかしてHexagramってお店？」

「そう……。だったと思う。ああ、多分そこだ。なに？ 委員長も知ってるの？」

「うん。たまに行くよ。……ていうか荷物って？　そういえば手ぶらみたいけど」

「ああ、チビ奈に預けてるんだよ。多分都とかもいんじゃない？」

「……私も行っついていい？」

「え？　いいけど……」

「いいのか！？　……あ、ごめん。一人ではしゃいじゃって。……じゃ、私先に行ってるから！」

「あ、おい！　委員長！　……つたく、何なんだよ……」

（これで……あの子たちと打ち解けるチャンスがまた舞い込んできた事になる……！　今度こそモノにしなくちゃ……！）

樹里は、それこそ脱兎の勢いで外へと駆け出していった。

どこまでも不器用で、自分を出してゆけない少女、藤堂樹里。だが、彼女の仮面は、間もなく砕け散る。

## 第2章：理由

ゲームセンターで樹里と別れた爽太は、彼女に取ってもらったぬいぐるみを自転車のカゴに入れてカフェへと向かう。

「ふー、すっかり遅くなっちゃったな。カフェ閉まってなきゃいいけど……」

時間はすでに午後6時を回っている。

カフェHexagramの営業時間は一応午前10時から午後7時までとなっているが、店のマスターの気まぐれにより早く閉まる可能性もあるので、自然と急ぎ足になっていた。

そして10分後、爽太はカフェに到着した。幸い、まだ閉店準備も始まっていないようだ。

数人に埋められたカウンター席を見渡すが、樹里の姿はない。

「やあ、いらつしやい。遅かったね」

「うん、まあ……。委員長待ってたらこんな時間になっちゃった。

でもまだ来てないみたいだな」

「そう……。だね。まだ来てないね。あれ？ それどつたの？ そのぬいぐるみ」

「これか？ 委員長に取ってもらったんだ。あいつすげーよ！ 格ゲーだけじゃなくてクレイニングゲームもうまいんだぜ」

「ちえーっ、いいなあ。おれも今度取ってもらおうと」

「でも驚いたよ。委員長もここ知ってるなんてさ」

「そうなの？ オレまだ会った事ないんだけど、どうなの？」

興味深げに尋ねてくるのは、この店の常連中の常連でもある秋野圭輔。

この春無事に専門学校を卒業したはいいが、定職に就く事ができないままフリーターとして過ごしている。

しかしながら世渡り上手なうえ人懐っこい性格のため、特に不自

由もなく生活できているらしい。

彼の疑問には、爽太の代わりに果緒梨が答えた。

「えっとねえ、優香さんをさらにキツくした……ってのが一番しっくりくるかも」

「も〜かおりゆん！ お姉様を悪く言わないで！」

「ちょ、違うわよ〜。ものの例えよ」

「げ、あの優香ちゃんをさらにツンツンさせたような子なのかよ。

……んじゃあ、初めてここ来た時の都ちゃんみたいなものか？」

「がう……。おれ、そんなにツンツンしてた？」

「ああ、してた。オレと潤を見事に震え上がらせてくれたっけ。や

ー、懐かしい」

「がう〜……」

「……ま、そんな時があつたからこそ今の都ちゃんがあるわけだな。ギャップが激しい方がいいって考えもあるんだし」

「どういうこと……？ それ、潤さんもそうなのかな……？」

「ああ。っーかあいつはむしろそれを重要視してると思うぜ。試みにさ、ポロクソに罵ったあとそつと隣に寄り添ってみな」

「すると、どうなるんだ？」

「さらに都ちゃんを大切にしてくれるはずだぜ」

「ホントか！？ 信じたぜ！ がうう〜、早く試したい〜！」

「うげっ！ あの都が女の子らしいぜ！」

「がう……。う、うるせえよ……。なんだよ爽太、まさかお前、おれに気があるとかじゃねえよな？」

「まさか！ だーれがお前みたいな男女と！」

「てつめえ！ 言ったな！ あーわかった。爽太お前、おれと潤さんがらぶらぶなのがうらやましいんだろ！ ……だったらよお、お前もさつさと彼女作れよ！」

「ぐっ……。ま、まだいいんだよ！ あ、焦っても仕方ないし……」

「そつだあ！ 同志・風間爽太よ！ まだ女にうつつを抜かすのは早いぞおおお！〜！」

「は……はいつ！ 圭輔の兄貴！」

「はっはっは、まだ本気になれないのかキミは。……お？ 誰か来たみたいだな」

マスターがドアの方に目をやると、瑞奈たちと同じ服を着た少女がいた。

「あ、藤堂さんだ」

「……」

樹里は小さくお辞儀をしてから、ドアをくぐる。

「へー、あの子がうわさの樹里ちゃんか。……でも言うほど気難しそうじゃないじゃん」

「学校以外では、ね。ね？ 藤堂さん？」

「えっ？ ……あ、さっきぶりだね、橋本さん」

「う、うん……。なんだか変な感じだね。学校じゃない場所でも会えるなんて」

「そうだね。私もまさか感じてしまったよ。……そちらの方は？」

「オレのこと？ オレは秋野圭輔。一応、みんなの先輩ってことになる」

「それと、このカフェの寄生獣だね」

「ちよ、マスター！ ものすごい表現するなあ……」

「あれ？ ごくつぶしの方がよかった？」

「どっちも却下！ ……まあ、ここにはほぼ毎日来てると思うから見かけたら声かけてやってくれよ。いろいろ相談に乗ってやるからさ。人生相談でもいいし、恋愛のことでも……」

「はいはい、僕の仕事を奪わないように。……とまあ、これがこの日常さ。どうだい？」

「なんだか……すごく不思議な気分です。私もそうだけど、みんな学校とは違う一面をここでは出してる……みたいなの」

「へへっ、うまい事言うじゃないか。さすが委員長だな！」

都が感心しながらうなずくと、何かを決意した瑞奈が樹里に話しかける。

「……………ねえ、藤堂さん。わたしたちと……………友達になろうよ！」

「えっ……………？」

「ううん、そっちだってわたしたちと仲良くなりたいでしょ？」

ほら、今日何度が声かけてくれたじゃない」

「う、うん……………。理由はね、昨日ゲーセンにみんながいたのを偶然見つけちゃったから、それで……………」

「大丈夫、もう疑ってねえよ。にしてもよ、委員長メツチャ強えじやんよ。今度は負けねえからな！ またやろうぜ！」

「うん、もちろん。……………ごめんね、神崎さん。あなたが来た時とか、いちいち気に障るような事ばかり言っちゃって……………」

「ああ、あれのことか。正直かーなり力チンって来たけどよ、そんな風に謝られちゃなあ。大丈夫、もう気にしてねえよ。それよりもさ、これから仲良くやってこうぜ。な？」

「うん！ よかったあ……………。私うれしいよ……………」

「ほら、仲直りの印に握手しようぜ」

都は樹里に向かって右手を差し出した。樹里も何も言わず、その手を取った。

「よかったじゃんか、委員長。……………いや、もうこれじゃよそよそしいな。なんかいい呼び方ないかな？」

「……………ジュリー」

「ん？」

「えっと……………。私の名前が樹里だから、それをちよつと変えてジュリー……………どうかかな？」

「いいじゃねえかそれ！ 覚えやすいし。もしかして、誰かにつけてもらったのか？」

「う、うん。みさきさん……………わかるかな。その人に……………」

「なんだ、あいつかよ。ま、いいか。改めてよろしくな、樹里ちゃん」

「はっ、はい！」

何故か圭輔は樹里をあだ名で呼ぶことはなかったが、こうしてカ



フェにはまた新たな仲間が加わることになった。

「……あ、そうだ。風間くん？」

「なによ？」

「こうして私もこの常連になれたわけだけど……風間くんもこないだ私と同じように常連になったわけでしょ？ その時はどんな風だったのかな……って」

「ふくん……。どうでもいい事が気になるんだな。えっとな……」  
樹里に尋ねられた爽太はゆっくりと語り始める。

それは、彼が汐野学園に転入してから一週間あまりが過ぎたある日の事だった。

「よっ、チビ奈！」

すっかりクラスに溶け込んだ爽太は、放課後に幼なじみの瑞奈に声をかける。

「あっ、爽太くん。おつかれさま。どうしたの？」

「なんかオレ、すっかり都和仲良くなっちゃまってさ、遊びに行こうって誘われたんだよ」

「わあ、よかつたね！ あの子、一緒にいると楽しいもんね」

「いや、ありゃきつとオレを誘ってた。そうに決まってる、うん！」

「何言ってるの？ あの子、彼氏いるよ？」

「……え」

「うん、いるよ。今、一緒に2人で暮らしてるんだよ」

「マジかよお！ なんだよ、オレは遊びだったのか!？」

「……ある意味遊ばれてるのかも」

「何か言ったか？」

「なんにも言っていないもん。あ、それよりもさ、都ちゃんと遊びに行くならわたしとかおりゅんも一緒だよな？」

「多分な。あいつが売却済みって知らなかったら……お前ら差し置いてたかも知れないけどさ」

「なんだあ？ おれがどうかしたかあ？」

「あー、都ちゃん！ あのねあのね、爽太くんって都ちゃんのことか……」

「こら、チビ奈！ よけいな事言うんじゃねー！ うりゃー！」

「ひゃんっ！ いたいよあ〜……。ぶつことないじゃん……」

「あっ！！ てめえ爽太！ 瑞奈をいぢめる奴は、おれが許さねえ！」

「都は、瑞奈をひっぱたいた爽太に向けて関節技を仕掛ける。

「ちよ、いでーって！ あ、でもなんかいい感触のが当たってる気が……」

「ひっ！？ お、おれのないすばでいに無断で触れやがって！」

「そつちが先に仕掛けてきたんだろーが……って、うぐぎが……！ ギブギブ！ ……おー、原田！ いい所に来た、助ける〜！」

爽太は、ユニフォーム姿でその場を通りかかった海斗に助けを求めたが、彼は爽太に見向きもせず言い放つ。

「オレっちはこれから部活に行くんでっす。女の子にうつつを抜かすお前のような暇人と違って、とつてもとつても忙しいんでっす」

「おーい海斗、早くしろー！」

「おうよ！ んじゃ、そういう事で」

海斗は、廊下から聞こえる自分と呼ぶ声に反応してさっさと行ってしまった。

「くっそ……あんにやる！ 薄情者めっ……！」

「がんばるよなあ……あいつ。竜造くんも……がんばれよ……」

未だに関節技をかけ続けていた都は不意にその手を離し、小さく何かを呟いた。

爽太は都のその変化を見逃さず、自由になった途端に聞いていた。

「あれあれ？ 都よ、どうしたよ？ ……はは〜ん。さてはお前、さっき原田を呼びに来た奴のことが好きなんだな？」

「がう……。それも正解だけど、竜造くんは……。彼氏じゃねえよ……」

「み、都……？」

「恥ずかしい……。がうう……」

「うっわ……。なんか都がすっげー女の子っぽく見える……」

顔を真っ赤にして照れてしまった都を初めて見た爽太は、彼女の新たな側面を見出したようだ。

そんな2人のもとに瑞奈が歩み寄り、戸惑い続ける爽太に声をかける。

「うん。都ちゃんって普段は突っ張ってるように見えるけど、本当はすっごく女の子っぽいんだよ」

「そう……。みたいだな。なんか変なこと聞いちゃったぜ」

都の照れは勢いを増し、すでに耳まで真っ赤にしている。

そんな彼女を見かねた爽太は、ばつが悪そうに言った。

「悪かったよ、変なこと聞いちゃって……。……そうだ、今日は遊びに連れてつてくれるんだろ？ どこ行くんだよ、あまり遠いとこじゃなきゃついてやるぜ」

「うん……。ありがとな。瑞奈とかおりゅんも一緒だけど、いいよな？」

「ああ、もちろん。多いほうが楽しいじゃんよ。で、どこ行くの？」

「おれらがいつも行ってる喫茶店っつーか、カフェ」

「え？ 別にいいけど、なんでまた？」

「わたしから言わせて……。……爽太くんにはわかってほしいんだ、わたしたちの放課後の過ごし方とか。これから一緒に遊びに行く事も増えると思うし」

「……。まあ、チビ奈がそう言うんなら行くしかないな。お前は嘘つかねーし」

「よかつたあ。断られるんじゃないかって、ちょっとドキドキしてたんだよ？」

「なんでよ。断る理由なんかないじゃんか。……って、青山さんも

行くつってたよな？ どこにいんの？」

「かおりゆんならとつくの昔に行っちまったぜ。席取っといてくれるってさ」

「あ、そうなの。しかし彼女、やる事がいつつも早いよな」

「うん。それがかおりゆんだから」

「その一言で片付けられちゃうのか……。よし！ じゃあ行くか！」

こうして爽太は瑞奈たちに連れられて、彼女らがよく利用するというカフェに向かう事になった。

他愛もないおしゃべりをしながら歩く事20分少々、彼らは目的地に到着する。

「よし、着いたぜ」

「ここ？ なんかパツとしない店だな……」

「悪かったね、パツとしてなくて」

「うわっ！ あんた誰だ!？」

「僕かい？ 僕はこの店のマスター。それ以上でもそれ以下でもないよ」

爽太が素直に店の感想を言うと、どこからともなく長身の男性が現れてやや引きつった笑顔を向けながら自己紹介をする。

彼こそがカフェ『Hexagram』の店主、そしてただ一人の店員であるマスターこと、増田六。

店名も、マスターという呼び名も彼の本名からつけられているが、何故か彼自身はめったに本名を明かす事はない。

爽太は、自分とあまりにも身長差のあるマスターを見上げながら言う。

「しかしでけー人だな……」

「そういうキミはずいぶんと小さいな。……おっと、人の体型の事についていろいろ言っではいけないな。ささ、店の前で立ち尽くしてると他のお客さんに迷惑だから、入った入った」

マスターは爽太たちを店の中に入れ、席に案内する。

店内に客はほとんどおらず、かなり暇をもてあましていたようだ。

「マスター、今日はずいぶん余裕があるみたいだね」

「ん〜……そうだね。ま、その方がいいんだけどね」

「いいのかよ!? そんなんでやっていけないのか? ……その、おれの学費も出してくれてるのに……」

「あー、気にするな。千奈美さんの収入もあるし、ここは僕の店ローンも払い終わってるしあとは光熱費くらいなもんさ。だから大丈夫」

「……え? 都、お前この人に学費出してもらってるの?」

「うん……。だから、おれがこうして学校行けるのもマスターのおかげなんだ」

「ま、そういうこと」

「なんでまた?」

「そういえばお前には話してなかったな。……おれ、ひとりぼっちだったんだ。親戚を頼りにいろいろ渡り歩いてきたけど次々に死んじまって、気づいたら誰もいなくなってた」

ゆっくりと自分の境遇を話し始める都。爽太も彼女の目を見据え、真剣に聞き入っている。

「そんな中で行き着いたのがここで……。マスターに心を見抜かれて、ここに住まわせてもらうことになった」

「え? じゃあ今もここから通ってるの?」

「いや、違う。それについては別の話があるんだ。……おれの彼氏、古賀潤さんっていう人がいるんだけど、今はその人の家に住まわせてもらってるんだ……」

自分の彼氏の話に入ると、都は再び顔を耳まで真っ赤にして続ける。

「あ、あの人すぐどっか行っちゃまうし、なんか頼りねえけどよ、……そ、その、おれにとっては……世界でいちばんの人なんだ……。が、がううう……」

「み、都……」

「や〜ん、みやびよんつたらも〜！」

「うらやましいよ〜！」

「……んで、今はその潤さんの家から通ってるってこった。わかつたか、爽太……って、あれ？」

話を終え、爽太の方を向いた都だが……彼は呆然としており、反応が返ってこない。

「う〜ん、爽太くんにはちょーっただけ刺激が強かったのかな？」

「爽太くん……」

「と、そういうわけ。わかった？」

「う〜ん……。なるほどなあ。納得したよ。……神崎さんがマスターに出資してもらってるってのも」

「な……なんだよお。別にいいだろ？」

「あ、ごめん。そういう意味じゃなくて……。やっぱりマスターはすごいんだな、って」

「ああ。オレもこの人にだけは敵わないって思ったね」

「はっははは。突然どうしたんだい、圭輔くん？ 褒めても何も出ないぞ？」

「わかつてる。……オレ、何だかんだ言っであんたにや凄い感謝してるんだぜ。……これからもいろいろ相談事持ちかけるかも知れなけれど、よろしく頼む」

「わかつてますよ。そうだなあ……。キミはやはり定職を見つけるのが先決だろうな」

マスターがそう言うと、圭輔は突然目をそらしてしまった。

やはり今のフリーターという境遇は、本人にとっても耳の痛い事実のようだ。

「あ、僕に就職活動のこと聞いてもあまり意味がないと思うぞ。そうだなあ……。絵実梨ちゃんに聞くといい。だろう？ 果緒梨ちゃん」

「そーねー……いんじゃない？」

「え、どういうこと？」

「あー。絵実梨ってのはね、あたしのおねーちゃんの事。今年、社会人1年生なんだ」

「そうなんだ……。あ、就職活動のことならその人に聞いてって意味ね」

「そゆこと。おねーちゃんも今の生活楽しんでるみたいだし、いろいろタメになると思うよ？」

「よし！ 今度時間見つけて絵実梨さんと話してみんぜ！ ……あ、もしかしてもう飲み会とかに連れてかれちゃったりとか？」

「う……ん……」

「え、今度はなに？」

「……おねーちゃんね、もんのすごく酒グセが悪いの！ 5月の連休に新入社員だけで飲み会やったらしくてね、断りきれずに飲んじやったのよ……」

「あつちゃー、マジか。それで、どうなったんだ？」

「聞かなくても分かるっしょ？ ……大暴れよ。もうね、想像を絶するくらい。今じゃ新入社員の間で『女帝』って呼ばれてるらしいのよ」

果緒梨は恐怖に目を泳がせながらも、頑張って話を続ける。どうやら、思い出すだけでも恐ろしいようだ。

「で、帰ってきたら帰ってきたでいつものようにのんびりのろろしてんのよ。なーんにも覚えてないらしい……。本人にその自覚と記憶が全くないのが一番タチ悪いわね」

「そ……そうなんだ……」

「いつもはさ、見ててイライラするのも忘れるくらいにのんびりのろろしてるのに、お酒飲むとアレだもん。両極端過ぎるっていうか……ねえ」

「マスター、くれぐれも絵実梨さんには酒出すんじゃねーぞ！？」

「わかってるよ。我が家を壊されでもしたら堪ったものじゃない」

「……まーでも、あたしはそんなおねーちゃんが何だかんだで好き  
なんだけどさ」

「なるほどなあ……。今気づいたけど、なんかみんな自分の事教え  
てくれてるよな」

爽太は、友人たちが聞いてもいないことを次々に教えてくれるこ  
とに疑問を抱いていた。

その疑問を素直に伝えると、果緒梨が悪戯っぽく笑いながら真相  
を明かした。

「あつ、気づかれた。いやね、爽太くんって女の子に間違われるの  
すつごく嫌うじゃない。瑞奈も知らないって言うし、なんでそうな  
っちゃったか教えて欲しかったのよね」

「だからか……。何もこんな回りくどい事しなくても、ストレート  
に聞いてくりゃよかったのに」

「ちがくて、そのまま聞いても教えてくれるとは思わなかったわけ  
よ。だからあたしらの事話したらそっちも話してくれるんじゃない  
かなーって、さ」

「かーっ、きつたねー真似するなあ。だったら……オレも言うしか  
ねーじゃんか」

「お、言ってくれんの？ だったらほれ、決心がにぶらないうちに  
！」

「わかってるよ。今考えたら、別に隠すような事でもなかったし」

爽太はゆっくりりと、自分の過去について話し始めた。それは、彼  
がまだ小学5年生の頃まで遡る。

小学5年生ということは、爽太はもうすでに引越していたので  
瑞奈が知らないのも無理はない。

爽太はこの頃からしばしば女の子に間違えられていたが、まだ当  
時は本人もあまり気に留めておらず、軽く流していたようだ。

ある日、彼の女友達がふざけて爽太に自分の服を着せてみた事が



あった。

その姿のまま友達に見せに行つたところ、思わぬ反響があつたといふ。

その反応に味を占めたか、しばしば女装を試みるようになった爽太。

時々その姿のまま外出するようになったが、それが後々まで響く事になるうとは当時の彼は予想すらしていなかった。

女の子の姿のまま駅前を歩いていたら、見るからに不良と分かる中学生と思われる3人組とすれ違う。

彼は関わるまいと足早にその場を去ろうとしたのだが、いきなり腕を掴まれてしまった。

「ちよつと待ちなよ。一緒にどつか行こうぜー」

「やだよ！ 離してよ！」

「そんな事言わないでさあ、な？ ちよつとでいいんだから」

「やだつて言つてんだろ！？」

爽太は自分なりに必死の抵抗を見せるも、中学生3人が相手では歯が立つはずもなかった。

「元気だねえ、かわいこちゃん。んじゃ行こうぜー！」

彼は抵抗をあきらめると、不良たちに担がれるように運ばれていった。

(スキを見て逃げりゃいい……。今はとりあえず耐えておこう)

公園の片隅に担ぎ込まれた爽太は観念したように座り込んだ。

不良たちはゆっくりと近づき、嘗め回すような視線で見つめてくる。

「んだよ！ 気持ち悪いなっ！」

「ここまで来てもまだこんなに元気だとはな。よし、押さえつける！」

「……え？ ちよ、やめろよ！」

リーダー格の不良の号令と共に、2人の不良が爽太を両側から押さえつける。

残された一人はさらに近づき、スカートに手を伸ばしてきた。

「うっ……!?!」

「怖がらなくていいんだぜ。すぐ終わるから」

「やめ……っ! (バレちまう……! やめろってマジ!)」

不良の手が爽太の体に触れそうになった瞬間、彼は最後の抵抗を見せる。

その抵抗が功を奏し、彼を掴んでいた不良は手を離した。

自由を取り戻した爽太は、そのまま一目散に逃げてゆく。

「も……もうイヤだ! 二度と女装なんかするもんか! 今まで女のカッコもいかなかったって思ってたからダメだったんだ。オレは男だ! こんな顔でこんな背だけど……女じゃねえ!」

この瞬間から爽太は、事あるごとに『オレは男だ!』という事を強調するようになり、女の子扱いされたら不良たちに襲われた時のことを思い出すようになったという。

「……というわけ。わかった?」

「……爽太くん。それ……ヤバくない? いや、ヤバイべ! こんなあつげらかんと話していいことじゃないって!」

「そんな事されちまったら、そりゃイヤになるよな……。ホント悪かったよ、ごめんな」

「爽太くん……。つらかったんだね……」

彼の告白は、場の空気を一気に重くしてしまった。

「私も……謝らないといけないな。……ごめんなさい、風間くん……」

「だーっ、もういいっての。これから気いつけてくれればいいわけだし」

「う、うん……（やべ、この子かわいい……。女の子扱いされるのがイヤなら、男の子としてかわいがってあげたい……。かも）」

「ちえっ、でも勿体ないよな」。男が女の子のコスプレできるってのはすっげー貴重なのによ。そういう子が売り子にいたら今度のコミレジでも100部はカタいんだけどな……」

「……コミレジ？ 何の話？」

「あーいや、こっちの話。聞かなかった事にしてくんな」

（この人コミレジ知ってるんだ……。しかもサークル参加の方……？）

「う、うん……。でも、圭輔さんの話は謎だらけだよ。結局顕共堂のこともなんにも教えてくれねえしよお……。潤さんに聞いても教えてくれねえし、なんなんだよもう」

「ま、それだけオレは底の深い男だってこつた」

「だ〜れの底が深いってえ？」

圭輔が得意げにうそぶいていると、彼の後ろから誰かの声が聞こえてきた。

彼は慌てて後ろを振り向く。

「誰だっ！？ ……なんだよ、みさきかよ。だーかーらー、オレの底が深いって話」

「あーそーねー。確かにアンタは欲望とか煩惱の底は全く見えないわね。……って、アンタのことはどーだっていーのよスカポントン！」

「す、スカポントンって……」

「そこのちっちゃいアンタ！ 爽太くんだったけ？ おねーさん、アンタの話聞いてたんだけどね、もー涙ボロボロよ！」

「き……聞いてたんですか？」

「まーねん。……で、ジユリー。アンタ自分の秘密は話……したよ  
うね。そのツラ構えだと」

「……はい。勇気を出して……全部言いました」

「そ。ならいいのよ。みんな！ アタシからも言っておくけど、く

れぐれもこの子の事よろしくね。んじゃーね!」

それだけ言い残すと、みさきはさっさと店を出て行ってしまふ。

「何しに来たんだ……? あいつ」

「はっはっは、彼女はこの店の営業時間をちゃんと分かっているよ  
うだな」

「……あつ! もう7時! いけないいけない、また長居しちゃっ  
たね」

「そういうこと。ああ、帰るとき忘れなかったら、ドアのアレ準備  
中にしてくれないかな?」

マスターは時計を確認すると、いそいそとカウンターに残されて  
いる食器類を片付け始める。

他にも都和瑞奈が、テーブルに残された食器類を自主的に取りに  
行った。

「やあ、ありがとう」

「礼なんかいらねえよ。なんだろ、習性……とでも言うのかな?」

「はっははは! なるほどなるほど。……ほれ、片付いたから掃除  
するよ。帰った帰った。名残惜しかったらまた明日おいで」

「はい」

マスターはすでに掃除用具を手に持っており、準備万端であった。  
爽太たちも帰りの準備を整え、店を出る。そして、それぞれの帰

途に着く。

爽太は途中まで同じクラスの4人と歩いていたが、都和別れ、果  
緒梨と別れることで結果的に自分、瑞奈、そして樹里の3人となっ  
ていた。

どうやら、樹里の家は意外と近所にあるようだ。

「いやいや、まさかこうして委員長……いや、ジュリーと一緒に帰  
る事になるなんてな」

「私も想定外だったよ。風間くん、これからもよろしくな」

「ん? ああ、オレの方もな」

「……えへへ、仲直りできたね」

「そう……みたいだね。……本当に、あなたたちのおかげだよ。あ

……、ありが……とう……」

「どういたしまして。……えへっ、わたしもよろしくね、ジュリーちゃん」

こうして、爽太と樹里の間に生じていたわだかまりは解け、瑞奈の不安も一つ消えたことになる。

……しかし、彼女にはさらなる不安の種が植え付けられることになっってしまう。

それはこの直後、爽太と別れた際に起こった。

「ね、橋本さん。ひとつ聞いていい？」

「なあに？」

「風間くんのことなんだけど……」

「爽太くんのこと？」

「うん。……その、橋本さんはあの子のことどう思ってるのかな……って気になってさ」

「ふえっ……？ どういうこと？」

「……なんていうのかな、橋本さんと風間くんって幼なじみなんですよ？ ……でも、幼なじみって今でも仲良く出来るものなのかな……ってさ」

「どう思ってるかって言われても……。爽太くんは確かにわたしの幼なじみだし、いいお友達だと思ってるし……。だいいち、ジュリーちゃんがそれ聞いてどうするの？」

「……彼、かわいくない？」

「えっ……？ ど、どうしちゃったの……？」

「正直、女である私よりかわいいいな……。なんだろ、そういう子見てると、いじめたくなっちゃうわない？」

「うう……。怖いよお……」

「……橋本さん？」

「は、はひっ!？」

「本当にあの子とは幼なじみっただけ……だよな?」

「う、うん……」

「じゃあ……今あの子はフリーってことだな……。じゅる」

「ふえええええっ!？ そ、爽太くんをどうするの……? た、食べちゃダメだよ……?」

「……はっ!？ 私ったらなに言っただろ。あは、あははは、あはは……」

「ジュリーちゃん……。さっきの目は本物だったよ……? よだれも出てるし……」

「あはははは……。な、なんか私、ちょっとテンション高くなっちゃってた。あは、あはは……」

「うっ……」

樹里は突如として、爽太が気になるとも取れる発言を連発したのだ。

この時はこれで終わったが、樹里は翌日から事あるごとに爽太を気にかけるようになっていった。

「ただいま……」

「おかえり、瑞奈。今日も喫茶店行ってきたの?」

「うん……」

「どうしたんでい、元気ねーなあ! ま、いろいろ悩むことはあんだろーが、全部乗り越えてけよ!」

「うん……。ありがと、お父さん。……はあ……」

瑞奈はため息混じりに自分の部屋へと戻っていった。

そして、着替えもしないまま自分の机に突っ伏した。

「はあ……。ジュリーちゃんがあんな事言うなんて……。爽太くん……」

彼女は、樹里と爽太の名前を口に出していた。

「……っ！？ わたしったら、何言ってるのかな……？」  
言葉はそう言っている、頭の中では爽太の事ばかりが展開されている。

そしていつしか顔を火照らせ、体温も上昇させてゆく。

「やだ……。どうして爽太くんの事考えるとこんなに顔が赤くなっちゃうの……？ わたし、爽太くんのこと別になんとも思っていないのに……」

言葉にすればするほど、彼女の体温は上がってゆく。胸の鼓動も激しくなっていた。

「やだ……やだ……。どうして……？ 勉強すればおさまるかな……？」

昂ぶる気持ちを必死に抑えつつ、彼女は志望校の赤本を手に取った。

瑞奈は高校3年生。すなわち、受験生でもある。そんな彼女の目指す大学は、自分の憧れの存在である南野優香が在籍する、聖浄大学。

名前の通りに格調高い学校で、並大抵の努力では入ることなど到底不可能な難関校である。

瑞奈の学力ならば合格率は半々のようだが、それでは不安だからと、彼女はこうして空いた時間を使っては勉学に勤しんでいる。

全ては憧れである優香に近づくためであり、そのためならどんな苦勞も苦ではないというのが彼女の持論である。

……しかし、やはり爽太の存在が気になってしまふのか、何度も手が止まってしまう。

注意力も散漫になっており、母親が呼ぶ声にも反応できないでいた。

「瑞奈！ 瑞奈ったら、聞いているの？」

「……は、はひっ！？ ……お母さん？ どうしたの？」

「どうしたのって、お夕飯できたから呼んでるの。……まったく、聖浄目指すのはいいけど、あんまり根詰めて倒れちゃっても知らない

いわよ？」

「は〜い……」

「ほら、下に降りてきなさい。ごはんよ？」

母親に促されるまま、瑞奈は夕食の席へと移動する。

だが、やはりこの時も完全に上の空であった。

「どうしたんでい、瑞奈！ 全然食ってねーじゃねーか。たくさん食わねーと青春できねーぞ!？」

「……」

父親の呼びかけにも応じず、箸を止める瑞奈。

彼女の中では今、何かが確実に育ってきている。

しかしながら、その『何か』が何であるかは、今の彼女には分からなかった。



### 第3章：心、渦巻いて

昨日から注意力が散漫になっている瑞奈であるが、翌日になってもその状態は続いていた。

着替えの際も夏服ではなく冬服に袖を通してしまっし、歩いている時も何もないところで転んでみたりと、昨日に輪をかけた事態になっていた。

それでもなんとか学校に到着し、3E教室に入る……と、もうすでに樹里を含む2、3人の生徒が来ていた。

瑞奈が自分の席に向かおうとしたら、その樹里が声をかけてくる。「おはよっ、橋本さん。……あれ、ほっぺどしたの？ ちよっと汚れてる」

「え？ あ、これ？ 来る途中転んじやったんだ。えへへ」

「えへへじゃないよ、大丈夫なの？ あーあ、制服も汚れてるじゃない。ほれ、立ちな」

「あ……」

どうやら通学途中の転倒の際、顔と制服を汚してしまったようだ。樹里は本人よりも先に気づき、持っていたタオルハンカチで手際よく拭いていく。

「あ……ありがとう」

「お礼なんかいいよ。まったく、自分の事もろくにできないの？」

「う……」

「……あははっ！ かーわいい！」

「ジュリーちゃんって……こういうキャラだったけ？」

「そうだけど？ 私、友達にはいつもこう接してるつもりだよ」

「今まで見た事なかったもん」

「……ま、無理もないか。友達にはそう接してるって言ってもその友達が今までいなかったから、橋本さんが知らなくても仕方ないよ」

「あああつ……。ごめんね……」

「いや、謝る理由がわかんない」

「だってえ……」

「なんだよ、もしかして友達がほとんどいなかった事を思い出させちゃったつてんで気にしてるわけ？」

「うん……」

「いいんだよ。本当の事なんだから。つて、そんな事はどうでもいいんだよ。それよりさ、今日の英語の宿題やってきた？」

「ふえっ？ そ……そんなのあつたっけ？」

「あちゃー、橋本さんも度忘れしてたか……。なんかあるらしいんだよね。その子たちの話によると」

「ど……どうしよう？ かおりゅんも都ちゃんもきつと知らないよ……？」

「まず、どこが宿題で出てたか分からなきゃ仕方ないな。場所さえ分かれば、私なら3時間目までには終わらせられるから」

「でも、どうするの？ 誰かに聞くの……？」

「そうしかないよ……。橋本さん、あの子たちに聞いてきてくれない？」

「ふええええっ！？ なんでわたしが……？」

「だってそっちの方が近いじゃないか」

「そうだけどお……うう」

「……もうっ！ 仕方ないな。私が聞いてきてやるよ！」

樹里は不満をあらわにしながら立ち上がり、先ほどその話をしていた女子生徒2人の所へ向かった。

「ねえ、ちよつといいかな？」

「なに？ 委員長」

「今日の英語だけどさ、宿題あるんだつて？ なんか私、すっかり忘れててさ。範囲教えてよ」

樹里が尋ねた瞬間、彼女らはなにやら目配せを始めた。

その行為を不思議に思った樹里は再度聞き返す。

「……？ ね、どうしたの？」

「……あつはははははっ！！ えーマジだまされてんのー？」

「こんな簡単にだまされるなんてね！ あつははははは！」

「え……？ ど、どういう事よ！？」

「ウソに決まってるじゃん！」

「ウソだつて……？ どうしてそんな事……！」

「知らない。委員長天才だからさ、そんなくらいわかるっしょ？」

「キャハハハッ！！」

人を小馬鹿にしたような彼女らの笑い声に腹を立てながらも、その感情を必死に押し殺す樹里。

そして、顔を引きつらせて返事をする。

「そ……そういうこと。なんだ、ウソか。ウソなら仕方ないな……。そんなじゃね」

それだけを言い残し、樹里は瑞奈のところに戻る。

「……どうだった？」

樹里は、押し殺していた感情を一気に吐き出した。

「どうもごうも！ あいつらウソついてたんだよ！？ まったく、どういっつもりなんだよ！」

「ふえっ……？」

「きつと、私を焦らせて優越感に浸ろうとしてたんだ。そんな事したって意味ないのにわからないなんて、ちゃんと脳みそ働いてるとは思えないな」

「ちよつと……言い過ぎなんじゃ……」

「自分の力を見極めろつての。どう頑張っても、脳が砂漠状態の奴らじゃ私には敵わないつてのに。ああ、そんな脳だからいくら考えてもわからないんだ。あははっ！！」

「ジュリーちゃん……！ 声大きいよ……」

「わざと！ 聞こえるように言ってるのー！」

「え〜ん……。ジュリーちゃん……」

こづなつてしまつては止まらない。樹里の、視線を合わせないままの牽制が続く。

間に挟まれた瑞奈は、目を伏せるしか出来なかつた。

それからしばらくして、続々と生徒が集まりだす。その中にはもちろん、果緒梨と都の姿もあつた。

瑞奈にとって、今日ほど彼女らの到着を待ち望んだ日はないであらう。

2人が教室に足を踏み入れたと同時に、瑞奈は彼女らに駆け寄つた。

「おはよつ、瑞奈にジュリー！ ……あり？ どつたの、瑞奈？」

「……かおりゆくん、待つてたよ……」

「おーよちよち。どうちたんでちゅかー？」

「……っはー！ かおりゆん、そりやねえよ！ ……で、瑞奈。いったいどうしたんだ？」

「あのね……。ジュリーちゃんがね……」

「ジュリーが？ おいジュリー、いったい何があつたんだ？」

「ちよつとね……。明らかに悪意のあるウソつかれたから、仕返ししてやつただけ。あ、橋本さんにじゃなくて、あの辺にいた2人組に」

「仕返し……。か。穏やかじゃねえな。何したんだ？」

「強いて言うなら、言葉の暴力……。かな」

樹里は自分の席に戻り、頬杖を突きながら呆れたように話す。

「私は、あんたたちとは格が違う。本来なら同じ場を共有するものありえないくらいに、ね。そんな私にウソつくなんて、生意気にも程がある……。みたいに言つたのよ」

「だから……。声が大きいよ……」

「わざと」

「あつう……」

このように未だに牽制を続ける樹里だが、そんな彼女に都が口を

挟む。

「なあ……。それって、ずいぶんガキっぽくねえか？」

「……？ どの辺が子どもっぽいつて？」

「だってそうじゃねえか。ウソつかれたぐれえでいちいち騒ぐなよ」

「はあ……。あのね、神崎さんは私と同じ立場に立った事がないからわからないの。これくらいストレートに言わないと、脳が足りてない子たちには理解できない。わかる？」

「だから、もつと他に方法はなかったのか？ ジュリーはおれなんかよりよっぽど頭いいんだからよ、いろいろ思いつきそうじゃねえか。そんなケンカ腰じゃなくて、もつと他の方法とか」

「む……。確かに神崎さんの言う事も一理ある……。あんな連中を相手にするよりもつと効率的な方法……。あるよ」

「だろ？ へへっ、そうやっていつでも素直になつてりゃいいんだよ」

「うっわ……。みやびんがジュリーを言い負かしちゃった……。」「都ちゃんすごーい……」

「が、がう……。なんだよお、そんなに褒めんなよ。照れちゃうじやねえかよお……」

樹里を説得した都に驚きの声をあげる果緒梨と瑞奈。

だが、そういった事に慣れていない都は、顔を耳まで真っ赤にしてしゃがみ込んでしまう。

「神崎さん、照れてんの？ あははっ、かーわいいんだ」

「がう……。だってマジで恥ずかしいんだもん……」

「ごめんごめん。……ほら、先生来たよ。座った座った」

始業時間が近づき、担任の孝太郎が教室に入ってくる。

その様子をいち早く察知した樹里は、委員長らしく他の生徒に着席を促す。

こうして、彼女たちの1日が始まるうとしていた。

「あゝ、退屈だった。やっぱり宿題なんかないじゃないか」

3時間目終了後の休み時間、樹里は眠い目をこすりながら瑞奈の机に向かう。

「ね、橋本さん？」

「あっ、ジュリーちゃん。なあに？」

「お手洗いや行かない？」

「うん！」

樹里の申し出に即答した瑞奈。2人で連れ立って教室から出ようとする。

その途中で、机に突っ伏して情眼を貪っている爽太に声をかけられた。

「おー、チビ奈じゃないか。ジュリー連れてどこ行くんだ？」

「違うよ、私が誘ったんだ。お手洗いに、さ」

「ふ〜ん……。なんだって女つてのはトイレ行くまで群れたがるかねえ」

「そんなの……。どうだっていいじゃない」

「言ってみただけだよ。そんな気にすんなって。あー眠てー」

爽太は言うだけ言って、大あくびの後会話を打ち切った。そして、再び机に突っ伏してしまふ。

「もうまったく……。あれ？ ジュリーちゃん、どうしたの？」

「ねえ……。橋本さん？」

「なあに……？」

「この子にいたずら……。していい？」

「ふええっ！？ い、いたずら……？」

「……。ダメだ、ガマンできない！」

樹里は大急ぎで自分の机に戻り、ペンケースから筆ペンを取り出して再び戻ってきた。

「筆ペン……？ それでどうするの……？」

「しっ、黙ってて。起きちゃうでしょ……」

樹里は瑞奈を黙らせ、爽太を起こさぬよう慎重にペン先を彼の額に近づける。

そして細かくペンを動かし、一つの文字を書き上げた。

「やった！ やっちゃった！ 見て見て、ほらあ！」

「ど、どれ？ ……ぷっ！」

額に文字を書かれた事も知らず、のんきに眠りこけている爽太。

瑞奈にはそんな彼の姿があまりにも滑稽に映ったのか、声を殺して笑うのであった。

だが、それと同時に4時間目の開始を告げるチャイムが鳴り響き、その音で彼は目覚めた。

「ん……。あれ？ お前らトイレ行ってないのか？」

「ふえっ！？ う……うん。ねー……？」

「あー、そ、そうだよ……ね。あははは……。それじゃまた後でね」

「あ、おう……。なんなんだ？ あいつら」

樹里と瑞奈の奇怪な行動に不信感を抱く爽太。しかし、自分の身に降りかかった災厄にはまだ気づいていない。

4時間目は全員必修の化学。この教科の担当は担任の孝太郎だった。

「はい号令お願いしまーす。藤堂さん？」

「はい。……起立！」

樹里の号令で立ち上がる一同。続けて一礼をし、着席する。

「はい、よろしい。では今日は……って、おや？ 風間くん、おでこどうした？」

「え？ デコがどうかなくなってますか？」

「うん。なにか文字が書かれているよ」

「……は？」

「ありやま、鬱って書かれてるぞ。憂鬱の鬱って」

その孝太郎の言葉で、教室内は笑いの渦に包まれる。隣の席に座る都など、涙を流して笑うくらいだ。

しかし、当事者である瑞奈と樹里は笑う事が出来なかった。

「ほーれ、静かに。誰だか知らないけど、こんないたずらしちゃダ

メじゃないか……ははっ！ いやでも、鬱って凄いな！ よく書けたもんだ！」

苦笑しながら注意を促す孝太郎。……しかし、その後自分も堪えきれず笑い出した。

「あつ、ひつでーな先生！」

「ごめんごめん。しかしだね風間くん、書かれてるの気づかなかったのかい？」

「ぜんっぜん気づかなかった。誰がいつの間にやりやがったんだ……？」

「ともかく、書いた人はあとでちゃんと謝っておくように」

一応、もう一度注意を促す孝太郎。しかし、樹里と瑞奈以外の生徒には心当たりがあるわけもなく、右から左に聞き流していた。

（あちゃー、やっぱりバレちゃったか。さすが先生だな……）

樹里が心の中で呟いてから数分後、机間指導を行っていた孝太郎が不意に声をかけてきた。

（このいたずらっ子め。風間くんにアレしたのはキミだろう？）

（……！？ どうしてそれを……？）

（ぼくを見くびってもらっては困る。一応、文字を見れば誰の文字かっつのは判断できるつもりだよ）

（……）

（それに、鬱なんて難しい漢字書けるような子は、このクラスではキミか橋本さん以外にはちょっと考えられないからね）

（ごめんなさい……）

（謝る相手が違うだろう？ あとで謝っておきなさい）

（はい……）

（……ま、でもね。キミがこういう事もしでかしたってのはある意味収穫だな）

（えっ？）

（クラスの子たちとの距離が縮まった気がしたから……とでも言うておこうか）



(…………)

孝太郎はすべてお見通しであった。

樹里はこの日から、彼に向ける目を少し変えたようだ。

(なんなんだよあの人……。どこにでもいるつまらない教師かと思っただらとんでもない！)

昼休みが始まると同時に、樹里は爽太の机に歩み寄った。

「あ……あのさ……」

「ん？ どした？」

「おでこの……それ……」

「ああ、これ？」

「それなんだけどね……実は、私がやったんだ」

「え？ ジュリーが？」

「う、うん……」

「ま、こんなの拭いとけば落ちるからいいんだけどさ、なんでまた……」

「ともかくごめん。理由なんてなくて、ただ……」

「ただ？」

「なんでか、ちょっといたずらしてみたくなっちゃって……」

「おいおい、勘弁してくれよ。そんな理由でやられちゃ世話ねーや」

「うっ……。じ、ごめん……」

「ま、いいってことよ。んじゃオレは購買行ってくるわ。そんじやな！」

「あっ……!!」

爽太は特に気に留めることもなく、額に書かれた文字をそのままにしながら購買に走ってゆく。

残された樹里は途方に暮れつつも、瑞奈たちの作ったスペースに向かう。

「ジュリーちゃん、謝れた？」

「う、うん……一応。でもすぐどっか行っちゃったよ」

「きつとあいつ照れてんだぜ。きつと」

「え〜？ みやびよんが言うとなんかウソっぽく聞こえるんですけど〜」

「んだとお！？」

「わー！ やめてよ〜！」

からかわれた都は、果緒梨の首を絞め始める。

樹里はその行動に驚きを隠せず、都を止めようとしたのだが……瑞奈が逆に樹里を止める。

「ちよつと橋本さん！ 何で止めるのさ！？ 止める相手が間違っ  
てない！？」

「平気だよ、ジュリーちゃん。いつものことだから」  
「えっ……？」

瑞奈に言われるがまま、しばし2人の様子を見守ることにした樹里。

すると2人とも、もう笑いあっているではないか。

先ほどの一連の流れは、彼女らには自然に訪れる事のようにだ。

「ねっ？」

「う、うん……。あの2人、本当に仲がいいんだな」

「でしょ？ わたし、うらやましいの」

「うらやましい、それはどうして？」

「うん……。かおりゆんはね、わたしともすごく仲良くしてくれる  
んだけど、都ちゃんと話しているときはすごく楽しそうな顔するの」

樹里はために果緒梨の顔を注視する。そこには、屈託のないは  
じける笑顔を湛える少女がいた。

「ああ、確かに……。それがうらやましいっての？」

「……うん。かおりゆんには、都ちゃんがいればいいのかな……っ  
て。わたしなんかいらなのかな……って」

「いやいや！ そんな事ないって。考えすぎだよ」

「でも……。わたし、実際にああいう事されたらイヤだもん」

「ああいう事って……神崎さんが青山さんの首絞めたような事？」  
「……うん」

「それは、青山さんは橋本さんがイヤだなんて思う事をちゃんとわかっているから、始めからそういう事をしないってことじゃない？」  
「そうなの？」

「多分、ね。でも、神崎さんならもつと大胆なことでも出来るからそうしてる。人によってベストな付き合い方一つか接し方ってあると思うのよ、私」

「構ってほしいとか、あまり干渉するな……とか？」

「うん。だとしたら、青山さんはそういうのをしっかりとわきまえられるすごい子だと思う」

「……」

「だから……さ。私、こうしてみんなとお昼いっしょに食べれるの、すっごく嬉しかったんだから。こんな友達思いの子たちと仲良くなれて、ね」

「……ん？ おいジュリー、食わねえのか？」

「えっ？ ……あー！ それ、私のおかずじゃないか！ なに勝手に取ってんだよ！？」

「へっへーんだ、ジュリーがポケットとしてっからわり……って、うつひいいいいい！！！！」

いつの間にか食事を再開していた都は、これまたいつの間にか樹里の弁当のおかずを一品奪い取ってしまった。

だが彼女はそれを口にした瞬間、滝のような汗を噴出し始めたではないか。

口の周りを真っ赤に腫らした都は、果緒梨に泣きつく。

「ふえ〜ん、すっげえ辛かった〜……」

「みやびよ〜ん、大丈夫〜？ よしよし。……ね、ジュリー。あたしにも一口食べさせてくれない？ それ」

「これ？ いいけど、辛いから気をつけなよ？」

樹里は果緒梨に、都に食べられたおかずを一口食べさせる。

すると彼女もまた、都と同じ反応を返すのだった。

「……………かつら……………!!! ちょちょちょ、なんなのよこれ……………!」

「え、自家栽培のハバネロを練り込んだ自作のメンチカツだけど……………」

「けほつ……………。おいジュリー! 激辛つつつても限度があんだろーが! 死ぬかと思っただぜ!」

「……………ふんっ! そっちがつまみ食いするから悪いんじゃないか。私のせいじゃないよっ!」

「ちえっ! かわいくねえの! ……ん? 自作ってことは……………ジュリー、これお前が?」

「う、うん。作ったって言っても、昨日の夕飯だけだね。残っちゃったから詰めてきたんだ」

「お前も自分で作ってるのか……………」

「え? ってことはもしかして、神崎さんも?」

「ああ、まあな。だって、うちで料理できんのおれだけしかいねえからよ」

「はっ……………。ご、ごめん。私、なんかすっごいイヤな奴だったね。」

「ごめんね!」

「いいって、気にすんなよ。ひとりぼっちじゃ……………ないんだからよ……………。がう……………」

「あ、神崎さんって彼氏さんと一緒に暮らしてるんだっけ?」

「そうだよ。ずっといつしよだって約束したんだぜ。へへっ」

「おい、キモイよー! そのおねーちゃん!」

「がう……………」

「……………うっわ! やばい! 今の神崎さん、すっごいかわいかった!」

「だしょ!? ジュリーもみやびよんのかわいさに気づいたんだね!」

「うんうん! あーもーガマンできない! 抱きしめちゃえ!」

「わっ、何すんだよジュリー！ やだ〜！」  
「ジュリーばつかずーるーいー！ あたしも〜！」

都、果緒梨、樹里が楽しそうにはしゃぐ中、その輪の中に入れない瑞奈がひとり取り残されてしまった。

この状態は今に始まった事ではなく、樹里が加わる前も幾度となく生じている。

学園入学当時の瑞奈は、今に輪をかけた引っ込み思案な性格であり、クラスメイトに声をかける事が全く出来ずにいた。

そんな彼女に真っ先に声をかけてきたのが、青山果緒梨という少女であった。

彼女は自分の中で『誰よりも早くクラスの全員の顔と名前を一致させる』という事を目標にしていたらしく、クラスメイトに次々に声をかけて回っていた。

瑞奈は、その少女と仲良くなれば自分の引っ込み思案が克服できると考え、声がかかった時に友達になりたいと申し出た。

それは彼女が、今までの人生の中で最も勇気を振り絞った瞬間でもあった。

果緒梨もちろんその申し出を了承し、今に至る。

その状態が1年以上続いた昨年の冬休み直前、都が転入してきた。そして今年、心を入れ替えた樹里も加わった。

結果として、瑞奈は果緒梨を独占する事ができなくなってしまった。

そうなると彼女は心の拠り所を失い、途方に暮れてしまう。

瑞奈は今、まさにその状態に陥ってしまっているのだ。

(さみしいな……)

小さく呟いても、その声は果緒梨には届かない。

瑞奈はそつと片づけを行い、その場から離れていった。

自分の机に戻った瑞奈は、そこで昼食を再開する。

その時、購買に行っていた爽太がいかにもくたびれた様子で戻ってきた。額の文字は、汗によりにじんでいた。

「いっやく、相変わらずやきそばパンとカレーパンの人気はものすげーなー。……ん、あれ？ チビ奈、一人なのか？」

「う、うん……。もう食べ終わっちゃったから……」

「え？ まだいっぱい残ってんじゃん」

「あ……。そうそう、次わたし教室移動だから……」

「そうだったけ？ ……いや、ちげーよ。次は全員必修の日本史じゃん」

「あ……。う……」

「どうしたんだよチビ奈。なんか変だぜ？」

爽太は瑞奈の受け答えに違和感を覚え、彼女に顔を近づけて問い詰める。

回答に窮した瑞奈は、もはや泣くことしか出来なかった。

「う……。ひぐっ……」

「はー？ なんで泣くわけ！？ オレ何かした！？」

「違うの……。えぐっ、えぐっ……」

「わーった！ わーったから泣くなつての！ これじゃオレが泣かしたみてーじゃねーか！ おーいその3人さんよー、助けてよー」

「ん、爽太？ どうしたんだ？」

「どうしたもこうしたもないよ！ チビ奈が突然……」

「はっ、瑞奈いないし！ どーしたの！？」

近くにいるはずの瑞奈がいなくなっている事に今ようやく気がついた3人。

真っ先に果緒梨が、瑞奈のもとに近づいていった。

「どうちまちたかー？ おなかすきまちたかー？」

「や、だからそれはねえだろつての」

「いーのよいーのよ。んで爽太くん？ いったいどーしちゃったわけ？」

「そりゃオレが聞きてーよ！ チビ奈がおめーらと離れてるから、

気になって声かけてみたらいきなり泣き出しちゃったんだよ」

「そう……。こーら！ あんまり迷惑かけちゃダメだぞ？」

「ひぐつ……。えぐつ……。ふええええ〜ん……」

「も〜、どうしちゃったのよ……」

果緒梨が冗談めかしてなだめるも、瑞奈は泣き止まない。

爽太は何も出来ず、ただ立っている事しか出来なかった。

都も樹里も、心配になって瑞奈に近づく。

「……瑞奈、いったいどうしちゃったんだよ？」

「もしかして、私たちのせいかな……？」

「なんで？ ジュリー」

「さつきね、ちょっと橋本さんと2人で話してたんだけど……。この子ね、青山さんが神崎さんと話してる時のすごく楽しそうな青山さんがうらやましいみたいなんだ」

「あたしが……。うらやましい？」

「うん。青山さんは気がついてないかもだけど、神崎さんと話してる時はすごく楽しそうなんだってさ。自覚ある？」

「う〜ん……。なくはないけど、あたしはみやびよんとも瑞奈とも同じように接してるつもりなんだけどなあ」

「考えすぎだぜ、絶対」

「……でも、さつき橋本さんだけをほっばらかして私たちだけではしゃいでたろ？ それでさみしい思いさせちゃったんだよ、きつと」

「さつきのか……。確かに、瑞奈だけおれに抱きついてこなかったもんね」

「もー、この子にも困ったもんだわね。さみしかったら入ってくればいいじゃない、ねえ？」

「そうだけどさ……。なかなかできないものだよ、そういうの。私だって……。みんなの中に入るの、すごく勇気使ったんだから」

「だとしたらアレだな、絶対出来るはずだよ。ジュリーにできて瑞奈にできねえわけねえだろ」

「どづいこと？」

「同じ人間、ましてや同じ性別でタメの奴に出来ることがなんでもきねえのかって事。やってやれねえ事なんてねえんだ。瑞奈だってこないだのジュリーみたく勇氣出せば、きつとできる」

「そうね……。みやびよんの言う通り。でも、この子にそんな勇氣があるのかって話よね」

「うん……。あつ、そうだ！ 優香姐さん！ あの人に頼めば！」  
「優香……。姉さん？ カフェに来てるキレイな人かな？ その人がどうかしたの？」

「あ、ジュリーはよく知らなかった？ 優香さんはね、瑞奈の通ってるテニススクールのインストラクターやっててね、瑞奈のあこがれの的なよ」

「そうなんだ。あんなに細いから何かしら運動やってるとは思ったけどね」

「瑞奈はあの人の言う事なら無条件で聞くから、ちよつと一肌脱いでもらえれば……」

「そう……。か。それはいい考えかも。でもどうやって頼む？」

「今日もカフェ行くでしょ？ それから考えようよ。いれば直接言えばいいし、いなかったらマスターに伝言頼むとか」

「そうだね。……。あ、もうすぐお昼休み終わるよ。ほれ、席戻りな」  
樹里がちらりと携帯電話を見ると、確かに間もなく昼休みが終わろうとしている。

果緒梨たちは樹里に促されるがまま、自分の席に戻っていった。

そして放課後、樹里たちはカフェに到着していた。

この日も、相変わらず3組程度の客が座している。

マスターも、自分のペースを崩さず仕事をこなしているようだ。

「はい、いらっしやい」

そんなマスターに見つかり、声をかけられる。

「こんにちは、マスター。あの……。優香さん、来てませんか？」

「優香ちゃん？ 今日はまだ来てないよ。あの子もそう毎日来られ



るほど暇じゃないだろうからなあ」

「ね、ジュリー。この際さ、優香さんじゃなくてマスターでもよくない？」

「そう……だな。えっと、マスター。ちょっと相談したいことがあるんですが……」

「なんだい？ 何でも言ってきな！」

樹里たちは、先ほどまで相談してきた事をマスターに告げた。

瑞奈が時として陥る『喪失感』の解決の糸口を探るために。

「……なるほどねえ。今までとはちよつと毛色の違った相談事だあね」

「もーマスター！ 感心しないでちゃんと考えてよ！」

「もちろんですよ。……瑞奈ちゃん」

「……なあに？」

「というか、僕に出来る事があるならそれを教えてほしい。なんたって、これはどの面から見てもキミの問題なのだから」

「う……」

「マスター！ そんな突き放すような真似、酷すぎます！」

「そうかな？」

「え……？」

「誰かの問題は、その問題を抱えている誰か自身が解決しなければお話にならない。そして、その体験はその誰かの糧になる。何も得られない問題事などありえない」

自分用に淹れたコーヒーをすすりながら、マスターは続ける。それと同時に、ポケットに手をつ込んだ。

「瑞奈ちゃんは、この問題から何かを得なければならぬんだ。自分自身の力で、な。そうだろう？」

「そう……ですけど……」

マスターの言葉に何も言い返せなくなってしまう樹里。

……しかし彼女は、マスターが後ろ手で携帯電話を操作している

のを発見した。

その行動について言及しようかとも考えたが、実行には移さなかった。

(……なんだよ。口ではあんな事言っておいて、ちゃんと橋本さんに助け舟出してるじゃないか)

樹里は、マスターの懐の深さを改めて理解し、意見を改めた。

「うん、確かにそうだ。自分でやらなきゃなんにもならない。橋本さん、やってみようよ！ 私にだって出来たんだ、きっと出来るよ！」

「う……………」

「な！？ 瑞奈、怖くねえよ！ 大丈夫だから！」

「あああう……………」

樹里と都が説得しても、相変わらず煮え切らない態度を続ける瑞奈。彼女らの声は届いていないようだ。

……………そしてついに、今まで沈黙を守り通してきた果緒梨が口を開く。瑞奈の胸倉を掴みながら。

「ちよつと瑞奈っ！ あんたとあたしの友情って、そんな薄っぺらなものだったの！？」

「ふえっ……………」

何が起こったかわからず、呆気にとられる瑞奈。

果緒梨は声を震わせつつ、さらに続ける。

「あんたと会って2年半！ あたし、ずっとあんたとは仲良しだと思ってた！ あんたが友達になりたいって言ってくれた時から、ずっと親友だと思ってた！ 違うの！？」

「青山さん……………！ 落ち着いて……………！！」

「ジュリーは黙ってて！ ……ねえ瑞奈！ あんたって、ちよつと目を離しただけで親友も親友と思えなくなるような子だったの！？」  
店内は一触即発の空気に包まれるが、マスターは沈黙を守り通している。どちらかを止めることもせず、ただ見守っていた。

「クリスが帰っちゃうって事で流した涙！ あれはなんだっただの！」

？ ジュリーがあたしたちの友達になって喜んでたあんたは違う人だったの！？ ねえ、どうなのよ！！」

「く、苦しいよ……かおりゅん……」

「うるさーいっ！！ あたしの苦しみはこんなもんじゃないよっ！  
ずっと親友だと思ってたのに裏切られたつらさ！ わかる！？」

果緒梨は冷静さを失い、さらに揺さぶりをかける。小さな体の瑞奈は抵抗も出来ずにいた。

……その時、店のドアを開ける音が響き渡り、その音と同時に……  
優香が彼らの視界に現れた。

彼女にしては珍しく血相を変えており、慌てて駆けつけた事が伺える。

そして呼吸も整わぬまま、それでも凜とした声で尋ねる。

「瑞奈は……どこですか？」

「ここにいるぜ。今かおりゅんに……」

「……え？ あ！ 優香さん！」

「挨拶はあとです。おどきなさい」

「……は、はい！」

威圧感あふれる言葉で果緒梨をどかすと、優香は瑞奈に向き直る。

「お……お姉様……」

「瑞奈。私が何故ここに来たか、わかりますね？」

「え……う……」

「……埒が明きませんわ。瑞奈あなた、随分と皆さん方に迷惑をかけたようね。……何故そのような事になったのですか！！」

「ひっ……！！」

「何故……親友である果緒梨さんを信じてあげる事が出来ないのですか……。そして、何故裏切るような真似をしまったのですか！！」

優香の鋭く、怒気を含んだ声が瑞奈に突き刺さる。だが瑞奈は、  
優香から視線を逸らさない。

「親友だと思っていた存在に裏切られた。目の前でその現実を突き

つけられたこの子たちの気持ちを、何故考えてあげなかったのです  
!!!」

「ひうつ……」

「あ……あのくちよつと、優香姐さん？」

「なんでしようか？ 都さん」

「も……もうその辺で……。お、おれはほら、別にそんな傷ついた  
わけでもないし……。さ。もう……。やめてやってくれよ、な？ 瑞奈、  
怖がってるじゃねえか」

「いえ、止めないで下さいな。この子には言わねば分からないよう  
です。……。それとも、腕ずくで止めてみるとでも仰いますの？」

「……は、はい！ 腕ずくだなんて、滅相もございませんっ!!」  
優香の鋭い氷柱を思わせる視線で睨まれ、身動きの取れなくなっ  
た都。

その鬼のような形相を少しずつ和らげ、瑞奈に諭すように語りか  
ける。

「瑞奈。よくお聞きなさい。そして、肝に銘じるのです。……何も  
知らない、無知である事は最大の罪である、という事を」

「えぐつ……。はい……」

「今回の件は、あなたが彼女たちの気持ちを知らなかったため  
に起こってしまいました。勇気を出して歩み寄っていれば、こうは  
ならなかった。違いますか？」

「いえ……」

「よろしい。そこまでわかれば、私もこうして出向いた甲斐がある  
というものです」

「すまなかつたね。今日の仕事の予定をキャンセルして来てくれた  
んだろ？」

「ええ。……これで今月分のお給料が少し減ってしまいますわ。ど  
うしてくれるのかしら、ぶつぶつ……」

来月の報酬が減り、愚痴をこぼす優香は、すっかりいつもの彼女  
に戻っていた。

ようやくいつものカフェの空気が戻りつつある……が、そこに空気を読まない来訪者が現れた。……爽太だった。

「ちいっス！ やーやーみなさんお揃いで……って！ チビ奈！ おめ、まーた泣いてんのかよ！？」

「え……えつと……」

「いや、オレの目はごまかせねーぞ！ ……ジュリー！ ハンカチかなんか持ってねーか！？」

「えっ！？ ……こ、これでよければ……」

「サンキュー！ 借りんぜ！」

「あつ、ちよつと！」

樹里から半ば奪うようにハンカチを借りると、爽太は瑞奈のこめかみの辺りをゆっくりと撫でながら目じりの涙を拭いてゆく。

「は、恥ずかしいよお……爽太くん……」

「何言つてんだよチビ奈。……つたくよ、この年になっても泣き虫なお前の方が恥ずかしいっての」

「っ……」

声では不満を漏らす瑞奈も、爽太に撫でられる事であつという間に落ち着きを取り戻してゆく。

その様子を見守っていた樹里は、終始驚いていた。

特に、あれだけ泣いていた瑞奈が爽太に撫でられた途端に泣き止んだところでは、驚きを通り越して感動の域に達したようだ。

（どうして！？ どうして風間くんは橋本さんのそんな事まで知ってんだよ！？ ……幼なじみっただけじゃ説明がつけられないよ。

……くそっ！ 負けてたまるか！）

樹里はひとり、爽太への好意の炎を燃やし始める。

その様子に気がついたマスターと優香は、こっそりと密談を始める。

（うふふ……。若いとは素晴らしいですわね）

（ああ……。面白い事になりそうだぞ、これから）

## 第4章：勇気の片鱗

毎日、うだるような暑さが続く……が、親友であった果緒梨と瑞奈の関係は冷え切ってしまった。

彼女らは学校が終われば毎日のようにカフェに行くほど暇になるのだが、あの日以来、果緒梨は瑞奈たちと行動を共にしようとはせず足早に帰宅している。

彼女曰く『そろそろ勉強しないと』とのことだが、その真相のほどは定かではない。

「あの……さ、一緒に帰ろ……？」

「ごめんね。今日も勉強しなくちゃなんないんだ」

「う……うん……」

「じゃね。あんたも、優香さんのスクールがあるんでしょ？」

このように瑞奈が誘いをかけても、果緒梨は適当な理由をつけてさっさと帰ってしまう。

瑞奈は、彼女の背中を見守る事しか出来なかった。

そこに、空気の読めない爽太が現れ、瑞奈を励ます言葉をかける。

「よっ、チビ奈。まーたダメだったのか？」

「うん……」

「ま、仕方ねーよ。ほとぼりがさめるまで待つんだな」

「……」

「……その、何だ。もしアレなら、オレと一緒に帰ってやっても……いいぜ？」

「……ごめん、一人で帰らせて……」

「そう……か。じゃな」

爽太はさりげなく瑞奈と一緒に帰るように誘ったが、彼女も一人で帰ると言い出すのだった。

彼はため息をひとつつき、瑞奈の背中を見守った。

「ちえーっ、つまんねーの！……おーい原田！一緒に帰んねー

か？」

「すまねえでつす！ オレっち、もうすぐ最後の大会だからこれから部活なんでつす！」

「……おせーよ海斗！ 急げつつつてんだよ！」

「わーかつてるっての！」

爽太は海斗を帰る相手に決めたようだが、部活があるからとその誘いを断る。

そして、意味深な言葉を残してその場を去っていった。

「んじゃーな！ お前も後悔すんなよ！」

「お、おう……。なんなんだよ、後悔すんなって。ちえっ、しゃーねー。一人で帰るか……」

「いよいよあきらめた爽太が一人で帰ろうと踵を返したら……。うわっ！？」

彼の目の前に突然壁のようなものが出現し、その弾力により押し戻されてしまった。

思わずしりもちをついてしまった爽太だが……。そんな彼に手を差し伸べたのは樹里だった。

「……大丈夫かい？」

「なんだ、ジユリーか……。いきなりなんだと思っただぜ」

「ごめんごめん。後ろから脅かそうと思ったら、いきなり振り向くんだもん」

「逆に脅かした形になったわけか。……」

爽太はそこまで言って、赤く染まる頬の辺りを手で押さえた。

「ど……。どうしたの？ どっかぶつけた？」

心配になった樹里は思わず聞いてしまっていたが、爽太は言い返す。

「あーいや、なんというか、その……。や、柔らかかったなって……」

「……！ さ、触ったの……！？」

「ちっ、違う！ これはアレだ。そう、事故だ！ 不幸な事故だ！」

「いや、私は許さない！ 乙女の純潔を汚されたんだからっ！」  
「ちょ、勘弁してくれよ……。それに、純潔って大げさな……」  
「……ゆ、許してほしければ、今日……わ、私と一緒に帰ること！  
い……いいな!？」

「……へえっ？ そ、それでいいの？」

「質問してるのはこっち！ 帰るの？ 帰らないの？」

「え……あ……。い、いいけど……」

「いいの!? やったあ!! ……あつ、ゴメン。なんか一人で舞  
い上がっちゃって……」

「いや、いいよ。それよりさ、行くなら早く行こうぜ」

爽太はそのまま樹里の脇をすり抜け、教室から出て行く。樹里も  
慌てて爽太を追った。

昇降口で、二人は外履きに履き替える。

樹里は、靴を履き替える爽太の姿をじっと見ていた。

(……か、かわいい！ すっげーかわいい！ やばいってこれ！  
メツチャキヤわいいんですけど!?)

鼻息を荒くし、爽太を見る視線にさらに力を込める樹里。

爽太もその力のこもった視線を感じ取り、急いで靴を履いて樹里  
との距離を広げるのだった。

「なんで離れるのよ……」

「いや、身の危険を感じてさ……。お前、顔真っ赤だぜ？ ていう  
か早く靴履いちゃえよ」

「ふへっ!? ……あはは、ホントだあ。あは、あはは、あははは  
……」

「笑い事じゃねーってのホントに。こっちは取って食われるんじゃ  
ねーかって思ったぜ」

「あははは、ごめんごめん。……お待たせ」

照れを隠せないまま、樹里も靴を履きかえる。

結局、この日は誰一人としてカフェに行く事はなかった。

余談だが、この日のHexagramの閉店時間は午後6時前だ



ったようだ。

「……起きちゃったあ」

翌日、瑞奈は思いがけない早起きをしてしまう。

そのため、学校へもいつもより早い時間に出発した。

さすがの樹里も、始業時間の一時前には来ておらず、3・Eの教室には現在瑞奈ひとりだけが存在している。

「あつ、海斗くんの机の中になにか入ってる。……朝練かあ。すごい……」

教室には誰もいなかったが、野球部である海斗だけは朝練のために早く来ていた。

彼女は、何気なくグラウンドの方に目を向ける。

そこでは野球部の練習が行われており、内容はどうやら守備練習のようだ。

彼らの気迫はすさまじく、かなり離れているはずの瑞奈の教室までその声が聞こえてくるほどだった。

「すご〜い……。ああいう団体競技って、きっとチームのみんながみんなを信じているから成り立つのよね。テニスのダブルスだってそうだし……」

感嘆の声を漏らした後、ため息交じりで呟く。

「……はあ。わたしったら、どうしてあの時かおりゅんを信じてあげられなかったのかな……」

そんな弱々しい声を掻き消すかのごとく、ますます野球部はヒートアップしてゆく。

瑞奈に遅れること約15分、樹里が教室の入り口をくぐった。

先客の瑞奈は、食い入るように窓の外を眺めている。

樹里もまた、そこに近づいていった。

「おはよっ、橋本さん」

「あ、ジュリーちゃん……。おはよ」

「どしたの？ ボケつとしちゃって」

「そう……かな？ ほら、向こう見て。野球部が練習してるでしょ？ あれ見てたんだよ」

「ああ、あれか。野球部、頑張ってるよね」

「もうすぐだもんね。気合入っててすごいなあ……」

野球部を見て嘆息する瑞奈。その様子を、樹里は見逃さなかった。

「……ね、橋本さん。そういうのを、うらやましいとか思ってる？」

「ふえっ……？」

「ああいう風に全員一丸となって一つの目標に進めるのも、お互いを信頼しているから。その信頼の心を、自分はどうして持つ事が出来なかったのか……ってことじゃない？」

「ジュリーちゃん……すごい。わたしの考えてた事そのままだよ」

「そうだった？ ……なんだろ、早く青山さんと仲直りしたいって思ってるのがミエミエだよ。だから、どんな物事もそっちにつなげちゃう、みたいなの？」

「うん……」

樹里に自分の心の中を見透かされてしまうと、瑞奈は弱々しく返事をする。

そんな彼女を見かねたか、一つの提案を促す。

「……あ、そうだ！ 野球部の試合、青山さんと一緒に見に行ったら？」

「え……？」

「そうだ！ それがいいよ！ 青山さん誘う口実にもなるし、原田くんもきつと喜ぶし、一石二鳥じゃないか！」

（それに、私が風間くんを誘う口実にもなりそうだしな……）

「でも……勉強忙しいって断られちゃったら……」

「そこはさ、『勉強だけじゃなくてたまには気分転換しようよ』みたいに理由つけて誘えばいいじゃないか」

「うん……」

「……で、どうすんの？ 野球部の応援行く？ 行かない？」

背の低い瑞奈に視線を合わせて尋ねる樹里。

その視線に半ば気圧されるように、次の言葉を発する。

「……行く！ かおりゅんも誘う！」

「よっし、よく言った！ そこまで言ったんなら、青山さんはちゃんと橋本さんが誘うこと！」

「うん！ ……あ、ジュリーちゃん。あと一ついい？」

一つの決心をした瑞奈は、さらに自分を出してゆく。

彼女は踏み切るまでは長いが、一度踏み切ってしまうえば意外と大胆になれるのであった。

「いいよ。なんだい？」

「全然違う話なんだけどさ、わたしの事もなんか違う呼び方していいよ」

「えっ……いいの？」

「うん！ わたしだけジュリーちゃんって呼ぶの不公平じゃない」  
思いがけない許可を得た樹里は、瑞奈の積極的な行動に驚きを隠せない。

「ありがと。ちょっと待って……考えるから。うん……」

「なんでもいいよ？」

「……あ！ これなんかどうかかな？」

「なにになに？」

「……みずにゃん！」

「ふええっ！？ みずにゃん！？」

「いいじゃん！ かわいくない？」

「む……。他になんかかないの？」

「他あ？ ないよお……。違う呼び方していいよって言ったのはそっちじゃないか。イヤなの？」

「ううん、イヤじゃないよ。みずにゃん、かわいいね」

「でしょ！？ よっし！ じゃあ今日からみずにゃんだ！ 改めて

よろしくね、みずにゃん！」

「うん！」

そこまで話が終わると、いつの間にか来ていた都が声をかける。

「お前ら仲いいな」

「わっ、都ちゃん。来てたの？」

「ああ、ついさっきな。かおりゅんもいるぜ」

「ホントに？ ……みずにゃん、願ってもないチャンスだよ」

「……………うん。言ってくる」

瑞奈は樹里に背中を押され、勇気を振りしぼった。

「わつと……………。瑞奈のやつ、随分気合入った顔してたな。ジュリー、何したんだ？」

「別に何もしてないよ。あの子の勇氣、見届けてやるつよ。……………みやびよん」

「ぶっ！？ ちょ、おま……………！ お前がおれの事そう呼ぶなんて…

…！」

「ダメ……………かな？」

「や、ダメとかそーゆーんじゃなくてさ……………。けどなんか、お前に呼ばれるとすげえムズがゆいつつーか……………」

樹里と都が小声で囁きあう中、瑞奈はようやく果緒梨に声をかけていた。

「あ、あの……………」

「ん？ あ、瑞奈。おはよう」

「お……………おはよう……………」

「……………何なの？」

果緒梨は未だに瑞奈に対しての態度を変えておらず、この時も早く会話を打ち切りたいという表情をしていた。

互いに無言のまま、気まずい空気が流れる。

……………と、そこに朝練を終えた海斗が戻ってきた。

「うお〜疲れた〜……………眠てー！！……………おつと？ おつとつと？

一体ぜんたい何なんでっすか、この二人のびつみょーな空気？」

空気を読めないのか、はたまた分かっていてわざと読まなかった

のかは定かではない海斗の発言が、微妙な空気をゆがめてゆく。

これが今の瑞奈にとっては願ってもないチャンスとなり、果緒梨に次の言葉を発する事が出来た。

「……そう！ 今度さ……野球部の応援行かない？」

「えっ……？」

「う、うん。ほら、海斗くんたちが最後の大会でしょ？ だから行けるところまで行って欲しいな、って……」

「マジでっすか！？ いやー、嬉しい事言ってくれるじゃないでっすか！ 都ちゃんとか来りゃー、竜造のヤツはさらに活躍しそっすね」

「がっ……。言われなくたっておれは行くよ……」

「私も行くよ。クラスメイトの晴れ姿っていうの？ それくらい見てあげてもいいかな……って、最近思えるようになったんだ」

次々と拳がる、自分の応援をするという言葉。

海斗は先ほどまでの疲れた顔を変え、雄叫びを上げる。

「委員長まで……！ くうう！！ 男原田海斗、これで活躍できなかったら男の名がすたるぜ！ うおおおお~~~~！！！！」

「うっわ、暑苦し……」

「でさ……かおりゅん、行く……？」

猛り狂う海斗から勇気をもらった瑞奈は、再度果緒梨に呼びかけた。

彼女も観念したのか、その申し出を受け入れた。

「……まったく！ この空気で行かないって言う方がどうかしてるっての！ 行くわよ。……だからさ、海斗。試合の日とか教えなさいよ」

「っしやく！ 来たぜこれ！ 見てろよみんな！ オレっちと竜造の最強バッテリーは、必ずその名を全国に轟かせてやる！」

「だーっ！ それはわかったから、試合の日程を教えなさいって言うてんのー！」

「試合の日？ とりあえず地区予選の一戦目は来月10日の日曜日

です」

「なんだ、まだ結構先なんじゃないの」

「んなこたねーです！　だってもうすぐテストだから、練習は今はできないーんです！」

彼の言うテストとは、一学期の期末テストのことである。

来月の5日、即ち火曜日から4日間行われ、この一週間前からは原則として全ての部活が活動休止となるのだ。

文武両道を重んじる汐野学園では、大会を間近に控えている部活動であっても例外は認めないようで、海斗たち野球部も試験一週間前は部活をさせてもらえない。

「それに、テストでもし赤点取ったら試合に出さねーって監督が言うもんでっすから……」

「はっ！　そーよ！　来週からテストじゃんよ！　どーしよ、なんもやってないし！」

突然の果緒梨の言葉に、一同は疑念の視線を向ける。

「え？　ウソつくなよかおりゅん。最近付き合い悪いのは勉強してっからだろ？」

「はっ……！　ち、ちがくて、ほら……。テスト勉強と受験勉強って違うっしょ？　あ、あたしがやってたのは受験勉強であって、テスト勉強じゃなくて……」

都の指摘に狼狽し、しどろもどろになりながら言い繕う果緒梨であったが、それは余計に全員の疑惑を深める結果となった。

「な、なによ。あたしがウソついでるとでも言うの？」

「そうじゃなくてさ……。受験勉強が全く期末の役に立たないってわけじゃないだろ？」

「ジュリー……」

「ホントはさ、みずにゃんと気まづくなってるから、もっともらしい理由つけてるだけじゃないの？」

「……」

「青山さんの方も、もうそろそろ許してあげようかなって思ってる

けど、言い出しにくいんじゃない？」

「うん……」

樹里は慎重に言葉を選び、果緒梨を説得する。

彼女の気持ちは、少しずつ揺れ動いていた。

「みずにゃんはもう準備できてるよ。ね？」

「うん……」

「この際だし、お互いに謝っちゃいなよ。な？ 私もみやびんも、

二人がそんな関係になってるのは見てられない……」

「そうだけ！ おれ、やっぱりみんな仲良くやってるのがいい！」

「お……オレっちもそう思うです！ オレっちには二人の間に何があったかさっぱりですけど、果緒梨ちゃんと瑞奈ちゃんは仲良くやってるのがいいです！」

「くっ……」

いつの間にか、都や海斗までも果緒梨の説得に回っていた。

ついに観念したか、彼女がその口を開く……前に始業を告げるチャイムが鳴り響いた。

「……ふう。チャイム鳴っちゃったな。席戻ろっ？」

樹里は全員に席に戻るように指示を出す。

解決には至らないまま、時が過ぎていった。

「ただいま……」

「あら果緒梨。今日も早いのね。お友達と遊んでこなかったの？」

「……うん。勉強するし」

母親にそっけなく伝え、足早に自室へと戻る果緒梨。

隣には姉……青山絵実梨の部屋もあるが、社会人となった彼女は早朝から出勤し、帰りも夜遅くになってしまう。

さらに絵実梨は果緒梨とは違ってのんびり屋なため、一つ一つの行動がとにかく遅い。帰りが遅くなるのも、実はその辺りに原因がある。

そんな姉を、果緒梨は何かと頼りにしており、困った時はいつも

相談に乗ってもらっていた。

しかし今はその方法が使えないためか、瑞奈とのわだかまりがまだ解けないでいる。

「……さて、どうしたもんかね」

机には向かわず、ベッドに腰をかける。

その際も、ベッドシートを乱さず座っており、彼女の性格が読み取れる。

「……悩んでも仕方ないか。もう、あたし自身の答えは出てるわけだし。あー……勉強すんべ。テスト勉強……」

どうやら、彼女の中ではすでに答えがで出ているようだ。

ここでも彼女の切り替えの早さが発揮され、数秒悩んだと思ったらすぐに机に向かい始める。

……だが、何故か始めたのは勉強ではなく机の周りの掃除であった。

「は……。なーんでテスト前とかがってこう、掃除とかしたくなっちゃうのかなあ？」

その頃……すぐには帰らず、寄り道途中の樹里たちはいつものようにカフェに向かっていた。

そしてこの日は、まだ樹里が会ったことのない常連客も来ていた。彼女らはマスターですら久々に見たほど、最近顔を見せていなかった。

名は、柚月凜子と中川都萌。

「いらっしやい」

「ん？ 誰か来たん？」

マスターがドアを開ける音に反応し声をかけると、凜子もまたドアの方に目をやった。

「うん。……もしかして、あの子たちとキミらは初めて会うのかな？」

「は、はい……。えっと、大丈夫……だよな？」



「平気やって！ 見てみい、高校生っぽいやん。取って食うたりせんで」

凜子の後ろに隠れるように都萌が呟く。彼女は警戒心が強く、人見知りをするタイプであった。

そんな都萌を自分の後ろに従えつつ、凜子が樹里たちに声をかける。

「こんちー！」

「……あ、こんにちは……」

「自分ら、うちらとは初めて会っくんよね」

「えっと……あ、はい」

「ほな、名乗つとかな。うちは袖月凜子。んで、こっちの子は中川都萌ちゃん。二人とも、聖浄大学っちゅーとこに通う大学3年生やな？」

「うん……。よろしく、ね？」

「……えっ？ 聖浄大学？」

凜子は自分の通う大学まで言ったが、それが瑞奈の興味を引いた。

「そ、そうやけど……それがどうしたの？」

「……わ、わたし、そこ目指してるんです！ あの、あの、あとですわ、お、お姉様……じゃなかった、南野優香さん、ご存知……ですか？」

「えっ……？ 優香ちゃんのこと、知ってるの？」

「はっ、はい！ わたし、お姉様に憧れて聖浄目指してるんですっ！」

「そやったんかあ。ほな、うちの後輩になるかも知れんって事やな」

「はい！」

瑞奈が自分の志望校を口に出した時、樹里もまた驚いていた。

(……みずにも聖浄目指してたんだ。確かに、私と同じくらいの成績なら射程圏内ではあるけど……)

「ん？ ジュリー、どうした？」

口を半分開いたままで立ち尽くしている樹里を不思議に思ったか、都が尋ねてきた。

「へっ!?!? ……あ、ああ、みやびよんか。ううん、別に何も……」

「そう? なーんかビビってたみてえだからよ、心配になってさ」

樹里が都の言葉で我に返ったところ、凜子が話を振ってきた。

「なあ、自分ら名前なんてーの?」

「名前ですか? わたし、橋本瑞奈といいます。これから頑張ってお二人と同じ大学に合格します!」

「おれ、神崎都。ちよつと前までここで働いてただけど、二人の顔は見たことなかった気がする。よろしくな!」

「私は……藤堂樹里と申します。初めまして」

「えと、ちっさい子が瑞奈ちゃん、男勝りな子が都ちゃん。それで、おつきな子が樹里ちゃんやね。よろしく頼むわー」

「……よ、よろしく……ね?」

(……っ! か、かわいいっ……!)

凜子の背後から聞こえる小さな声、そして彼女の後ろに隠れながらこちらの様子を伺う姿が、かわいいもの好きの樹里の心を掴んだ。「ジュリーちゃん、どうしたの? 顔が赤いよ?」

「あ……う……。そ、その、都萌さんが……ちっちゃくてかわいいなって……」

「またそれかよ! 年上の人に向かってかわいいだなんて失礼じゃねえか?」

「ううん、いいの。気にしてないから」

「それならいいんだけど……ジュリー、一応謝っとけよ?」

「う、うん。ごめんなさい……」

「気にしてないって。だって、わたしも自分で小さいってわかってるし、コンプレックスだとも思っていないの」

申し訳なさそうに頭を下げる樹里に対し、都萌は諭すように続ける。  
「それどころか、この体型はわたしのアイデンティティーだと思う。」

てるの。小さいからって、それを負い目に感じたことはないから。だからね、樹里ちゃんだっけ？ あなたも体が大きいのを気にしちやダメなんだから。ね？」

「はっ、はいっ！ じゃあ、それじゃあ……ちょっと、だっこさせてもらってもいい……ですか？」

「だっこ？ ……べ、別にいいけど？」

「やった！ そ、それじゃ失礼します！」

「ふわあっ!？」

体が小さいことを気にしていないと力強く言った都萌を、樹里は高々と抱き上げた。

「うわ、軽っ！ つーか、小ささ！ ……も、持って帰りたいっ!」

「おゝ、高い高いやー」

「ホントに高い。背の高い人の目線ってこんな感じなんだね。なんだか新鮮……」

「あは、あははは。……あっ、ありがとございました！」

満足した様子で都萌を下ろす樹里だったが、その手にはまだ感触が残っているようだった。

「あわわ、まだ手に感触が残ってる！ ふにふに……」

「あははっ。樹里ちゃんはホンマにちまっこいのが好きなんやな。

ああそや。自分、身長なんぼある？」

「身長……ですか？ 4月に測った時は180cm超えてたと思います」

「うわっ、でかっ！ 180で、バレーボールの選手でもそうそうおらんで!？」

「そうそう！ あとこいつ、見りゃわかると思うけど……胸が……」

「ちょ、みやびょん！ 何言ってるのよっ!」

「……一見ただけでわかるわ。そのごっつい胸は！ ……はあ、うちもそこそこ自信あったんやけどな」

「そんなに見ないで下さい……。これはただ、背が無駄に高いから、

それに比例してるだけで……」

「けっ！ どーせおれはジュリーに比べれば……って比較対象にもなんねえか。……はあ」

「気にせんときー。これからもっとおつきくしてもらえばええねん……て、何言わせるのよ〜！」

「えっ……？ 大きくしてもらって、誰に……？」

「うっさいわも〜！ そんな、自分で考えーや！ 自分で言うてて恥ずうなったわ」

「がう……。おれも恥ずかしいや……」

互いを見比べ、同じタイミングのため息をつく凜子と都であった。

「な、なんで二人とも落ち込んでるの……？」

「わ、わたしは小さくてもいいんだもん。ステータス……だから……。気になんかしないから……」

こうして、カフェの一日は過ぎてゆく。

そしてこの日は、樹里にとってはいろいろな事を学んだ一日でもあった。

ようやく日の沈んだ夜8時過ぎ、自宅に戻った瑞奈はひとつの決心をしていた。

（かおりゆんに謝らなきゃ……！）

そして同じ頃、果緒梨もまたひとつの決心をしていた。

（瑞奈に謝る……！ これがあたしの……答え！）

すれ違う二人が出した、同じ結論。

元の鞘に戻すための、行動。

それを実行に移したのが早かったのは、果緒梨だった。

彼女のほうが電話をかけるのが、若干早かった。

「ふえっ！？ ……かおりゆんだ！ ……もしもし？」

「……あ、瑞奈。電話だと久々だね」

「うん……。ど、どうしたの？」

「で、電話代もつたないから用件だけ言うからね。……ごめんっ

「！！」

「ふええっ！？」

「だからっ……！！ こないだからあんたに対してメツチャ冷たくて……ごめんって言うてるの」

「うん。それについては……わたしも今謝ろうとして……」

「そだったの？」

「うん。電話かけようとしたら先にかかってきて、驚いちゃった」  
「なによなによー。あたしらってそんなところでも考えることおんなじなんだね」

「えへっ、そうだね！」

「……ホント、ごめん。あたし、やっぱりあんたの事すごい大切な友達だと思ってるみたい」

「わたしも……。すっごくさみしかった……」

「ごめん……。マジでごめん。もう絶対あんなことしない。約束する。あんたを……裏切らないって」

「……うん」

「その代わり、あんたも約束しなさいよ。もう……あたしを裏切らないって！」

「うん、わかってる。……どこまで行っても、わたしとかおりゆんは……親友だよね？」

「もっちろん！ 言ったからにはあんたも守り通しなさいよね」

「うん！ ……ありがとう、かおりゆん」

「ば、バカ！ お礼なんかいいわよっ！ ともかく、電話代もったいないからもう切るわよ。また明日ね！ お休み！」

その言葉と同時に、一方的に通話を切った果緒梨。

「もう、かおりゆんだったら……素直じゃないんだから」

ともかく瑞奈は、これで無二の親友との仲直りを果たすことが出来た。

だが、これで彼女の抱える問題が全て消えたわけではない。

樹里が、自分の幼馴染である爽太に向ける気持ち。

そして自分自身が、彼に向ける気持ち。それらについて考えると、まだまだ彼女に安息の日々は訪れそうにない。

その頃の爽太は、瑞奈のことを考えていた。

「……オレがチビ奈を意識してる？」

夕食時、爽太は母親に『話題が必ず瑞奈の話』だと指摘をされていた。

本人にもその自覚はあるようだが、他人から言われることで改めて実感させられたようだ。

「いやいやー、そりゃねーべ母さんよー。このオレがあの子ビ奈にだけ？ あるわけ……あるかもなあ……」

彼はため息をひとつつき、クッションを枕にして横たわった。

「まあ……なあ。確かにあいつはいつまでも子供かと思つてたら、いつの間にか大人っぽい考え方とか大人っぽい顔とかするようになってやがって……」

10年の歳月は、幼馴染をまるで別人のように変えてしまったようだ。

自分はあまり変わっていないだけに、余計にそう思っているのだろうか。

「まさか、これが恋……？ いやいや！ それだけはない！ 断じてない！ だって、あいつは幼馴染なだけで、それ以上は……！」

あーうぜー！ 水やりでもしてこよう……」

そう言いながら、爽太は部屋を出てゆく。彼の趣味には園芸があり、今は小さめのサボテンを育てているようだ。

あまり本を読まない彼ではあるが、植物図鑑だけはマンガ本に並んで本棚に収められている。

偶然は重なるもので、やはり同じ頃、樹里もこの日起こったことを思い返していた。

彼女にとっては、今日は様々なことを知らされた一日となっていた。

例を挙げると、瑞奈が自分と同じ大学を目指していること、自分が他の女性より体が大きいのを気にしていること、そして、小さいものを見るとそれが人であっても異常に興奮してしまうことなどだ。「はあ、かわいかった。……きつとこの感情が萌えてヤツなんだろうな……」

彼女の視線の先には、大小さまざまなぬいぐるみがあった。

これらは普通に購入したのもあれば、ゲームセンター等で入手したものもある。

そのうちのひとつを手に取り、抱きしめながら遠くを見つめる。

「あ〜んも〜、か〜わ〜い〜い〜！ ……かわいいといえば風間くん。まさか、あんなにかわいい男の子がいるなんて……。絶対、私だけのものにしてやるんだから！」

そう決意を固めながら、ぬいぐるみを握り締める樹里。

ぬいぐるみは形を変えるところか首が体の中に埋まってしまい、すぐには戻りそうもなかった。

「あつ！ やっぱ……。またやっちゃったよ。……また取ればいいや」

被害者となつたぬいぐるみを元の場所に戻してから、彼女はベッドの上を転がりまわる。

「あ〜も〜、かわいいかわいかわいっ！！ 思い出だけでもダメとかどんだけよ私」

樹里は爽太のことを小動物か何かのように思っているらしく、彼の一挙手一投足全てが気になっている。

この時も彼の行動を想像して一人で盛り上がっていた。

「はあ、はあ……。いけない、落ち着かないと。……そう、私は完璧人間。些細なことで取り乱したりはしないの。すー……。はー……」

高ぶった心を静めようと、深呼吸を始める樹里であった。

「……よし、落ち着いたぞ。……そういえばみずにゃん、聖浄に行くとか言ってたっけ」

続いて彼女が思い出したのは、瑞奈が自分と同じ大学を目指しているということだった。

「私と同じくらいの成績なら大丈夫だとは思うけど……私はどうしよう。行ったら遊べなくなりそうだし、でも行かなかつたらママがなんて言うか……はあ」

樹里は幼少時から様々な習い事を経験しており、その全てを自分のものとしていた。

その頑張りとは完璧主義者な母親をもうならせ、過去に聖浄大学への合格者を出した実績を持つ高校を選ぶこと、そしてそこでの全てのテストでトップの成績を取り続けることを条件に自分の行きたい高校を選ばせてもらう権利を得ていた。

『聖浄大学への合格者を出した実績を持つ高校』の時点でかなり選択肢は狭められていたが、それでも彼女は満足していた。

しかし、樹里自身は自分の進路に迷っている。母親の念願である大学への合格もしたい。だけど自分の進みたい道は別にある。

彼女の心は、この2つの間で揺れ動いていた。

「そろそろ……考えなきゃな」

翌日……。

「……全っ然寝らんなかった！ ねっむ！」

進路についてあれこれ考えていたら、いつの間にか朝が来てしまったようだ。

時間は朝の7時前。まる5時間は考えていたことになる。

「うっ……ダメだ。このままじゃまた寝ちゃう……。めっさ眠いけど……起きなきゃ……！」

そう言いながら自分を奮い立たせ、着替えを済ませて階下を下りる。

「さて、朝ごはんでも食べますかね」



ちなみに、この時点ですでに母親は仕事に出かけている。幼い頃に父親を失った樹里は、そこから今まで母親一人に育てられてきた。

その恩があるからなのか、彼女はなかなか母親に意見が出来ないでいる。

「……いや、眠いわこりゃ。食べてらんない。っーか食べたら吐くわ。持つてっってお昼にみんなと食べよつと……」

あくび交じりで、食卓に並んでいる朝食の一部を容器に詰めてゆく樹里。

そして、傍らに置いてあった包みにその容器をねじ込んだ。

母親はどんなに朝が慌しくても、自分と娘の昼食を作っている。

朝食はその際に余ったものを流用しているので、朝食と昼食が別ということは滅多になかったりするのだが。

「よし、こんなものかな。……ふわ、眠い。早めに教室入って寝よっ……」

眠い目をこすりつつ、ドアに鍵をかけて学校へと出発する。

しかし彼女は、致命的なミスを犯していた。

寝ぼけていたためか髪の毛のセットを忘れ、さらにはメガネまでもかけていなかった。

結果的に彼女は、学校外での姿のまま登校することになっていた。それに気づかぬまま、誰もいない3-E教室に着いた樹里。

引き寄せられるように自分の机に向かい、早々と寝息を立てた。それから15分後、瑞奈が到着した。

この日の彼女は日直であつたらしく、少し早めに来ていた。

「う、重いよ……。あれ？ ジュリーちゃんが寝てる……」

大量のプリント類を教卓に置いて一息つくつと、その視線の先では樹里がすやすやと眠っている。

「くすっ、ジュリーちゃんでもあんな風に寝ることもあるんだね。

……写真撮っちゃおつと」

彼女の行動が珍しいと思ったのか、瑞奈はポケットから携帯を取

り出してカメラモードに切り替えた。

しかし、その際に鳴ったシャッター音で樹里は目覚めてしまった。

「ん……………う……………。あゝ、少しは寝れたぞ……………ん？ みずにゃん

」？

「わっ、起こしちゃった？ えへっ、おはよ

「うん、おはよう。それにしてもずいぶん早いじゃない。どうした

の？」

「えっとね、今日は日直なんだ……………って、あれ？ ジュリーちゃん、メガネどうしたの？」

「……………？ あっ！ やばい！ つけてくんの忘れた！」

「あと、髪型もいつものお下げじゃない……………」

「……………ちよっと待った。それって、私が学校の外でやってるのと同じ顔ってこと！？ うっわ、まずいよ……………」

ここに来て、ようやく自分のミスに気がついた樹里。しかし、今から戻っても遅刻は必至であろう。

彼女は観念して、そのままの姿で一日を過ごすことに決めた。

## 第5章：告げる者、拒む者

「そ、そうだ！ みずにゃん、今日日直だって言ってたよね！？  
も、もし、黒板の上のほうの字が消せなかったら……私が手伝って  
あげる！」

「えっ……？」

突然の樹里の提案に、何のことだかわからず面食らう瑞奈。  
彼女のこの行動には、理由があった。

（黒板を消してればその間は黒板のほう向いてればいいわけだし、  
それならみんなに顔を見せなくて済む……。髪型はこの際目を瞑る  
う）

だが、この提案は受け入れてもらえなかった。

「大丈夫だよ。椅子使えば上まで届くから」

「……そう？ ならいいけど」

「気遣ってくれてありがとう。えへへ」

（ちっ、仕方ないか……）

ひとつの作戦が失敗したので、また新たな作戦を考え始める樹里。  
この間、瑞奈は日直として配布物を分かりやすいように分類した  
り、机の整頓をしていた。

だが、日直の仕事の中には机の整頓は含まれていなかったりする  
のだが。

数分後、机の整頓を一段落させた瑞奈は黒板消しを手にとってい  
た。

そして、消されていない板書を消そうとしたが……背の低い彼女  
では最上部まで届かない。

先ほどは椅子を使うと自分で言っていたにも関わらず、この時点  
では気づいていなかった。

その場でジャンプすることでなんとか消そうと頑張る姿を見た樹  
里は……にやけていた。

(ちょっとちょっと、そのかわいさはレッドカード級じゃないのよ！これはアレね、私にだっこして欲しいのね！)

そのように勝手に解釈した彼女は、少しでも高くジャンプしようとひざを屈める瑞奈を抱き上げた。

「ふええっ！？ な、なに〜！？」

「ほらー、届かないじゃない。でもさ、なんで椅子使わなかったの？」

「えへっ、頭から抜けちゃってた。……えっと、わたし重くない？」

「そんなことない！ すーごく軽いよ。ほら、消すんでしょ？」

「あ、うん！ もう少し左行ける？」

「あいよっー！」

初めは戸惑っていた瑞奈も、樹里の好意に甘えていた。

(あゝ、やっぱりちっちゃい子っていいわ〜……)

(ジュリーちゃんが……なんかおかしいよ〜……)

瑞奈は背後に奇妙な気配を感じながらも、少しずつ黒板をきれいにしていった。

「よし、このくらいでいいかな。ジュリーちゃん、もういいよ」

「えーもう？ ……じゃなかった、お疲れさん」

「ありがとう。助かつちゃった」

「いやいや、このくらいどうってことないよ。それより……ちょっといい？」

樹里は緩みきった顔を普段の顔に戻し、瑞奈の目をまっすぐに見て尋ねる。

「ふえっ？ な……なあに？」

「……みずにゃんさ、聖浄大学……受けるんだって？」

「う、うん。昨日カフェに凜子さんたちがいて、つい話しちゃってジュリーちゃんも聞いてたんだ？」

「まあね。……実は私も、そこ受ける……」

「えっ！？ ジュリーちゃんも聖浄目指してるの！？」

「あーいや、まだ行くと決めたわけじゃなくて。ただ……親の希望

でき。うちのお母さん、私をなんとかして聖浄に入れたと思ってて、私もついこないだまではそれでもいいかと思ってた。でも……あそこ入ると今みたいに時間が自由に使えなくなりそうで、それがイヤで……」

「大学入ったら仕方ないよ……。でも、わたし以外にもいてよかった。一人しかいないかと思って心細かったの」

「だからまだ決めたわけじゃなくて……。ま、いいや。決めてない理由ってのは他にもあって、いつまでも親の決めたルールに沿って人生を歩むのってどうなのよって思うわけ。やっぱさ、自分の進路とか将来くらいは自分で決めたいじゃない。……ね、みずにゃん」

「……なあに？」

「みずにゃんが聖浄行きたいのは……もしかしなくても優香さんに少しでも近づきたいからじゃない？」

「それも……理由のひとつ。確かに、お姉様が通う大学だから、わたしもそこに行きたいっていう気持ちは強い。……でも、それだけじゃないの。わたし、子供の頃から今に至るまでこんなにも小さくて、何事にも臆病になってた。だけど昨日、都萌さんの話を聞いてから少し変わった。あの人にはわたしよりも小さいけど、その小ささを自分のアイデンティティーとまで言い切ってた」

「うん。……私に言ってくれた言葉だと思ってたけど、みずにゃんにも届いてたんだね」

「話を聞いたのが昨日だし、そんないきなりそこまで思うことは出来ないけど……でも、わたしも聖浄に入ることができたら、自分を変えられるような気がするの。だから、わたしは頑張って自分を変えられる。目指す自分になるために、やる事をやる。聖浄なら、それができる。それが、わたしの理由かな」

「みずにゃん……すごいね。ちゃんと考えてるんだね」

「もちろん、お姉様ともっとお近づきになれるってのも大きいけどねっ……！」

瑞奈は、今の自分の気持ち素直に表現した。

樹里もそれをじつくりと聞いていたが、彼女に反論する形で話かける。

「本当にそう？」

「ふえっ……？ な、なにが？」

「あーいや、そんな深刻なことじゃなしに。ただ……そこまで聖浄にこだわる理由があるのになって思っ」

「……充分すぎる理由だと思っけどな、わたしは。絶対に無理っわけじゃないし」

「確かに。みずにゃんの成績なら狙いたくはなるか」

「そういうジユリーちゃんは、聖浄以外だとどこか考えてるところってあるの？」

「聖浄以外か……。実はまだほっとんど考えてないっつか、どんな大学があるかすらわかんないのよね。近くに牧浜ってところが確かあったと思っけど……」

「うん、あるよ。そこね、わたしの知ってる人がたくさん通ってるの。みさきさんってわかるよね？ あの人もそうだし、かおりゅんのお姉さんもそこ卒業したし……」

2人の話題に上がった牧浜大学とは、この近くにある『私立牧田海浜大学』のことである。

文学部、経済学部、教養学部、工学部といった学部があり、周辺の環境もよいため毎年多数の学生が受験している。

カフエ Hexagramの常連の多くは、その大学に在籍していたりもする。

だが、大学のランクとしてはいわゆる二流なので、樹里や瑞奈といった成績のよい生徒はもう少し高いところを狙うことが多い。

樹里もその例に漏れず、初めから牧浜は考えに入っっていなかった。しかし……。

（そっか……。牧浜なら遊びながらも大丈夫っばいな。私なら）  
いつしか彼女はこう思うようになっていた。自分ならば、牧浜に入れば遊んでいても大丈夫なのは、と。

(あーでも、そこ選んだらママになんて言われるか……！)  
だが、牧浜に入るためには最大の壁である母親の説得が残っている。

どうやら、まだまだ樹里の葛藤の日々は続きそうである。

にわかに教室内が賑わいを見せてきた頃、朝のHRが始まることになっていた。

いつものように委員長呼ばわりされている樹里の号令から、3・E学級の一日が始まるのだ。

担任の孝太郎は号令をかけた樹里の姿が普段と違うことに気がついてはいたが、それを指摘することはしなかった。

「はい、おはようございます。……さて、みんなも分かっていると  
思うけども、もうすぐ期末テストです」

「ええ……！？」

「はいはい、静かに。ここでの頑張りが後々にものすごく響いてくるから、みんな気を抜かないように」

「はい先生ー！」

「おや、質問か。なんですか、青山さん？」

「今回の化学って誰が作るのー？」

「誰だっけ……。少なくとも、ぼくでない事は確かだ」

「ええ……！？」

「ほれ、文句たれないの。誰が作っても同じなんだから。……では、そろそろ一時間目が始まります。教室移動のある子は遅れないように。……ああ、あと藤堂さん、終わったらちよつと来てくれるかな」

「……？ はい」

「ああいいよ、解散で」

孝太郎は終わり際に樹里を呼び、HRを終わらせる。

突然呼ばれた彼女は、恐る恐る尋ねていた。

「えっと……。どうしたんですか？」

「実はね……キミのお母様が仕事場で倒れたとの連絡が入った

んだ」

「えっ！？ ママ……じゃない、お母さんが……？」

「そうだ」

「それで！？ 大丈夫なんですか！？」

「落ち着きなさい。その直後に連絡がご本人からあって、大丈夫なので心配しないで欲しいとの事だった」

「……私、行った方がいいですよね？」

「いや、行つてはならない」

「……っ！ どうして!？」

「ご本人の希望なんだ。もし娘が行きたいと言つても止めてくれ……」

……と

「そう……ですか」

「ともかく、お母様は大丈夫だ。心配してはいけない」

母親が倒れたという知らせを聞き、いてもたつてもいられなくなつた樹里。

その事實は、冷静沈着な彼女を取り乱させるのに充分事足りるのであつた。

「だったら……どうして私に言つたんですか」

「うん？」

「大丈夫なら、どうして私に言つたんですか!!」

声を震わせつつも、孝太郎に詰め寄る樹里。

教室を出ようとしていた瑞奈たちも、思わず足を止めていた。

「知ってるでしょ……先生……！ 私の家はお父さんがいなくて、

お母さんが一人で頑張つてるって……！ それなのに私にお母さんが倒れただなんて言つたら、どうなるか予想できるじゃない！ 心配するなって言われても、そんなの無理だよ!! うっ、うっ……」

気丈でプライドの高い樹里が、その場に座り込み、泣き崩れる。

いよいよもつて事件だと気づいた瑞奈たちは、彼女のもとに駆け寄つた。

「ジュリーちゃん……どうしたの……？」



「あのジュリーが泣くなんて……先生、どんなこと言いやがったんだ!？」

「ちよつとコタロー先生! いったい何言つたのよっ!？」

「……これだから教師という仕事は難しい。生徒の気持ちを考えてやれないなんて、最低だ……」

「はぐらかさないで! 先生……」

「……藤堂さんのお母様が倒れたという連絡があった。その後、大丈夫だという連絡が今度はご本人からあり、同時に彼女に伝えたんだ。そうしたら……」

「そうだったのか……。くそっ! もしおれが先生と同じ立場だったら、きつと同じことしてたぜ!」

「あたしもだよ……。難しいとかそういう問題じゃないわね……」

「ジュリーちゃん……泣かないで……」

「うっ、うっ……。……そうだね、泣いてなんかいられないよね。お母さんは大丈夫だってわかったんだし……。それに、あの人だったら倒れたからお見舞いなんかに行ったら逆に怒りそうだし。

……私のお母さんは、そういう人なんだ」

「ジュリー……。お前、なんでそんなに強えんだよ……」

「取り乱しました。申し訳ありませんでした、先生」

「謝るのはこちらの方だ。本当にすまなかった……」

「いえ、もういいんです。……ほらみんな、急がないと遅刻しちゃうぞ」

先ほどまで見せていた涙をせき止め、毅然とした態度で皆に急ぐように促す樹里。

孝太郎は再度彼女に謝罪し、職員室に戻っていった。

昼休み、樹里は携帯から母親に電話をかけてみたが……。

「……ちえ、出ないや」

電話越しに聞こえる声は、機械特有の無機質な音声だった。

「出なかったの?」

「うん。大丈夫だとは聞いたけどさ、やっぱり心配だよ……」

「やっぱり自分に近い人が病気とかやらかすと心配だよな。……おれ、ママとかの思い出ないけど……」

「私もお父さんの思い出は……ないんだ」

「へへ……。ジュリーよお、お互いつれえよなあ……」

「まったくだよ、みやびよん……」

「はあゝあ……」

都なりの励ましに幾分か気を楽にしたような樹里は、おどけながら都と同じタイミングでため息をつく。

この2人の行動は、周囲の空気を少しづつ軽くしていった。

「なによなによー。ジュリーったらあんまし落ち込んでなくね？」

「まあね。本人が大丈夫って言ってるんだし、私が心配しても仕方ないからね」

「そんな風によく切り替えられるのって……すごいなあ」

「それが私だよ、みずにゃん。……それっ！」

「ふえっ!？」

樹里はいきなり椅子から立ち上がると、朝方と同じように瑞奈を抱き上げた。

「あははっ！ かーわいい〜！」

「ジュリーちゃん、下ろしてえ〜……」

「……なあ、かおりゅん？」

「ジュリーってあんなキアラだったんだな、でしょ？」

「ああ……。もしかしてあいつ、ヤケクソになっただけか？ 今日

は髪も結わいてねえしメガネもしてねえし、どこか変だぜ」

「あたしもそう思った。髪型セットもメガネもしてないから、もうどうにでもなれみたいな。でも……あたしらでどうにかできる？」

「いや、無理だ。できねえし、その必要もないと思う」

「……ま、そんなら長い目で見ることにするべよ。あの子、あたしらなんかよりずっとずっと強いんだし」

都と果緒梨が小声で相談をしていると、彼女らの席に爽太たちが

近づいてきた。

「よお、みなの人！ …… ってあれ？ チビ奈は？」

「ん！」

瑞奈の姿だけが確認できないことを不思議に思った爽太が彼女の所在を聞くと、尋ねられた2人は同時に人差し指を天井に向けるのだった。

「ん？ 上？ …… げっ！」

指示に従い、上を向くと……そこには未だに樹里に抱き上げられている瑞奈がいた。

「ジュリー、お前なにやってんの？」

「へっ！？ あ、風間くん!？」

樹里は、爽太が近づいてきたことに気づいていなかった。

声をかけられることであろうやく我に返った彼女は、ゆっくりと瑞奈を椅子に座らせる。

その瑞奈は、うらめしそうに樹里を見上げていた。

「うっ。ひどいよお、ジュリーちゃん……」

「あはは、ごめんごめん。それよりも、風間くんたちどうしたの？」

今日は原田くんと、えつと……後ろの人は？」

爽太や海斗の他にいた人物の中に、3・Eの生徒ではない男子生徒が一人混ざっていた。

汐野学園はクラス替えのない学校のため、同じクラスにならないければ3年間で交流する機会はほとんどない。

樹里も、一人だけ見覚えのない男子生徒がいることに戸惑いを隠せないようだ。

「俺のこと？ 俺は稲村竜造。野球部の部長をやらせてもらっている。……よろしく」

「へっ、あなたが野球部のキャプテンなのね。私は藤堂樹里っていうの。こちらこそよろしくね」

「ああ。……しかし、ずいぶん背が高いんだな。俺より背が高い女性には初めて会う……」

「褒め言葉として受け取っておくよ。で、今日はどうしたの?」

「それはオレっちから言わせてくれです」

樹里と竜造の間に突如として割り込んできた海斗が、これまた突如として説明を始めた。

「昨日だかにみんな、オレっちたちの試合見に来てくれるって言ったじゃないですか。それをこいつに教えたらもう興奮しっぱなしで、昼休みのミーティングをつぶしてまでここ来たいって聞かなくて……」

「ば、バカヤロ……!」

「……そこまでして、おれらに会いに来てくれたのか? へへっ、うれしいな……」

「始まったぞー、みやびよんの妄想タイムがー」

「がっ……」

(やべ、みやびよんかわいい……)

「で? 爽太くんはどうしたの?」

「お、オレ? お、オレはだな、その、なんだ。こいつらがお前らに変なことしないために見張る役割を……」

「ちょ、風間! なんですすかそれ!」

「そうだぞ。海斗はともかく、俺までそんな風に見られては野球部の沽券に関わるから勘弁してくれ」

「がっ……。竜造、お前も何気にひどいでっすね……」

「あははっ、稲村くんって意外と面白いんだね。野球部っていつもこんな感じ?」

「決めるときはビシッと決めるけどな、それ以外は気楽なもんだよ。メリハリが大事だからさ」

「ねー! いつまでもくっっちゃべってないでさー、早く食べよーよー! おなかすいたー!」

会話が盛り上がりかけたところで、果緒梨が空腹を訴えてきた。

昼休みが始まって、もうすでに10分が過ぎてしまっている。

「おっといけない。じゃ、机くっつけて食べよ。……今日はたくさ

ん持ってきたんだ、みんなで分けようね！」

「おおっ！ も、もしかして委員長の手作りでっすかっ!？」

「あはっ、残念。お母さんの手作りでしたー」

「はっはっはー、残念だったな原田」

「……いやはや、にぎやかになったもんだぜ」

「そーね。ま、あたしはこういうにぎやかなのも悪くないと思うけど」

男女合わせて7人となった一角は、いつしか3・E教室の賑わいの中心となっていた。

瑞奈はひとり、その一角に自分がいることを感謝するのだった。

(いつまでも……みんなで仲良く過ごせますように……)

そして放課後。

樹里は珍しく寄り道をせずまっすぐ家に帰っていた。やはり母親のことが気になっているようだ。

しかし、家に帰ってもいつものように誰もいなかった。

「……帰ってないんだ。ったく、本当に倒れちゃっても知らないぞ」

途方に暮れた樹里は自室に戻り、もつとも大きなぬいぐるみを抱きしめた。

「はあ、これじゃ相談なんてできっこないよなあ……」

ため息をひとつつき、未だ帰らぬ母親を待つ樹里であった。

同時刻、何かを決心した爽太は瑞奈に電話をかけた。

「もしもし。どうしたの？」

「あっ、悪いないきなり。……あのさ、今ちよつと出られるか？」

「うん……。別にいいけど。どいっ？」

「そうか！ よかった……。じゃ、お前んちの近くの公園ってまだあるだろ？ そこで待ってて」

「うん、わかった。待ってるね」

「ああ。じゃ、またあとで……」

爽太は勇気を振り絞り、見事に瑞奈と会う約束を取り付けた。そこから10分後、彼らは合流した。

「あつ、爽太くん。こんばんは」

「よ……よお。さつきぶり」

「うん。それで、どうしたの？　なんかお話したいことでもあった？」

「あ……ああ。どうしても、お前に言いたいことが、な」

「え？　なあに？」

「いいのか？　いきなり言っても」

「もったいつけなくていいよ……。早く言つてよ」

「じ……実はな……オレ……」

「？」

「……と、その前に」

「え？　ここでじらすの？」

「こつちから言っておかないと、この先のことが言えそうになく  
さ……」

「……うん。がんばって」

「ああ。……オレな、ジュリーのやつにすんげー勇気もらってんだ」

「え？　ジュリーちゃんに？」

「そう。あいつもお前らの輪の中に入るのにすげー勇気使ったって聞いた。あん時のオレはあいつのその行為を踏みにじるような事したけどさ……。ともかく、オレはそんなジュリーに勇気もらった。

……だから、言えなかったことが言えるかも知れないって思って、お前を呼んだんだ」

「えっ……？　ど、どういうこと？」

「……おつまえはホントに鈍感だな、昔っから……。ともかく、オレは……お前に恋してる……と思う」

「……」

「この気持ちに少しでも気づいた時は、もう遅かった。同時に、お

前のことを大切にしたいって気持ちも止まらなくなった。きっとオレは……ガキの頃からもうお前のことが……」

「いやっ！ やめて!!」

爽太の決死の告白は、届かない。

瑞奈は爽太を、拒む。

爽太はそれでも引き下がらず、さらに続ける。

「どうしてだよ!? 最後まで言わせてくれねーのか!??」

「違うの! ……違うの……」

「じゃあどうして……」

「爽太くん、言う相手が間違ってる……」

「は!? 間違ってるねーよ! オレはお前が好きだから……」

「やめてええっ!!」

「……!??」

「もう……やめて……。くすん……。爽太くんはそれを……ジュリ

ーちゃんに言っただけ……」

「な、なんでそこでジュリーが出てくんだよ」

「わからないの……? ジュリーちゃんはね、爽太くんのが好

きなんだよ……」

「えっ……? ウソつけ、そりゃねーよ。この空気で冗談はなしだ

ぜ」

「ウソじゃないもん!! わたし、本人から聞いたんだもん。いつ

も爽太くんのことかわいって言って、すっごく意識してるんだよ」

「そんなの知るかよ! だとしてもオレはお前のことが……」

「だから言わないで! 聞きたくない! それ聞いちゃったら……

わたしも好きになっちゃうから……」

「は!? それはそれでいいじゃねーか! なんでダメなんだ!??」

「……ジュリーちゃんを裏切っちゃう。わたしはつい最近かおりゆ

んを裏切ったばかりなのに、今度はジュリーちゃんを裏切っちゃう

の……!」

「どうして……そうなるんだよ……?」

「だって……。ジュリーちゃんが爽太くんのこと好きだって知ってるのは、本人以外にはきつとわたししかいないの……。それって、ジュリーちゃんがわたしのこと信用して言ってくれたってことでしょ？ だったらやっぱり爽太くんの気持ちには……」

「ざけんな！！ だったらよ、今度はオレを裏切ることになるぞ！？ お前のことが好きだっていうオレの気持ちを！」

「ひっ……！！」

「どうすんだよ！？ このままじゃお前、どっちを選んでも必ず誰かしらを裏切ることになるぞ！？」

「いや……。いやああああああっ！！！！」

感情が高ぶるあまり、歯止めが利かなくなつた爽太。

勢いと、言葉そのもので瑞奈をどんどん追い詰めていく。

瑞奈はいつしか、自分で答えを出せなくなつてしまった。

その結果、瑞奈は悲鳴を上げながら力なく倒れこむのだった。

「！？ おい、チビ奈！？」

完全に倒れて地面に叩きつけられる前に、なんとか抱きとめた爽太。

しかし、これからどうすればよいかは今の彼には判断できなかつた。

「やべーやべー、なんでいきなりブツ倒れちまうんだよ！？ と、とにかく誰か呼ばないと！」

彼の頭に、3つの選択肢が浮かび上がる。

- 1 都に頼む
- 2 果緒梨に頼む
- 3 樹里に頼む

数分迷つた末、爽太は都に連絡を入れた。

果緒梨では2人がかりでも倒れてしまった瑞奈を移動させるのに苦労すると考え、樹里は先ほどの瑞奈の言葉を考えると顔を合わせ



づらかった。

その点、都ならば力も爽太以上にあり、なおかつもつとも相談しやすい相手だと思っただけなので都合良かった。

当の都はまだ帰宅しておらず、カフェからゲームセンターという道順を辿っていた。

「ん……なんだあ？　せつかく格ゲー空いたつっのによ。……もしもし？」

「都か？　今どこにいる？」

「どこってゲーセンだけど、どうしたんだよ？」

「……チビ奈が倒れた」

「はあ！？　どういこうったよ！？」

「ともかく早く来てくれよ！　オレだけじゃどうしようもできなくて……」

「ったく、わかったよ！　あーあ、せつかくおれの番が来たつてのによあ。んで？　どこにいんだよ？」

「チビ奈んちの近くの公園。わかるよな？」

「もちろん。……よっし、わかった！　おれが行くまで、ちゃんと見てろよ！」

頼もしい言葉を残し、都は通話を切る。爽太もその言葉で幾分落ち着きを取り戻したようだ。

電話を入れてから2分後、自転車を全速力でこいできたらしき都が息を切らせながら現れた。

「はあ、はあ……。つ、着いたぜ……」

「都！　よかった……」

「んなことより瑞奈だ。……こいつの家にそのまま送ったら厄介なことになりそうだから、とりあえずおれの家に運ぶぞ」

「え？　……大丈夫なのか？　その、彼氏の許可なしで」

「ばっ、ばか！　潤さんは寛大だから大丈夫だよ……。……がっ」

「始まったよ……」

「はっ、いけねえ！　じゃあ、おれが瑞奈をおぶってくから、お前

はおれのチャリ使って先に帰ってきてくれ！ もえぎ荘、わかるよな？」

「ああ。部屋番号もわかってる。それじゃ……頼んだ！」

「任せとけ！」

瑞奈を都に任せ、爽太はもえぎ荘なるアパートに向けて出発した。

10分後、ようやく到着したそこは現代の建築様式とはあまりにかけ離れた、非常にレトロな建物だった。

爽太がその105号室のドアを叩くと、中から若い男が出てきた。

彼こそが都の彼氏である古賀潤という青年であり、最近までまた国外に出ていたようだ。

潤は真剣なまなざしで爽太を見やると、小さく笑って言う。

「キミが爽太くんだね？」

「あつ、はい」

「都ちゃんから連絡があったよ、『おれよりかわいい男の子がそっち行ってる』って」

「はは……そりやどうも」

「ともかく、上がるといい。狭いけど我慢してやってくれや」

「はい。……うわぁ……」

部屋に入ったとたん、感嘆の声を漏らす爽太。

それもそのはず、所狭しと並べられた各国を象徴する置物などに迎えられたからだ。

「ははは、驚いたか？」

「すっげー！ え、これ全部外国みやげですか？」

「そのとーり」

「……あれ、でもこれ『MADE IN JAPAN』って書いてあるけど」

「あーいや、それはだな……帰ってからシール貼ったんだよ」

「……ホントだ。でも、なんでそんなことする必要が……」

「うぐぐ……。ほ、ほら、オレって愛国心が強いからさ……。って今そんな事はどうでもいいんだ！ 瑞奈ちゃんが来るんだろ？ 客用の布団を敷いておかないと。その押入れに入ってるから取ってきて」

「はっ、はい！」

彼らは客用の布団を取り出し、ベッドの隣に敷いた。

「さて、これで準備は整った。……。それじゃあ、どうしてこんなことになったのかを、お兄さんに教えてもらえないかなあ？ んん？」  
「う……。えっと、オレがチビ奈を呼んで、自分の気持ち伝えたら聞きたくねーとか言われて……」

「で？」

「んで、その理由ってのがジュリー……。あ、他にももう一人、ジュリーって呼んでる女の子がいて、なんかそいつがオレのこと気に入ってるから、チビ奈はそいつを裏切りたくないからなんとか……」

「ん、そのジュリーちゃんってのはキミのことが好きなんだな？」  
「多分……。で、チビ奈はジュリーがオレのこと気に入ってるってのをジュリー本人から聞いたらしくて、そう言ってくれたのは自分を信じてくれているから、だからジュリーを裏切れないって言うてるんです」

「そんで？」

「オレはんなこと言われても諦めきれねーから、それが裏切りだったーんならオレの気持ちに答えないのはオレに対する裏切りだって言ったら……。倒れちまって……」

「……。なあ、爽太くんよ」

「はい？」

「キミさ、本当に瑞奈ちゃんのが好きなのか？」

「そ、そりゃもちろん！ じゃなかったらわざわざ呼び出して告白なんか……」

「本当にその相手のことが好きなら、その相手の行動全てを好きになるんじゃないのか？」

「……………」

「わからないか？ 今回の件で言うなら、瑞奈ちゃんがキミの告白を拒否したのが行動のひとつに当たる。考えてもみる。そのジュリって娘はどんな気持ちで瑞奈ちゃんに自分のことを話したのかを」「考えるまでもないですよ。ジュリーはチビ奈を信じてるから、オレのことを気に入ってるって話したんでしょ」

「わかってるじゃんよ。その娘はキミのことを気に入っているっつか、好きだと言い換えてもいいはずだ。……だから、瑞奈ちゃんはキミら2人が上手くいくように働きかけてる。たぶんジュリーって娘は、瑞奈ちゃんになんとかしてもらいたかったんだろう。その気持ちを汲んでやれ、ってことだ」

「……………だったら、オレはジュリーと付き合えってことなんですか！？」

「そうじゃない、そうじゃないよ。付き合えなきゃ無理にそうすることはない。大事なのは結果ではなく、過程。ジュリーちゃんとキミがたとえ上手くいなくても、瑞奈ちゃんのした事に間違いはない。……いや、上手くいったほうがいいんだろうけどな」

「よくわかんねーよ！ もっと分かりやすく言ってくれよ！」

「ちっ……仕方ねーなあ。いいか？ 瑞奈ちゃんのが本当に好きなら、ジュリーちゃんとキミが上手くいって欲しいっていう彼女の気持ちをもう少し考えてやろうぜってことなの。それを聞きもせず、ただ『オレはお前が好きだ！』なんつったってその声が届くと思っつか？」

「そうだけど……そうだけど！ だとしたらアレじゃないですか！？ オレはチビ奈のことを考えるなら、チビ奈の言うことだけにホイホイ従ってりゃいいのか！？」

「ちーがーうーっつの……。キミさ、自分のことしか見えてないよ。瑞奈ちゃんに告白した時点でOKがもらえるとも思ってた？ それか、断る理由がないからOKが出るとでも思ってた？ どうなんだ？ んん？」

「……………」

「瑞奈ちゃんにだって選ぶ権利はある。当然、迷う権利もある。それをいきなり答えを出させるのは酷ってもんじゃないのか？ ……オレだってさ、いつ都ちゃんを竜造くんに持つてかれるかわかんねー。でも、オレたちは都ちゃんの出した答えに従うのみさ」

「やだ……やだあ！ おれ、潤さんと別れたくない！！」

潤がなかなか納得しない爽太に自分の境遇を交えた話をしてしていると、後ろから都の悲痛な声が聞こえてきた。

彼女は、未だに眠ったように気を失っている瑞奈を背負ってここまで走ってきたので、すっかり汗だくになっていた。

ゆっくりと瑞奈を布団の上に横たわらせると、都は潤に抱きついた。

「持つてかれるなんて言わないで……！ おれはいつでも……あなたにそばにいたい……！」

「ありがとう。その言葉が聞けるだけで、オレは満足だ」

「潤さん……。キス、していい……？」

「もちろん。さあ、来な」

「はい……。んっ……。ふぁ……………」

都は大好きな彼氏に抱かれ、うっとりとした表情で体を預けている。

爽太は普段顔を合わせている都の思いがけない姿を目の当たりにし、小さな興奮を覚えていた。

「……………終わった？」

「おー、終わった終わった。悪かったな、待たせちゃって」

「へへ、うれしいな……………」

「……………さて、とりあえずオレはキミに言うだけのことは全部言ったつもりだ。あとはキミ次第だ、爽太くん」

「……………わかりました」

「で、だ。瑞奈ちゃんは落ち着くまでここに寝かせてあげること」

した」

「瑞奈んちへの連絡はこっちでやっつくから、お前はもう帰れ。な？」

「いや、でもやっぱチビ奈が心配だよ」

「まあ、落ち着こうぜ。オレンちにキミがいたら、この子にきつと余計な心配をかけるだろう。それに、そちらのご両親にもいらん迷惑をかけちまう」

「心配すんなって。瑞奈はおれたちがちゃんと見といてやるから。」

お前は男らしくどっしりと構えてりゃいいんだよ。男だろっ!？」

「……わかったよ。オレは男らしく、これからのことを考えることにする」

「よし、よく言った! 頑張れよ、恋するキューティーボーイ!」

「ぶっ!？ な、なんだそりゃ……。ま、いいや。んじゃ都、今日はありがとな」

「礼なんかいらねえよ! 気いつけて帰るんだぞ!」

爽太は2人に見送られ、すっかり日の暮れた帰り道を歩き始めた。

自分の気持ちに正直になりすぎた反動として、大切な存在を傷つけてしまった爽太。

だが今回の件で、瑞奈に対する自分の気持ちが偽りではないことを再認識するのであった。

## 第6章：息抜き

「う……ん……。あれ、ここは……？」

「お、目え覚めたか？」

気を失い、潤と都の家に担ぎこまれた瑞奈がようやく目を覚ます。

「都ちゃん……。潤さんも？ え、わたしどうしてたの？」

「ったくよお、ビビったぜ！ 爽太のヤツからお前が倒れたって聞かされた時は」

「……わたし、さつきまで倒れてたんだね。うう……ごめんね……」

「お前が謝る必要なんかねえよ。あとで爽太に文句言っとけ」

「……はっ、爽太くんはどこ!？」

「彼ならもう帰したよ。瑞奈ちゃんに余計な負担かけさせたくなかつたからな」

「そう……」

「ささ、もう少し休んでなよ。疲れてるんだろうから」

潤は瑞奈の体調を気遣うが、彼女はそれを拒む。

「ありがと。でも、これ以上みんなに迷惑かけられない。お父さんもお母さんも心配してるから……」

「まあ、それもそうか。じゃ都ちゃん、家まで付き添ってやんな」

「おう！ 瑞奈、帰りたくなったらいつでも言いな」

「ありがと、都ちゃん。……あう、まだちよつとふらふらする……」  
目を覚ましてから半身を起こしていた瑞奈だったが、まだ本調子ではないらしく再び横たわる。

「うわ、大丈夫か？ やっぱりもう少し休んでいきな。親だつてそんなに心配性じゃあるまいし、9時過ぎたからって心配しないつて」

「……やっぱり、普通のおうちはそうなのかなあ」

「ん?」

「潤さんは知らなかった？ わたしのお父さん、すっごく心配性で

泣き虫なんです。だから……早く帰らないとダメなの」

「そんなに？ 娘が心配なのは分かるけど、いくらなんでもそこま  
でもないでしょ」

「ううん。……あ、やっぱり。ほら、これ見て」

瑞奈は携帯を取り出すと、画面に映る電話とメールの着信回数を  
見せた。

その数は、彼女が気を失っている1時間程度の間だけで10回以  
上を記録していた。

内容も少しずつ切羽詰ったものになっており、途中から母親が送  
ったもの変わっていた。

「どうやらそこで、父親も心配のあまり倒れてしまったようだ。

「あー……。こりゃ早く帰ってあげたほうがよさそうだ」

「だな。よし！ おれがチャリでささーって送ってやるー！」

「あ……。ありがと。ごめんね……」

「そうと決まれば急がなきゃな！ 瑞奈、行こうぜ！」

「ひゃんっ！」

都は瑞奈の腕を引きながら、大急ぎで外に出て行った。

ひとり残された潤は、客用の布団を片付けながらつぶやく。

「……自転車の二人乗りは、危険だからやめようぜ」

「よし、着いた！ ……じゃ、おれはこれで」

「うん。……今日は本当にごめんね」

「気にすんなつて。いつか爽太のヤツになんかおごってもらつから  
さ。じゃーな！」

「ばいばーい！ ……ふう、心配かけちゃったな……。お父さん、  
大丈夫かなあ」

瑞奈は恐る恐る玄関のドアを開ける……が、様子が明らかにおか  
しい。

テレビの音も、父親の豪快な笑い声も聞こえてこない。それどこ  
るか完全に静まり返っている。



板張りの廊下がきしむ音が、雰囲気をより不気味に彩る。

そして、両親が待っているであろう部屋のふすまを開けると……  
座椅子の上で気を失っている父親がいた。

泣き続けていたのか、目が充血している。

瑞奈は父親に近づき、帰ってきたことを伝える。

「あの……お、お父さん？ わたし、帰ってきたよ……？」

返事がない。完全に周りが見えていないようだ。

……その時だった。彼女の背後から母親の声が聞こえてきた。

「これでわかったでしょ？ お父さんは、あんなのことがかわいくて仕方がないの」

「お……お母さん……」

「お友達と遊ぶのもいいけど、あなたを心配してる人がこんなに身近にいることを忘れちゃダメ。わかった？」

「はい……。ごめんなさい……」

「もういいから。……おとなしかったあんに、こんなに夜遅くまで遊んでくれるお友達が出来てうれしいとも思ってるのよ」

「うん……」

「さ、お腹すいたでしょ？ 今から準備してあげるから、待つてなさい」

夕食を済ませて自室に戻った瑞奈は、都と爽太にメールを送っていた。

もちろん都には礼を伝えるメール、爽太には謝罪を伝えるメールだった。

そうしたら、爽太からメールではなく電話での返信が入った。

瑞奈はゆっくりと携帯を手に取り、電話に出る。

「もしもし？」

「……よお、チビ奈。……その、もう大丈夫なのか？」

「う、うん。ごめんね、いきなり倒れちゃったりして……」

「いや、ありゃオレが悪いんだ。お前の気持ちも考えずに……」

「う……」

「……だから、今すぐに答えを出してくれなんて言わない。それより……」

「それより？」

「明日からも、今までと同じように接して欲しいんだ……なんて。やっぱり自己中なこと言ってるけどさ」

「ううん、そんなことない。わたしだって……爽太くんとはまだお友達でいたいもん……」

「まだ……ね。そっか、それならいいんだ。それじゃ、また明日な」

「うん。また明日学校でね」

「ああ。お休み」

「お休みなさい……」

時間にして3分少々の通話を切り、勉強机に携帯を置く瑞奈。

その顔色は、先ほどよりも若干よくなっていた。

(これで一応元の鞆に収まったけど……わたし、どうしたいのかな……)

この日は勉強もせず、少し早めに眠っていた。

瑞奈が就寝した午後11時ごろ、樹里は未だ帰らぬ母親の帰りを待っていた。

彼女の母親は毎日遅くまで働いているが、それでも日付の変わる前には帰っているはずだった。

しかしこの日に限っては、11時を回っても帰る気配さえ見せていない。

夕食は樹里がすでに作っており、当然母親の分も残している。

「あーもー……。なんで帰ってこないのさあ。ごはん、とっくに冷めちゃってるのに……」

食事を作ったのは7時ごろだ。4時間も経過していれば、冷めてしまっても当然であろう。

「……ママのことだから、今日の分のノルマは全部こなしてから帰

るんだろうな……。今日とか朝に倒れたらしいから、その分を取り戻してるのかも」

母親の帰ってこない理由を考えたが、その予感は的中していた。樹里の完璧を求める主義は母親譲りであり、母もまた完璧主義者であった。

そのため、倒れてしまっていた間に消化できなかったノルマをその日のうちにこなしていたのだった。

帰りが遅いのは、そのためだ。

「……もう知らないぞ、どうなっちゃっても！ ……部屋戻ろう」時刻はすでに11時半、まもなく日付が変わってしまう。それでもやはり、まだ帰ってこない。

しびれを切らした樹里は待つのを止め、自室へと戻っていった。

結局、母親が帰り着いたのは日付の変わった午前1時ごろだった。翌日、樹里はまたも母親と顔を合わせることができずにいた。

しかし、食事などは普段と変わらず準備されている。

「ふえ〜、すっご……。いつもありがと、ママ」母親の力に改めて感服しながら、いつものように一人で朝食を取った。

その後自室にて学校に行く準備を進めていた樹里は、ふとカレンダーに目をやる。

「あー、もう7月か……。どうりで暑いと思った」

この日から7月に入り、翌週には期末考査が始まる。

とは言え、彼女は特に意識などしていないのだが。

だが、最近の友人たちの話題がテスト中心になっているのは間違いない。

「そういえば、みんなテストだからってそればかり話してるっけ。……よし、ここは友達として一肌脱ごう！ 久しぶりにあそこに行きたくなっただし、みんな連れてって反応を楽しんでみよっ」と

髪を結わきながら、何かをつぶやく樹里。

どうやら彼女は、友人たちをどこかに連れて行くこうと考えているようだ。

「ね、あれジュリーじゃない？」

「ホントだ！　おい、ジュリー！」

「……ん？　あつ！　みやびちゃんと青山さん！」

彼女らは珍しく、通学途中に出会った。

テストが近いこともあつてか、都と果緒梨はいつもより早く家を出ていたようだ。

「つて、なんであたしだけまだよそよそしいのよっ！」

「え、いいの？　あだ名で呼んでも」

「いいに決まってるじゃん！　あたしだってジュリーって呼んでるんだし、今さら遠慮なんてなしなし！」

「あはっ、ありがとう。それじゃあ……みやびんにかおりゅん、おはよっ」

「おっ、おはよっ。うわわ、なんかあたし今すげー鳥肌立ってるかも」

「わかるわかる。おれも最初にジュリーにあだ名で呼ばれたとき、なんか変に緊張しちまって……」

「なんでよ……。あーそうだ、あとでみずにゃんにも言つつもりだけどさ、明日かあさつてって暇？」

「明日かあさつて？　土日ね」

「そりゃ暇と言われりゃ暇だけどよお、来週からテストだろ？」

「どうせ勉強しなくせに」

「うっ、うるせえ！　ほ、ホントの事言っなっ！」

「んで？　なんかあんの？」

「えっとね、特にかおりゅんなんか最近そうだと思うんだけど……テストやら受験やらの勉強ばかりで息詰まってるないかなって思ったから、みんなとどこか出かけようかな、ってさ」

「息抜き……か。あーあ、余裕あるヤツはいいよなあ」

「な、なにやお。その反応……」

「ま、いんじゃないね？ あたし、行ってもいいよ。どーせ今からやっても点数上がるってわけでもないし。みやびよんどうする？」

「ジュリーから誘われんのなんて珍しいだろうからな。うん、おれも行く！」

「ホント！？ ありがと〜！ じゃあ、お昼に詳しい話するね！」  
意外にあっさりど、都と果緒梨の了解を取ることが出来た。

その後はやはり、テストの話題が中心となっていた。

「でさー、テストどうよぶっちゃけ」

「私はいつも通りだよ。狙うは全教科満点！ かおりゆんだって、今回は結構いけるんじゃない？」

「だな。遊ぶ時間削ってまで勉強してたんだもんな〜」

「……あんたら性格悪っ！ もうわかってんのにそうやってチクチク攻めんのやめね？」

「なんのこと？ かおりゆん本人の口から聞かなきゃわかんねえよ。おれバカだし〜」

「くっ……！ ち、違っわよっもう！ あん時は瑞奈と顔合わせんのが気まずくて、勉強してるなんてウソついてたのっ！」

「やっぱり……。もうみずにゃんには謝ったの？」

「もちろん。お互いにごめんねって。……でもね、マジで勉強しよっと思ってた時もあったのよ？ だけど、なんでか知らないけどいざ机に向かうと、机の周り片付けたりしてて結局なんもやってなかったり」

「あー、わかるぜそれ。おれも珍しく勉強しよっかかって思ってもさ、潤さんにくっつきたくなくなっちゃって……。……がっ」

「うるさい黙れ」

「そんな話は聞いてない」

樹里と果緒梨はのろけ話が嫌いなのか、都が彼氏との甘い話を始めると過剰に反応するのだった。

昼休みはいつものように気の合う仲間が集まり、談笑をしながら食事を楽しんでいる。

樹里たちもいつもの4人で集まり、机をくつつけてひとつの席に着こうとしていた。

そこに爽太や海斗、さらに竜造を交えた男女7人で集まるのが、昨日からの決まりごとになっていた。

「いやー、なんかオレっちは今、すげー幸せ者だったりするんじゃないんでっすか？」

「なーに？　かわいい女の子4人に囲まれてるから？」

「いや、自分でかawaiiって言うのは説得力に欠ける気が」

「なによー！　稲村くんって空気読めないのね！」

「こいつの場合は空気読めないと言うより、読み方を知らないんじゃないのかな」

「がう……。あまり竜造くんをいじめないでやってくれよ……」

この楽しいな雰囲気の中、樹里はなんとか話題を振ってみる。

「えっとさ、みんなちよつといいかな？」

「ん？　なんでっすか？」

「ああ、朝の話だな」

「なんだなんだ？　テストが近いからって勉強会じゃねーだろーな？」

「海斗、よかつたじゃないか。それならお前も赤点取らなくて済みそうだぞ」

「う、うっせ！」

「あはは。……実はぜんぜん違うんだよね。テストが近いからってのはあってるけど」

「えっ？　それじゃ何なんだ？」

樹里は咳払いをひとつ挟み、本題に入る。

「えっとね、明日があさつてにみんなで遊びに行かないか……って思ってるんだけど」

「明日かあさつて？　……でも、来週テストだよ？」

「ほら、それだから。みんなテストテストって、そんなんじゃない点数なんて出やしないよ。だから息抜きしようって思ってるの」

「おれらは朝にその話聞いてさ、別にいいんじゃないかって思ってるんだ」

「あたしも。だから、みやびよんとあたしは行くつもり。みんな、どうすんの？」

「……悪いけど、俺たちは無理だ。テストはどうでもいいんだが、試合がな。部活がないから、自主トレしたいんだ」

「あつ……そうか。野球部はテスト終わったらすぐ試合があるのよね」

「そうです。委員長から誘ってくれたのはすげーありがたいんですけど……」

「ううん、いいの。気にしないでよ。それより、試合頑張ってよね。応援行くから！」

「ああ、ありがとう。海斗、こりやますます負けてらんないな」

「当たり前です！ 全国にオレっちたちの名を轟かせるため、男原田海斗はここに大活躍を約束するです！」

「あー、あついあつい。んじゃ野球部2人はパスね」

「がっ……残念だな。で、爽太と瑞奈はどうすんだ？」

「……ふえっ！？ えっとね……うんとね……」

「オレはあれだ。チビ奈が行くんなら行く」

「ふええっ！？ どうしてえ……？」

爽太の出した答えは瑞奈にとって予想外のもので、これによりますます瑞奈の返答が待たれることになった。

「ずるいよお、爽太くん……。だいいち、どこに行くのかもわからないのに決められないもん……」

「あー、いつけない。そういえばどこに行くか言ってなかったね」

「そーね。んで、どこ行くの？」

「えっと……本須原なんだけど。わかるよね？」

「本須原！？ おれ、聞いたことある！ 知ってる！」

樹里はここで初めて、今回の目的地を明かした。

本須原とは電化製品を扱う街として有名な場所であり、最近なにかと注目を集めている。

樹里は、ここが大々的に取り上げられる以前から足繁く通っており、この場所で普段の息の詰まる生活から自分を解き放っているらしい。

そして都も、本須原という場所が気になるのか、話題に上がった瞬間に目を輝かせて樹里の肩を掴んでいた。

「わっ、わっ、どうしたんだよみやびん？」

「だってだってそこ、潤さんが最近よく行ってるところだから！おれ、前から行って見たかったんだ！」

「連れてってもらったことないの？ その、デートとかで……」

「が、がう……。行くなって言っても、圭輔さんに連れられて行くのがほとんどだし、おれは連れてってもらったことない……」

「本須原ねえ。最近けっこう騒がれてるよね。なんだっけ、『メトロ男』の影響だっけ？」

「それ、オレ毎週見てるぜ！」

「そうそう。私も違う角度から見てるかなあ。あれの元ネタ知ってる私から言わせてもらうと、なーんか違うんだけど」

「元ネタって……掲示板かなんかでしょ？ それ知ってるって、結構オタクだったりする？」

「なによ、いけない？ これでも学校ではそういう面出さないようにしてるんだけどさ。で？ みずにちゃんと風間くん、どうする？」

「う、うん……。みんな行くみたいだし、ちよっぴり不安だけど……行く」

「はい、決まりー！ じゃー次は集合場所と時間ね。ちゃっちゃんと決めましょ！」

野球部以外のメンバーが参加表明を出したところで果緒梨が仕切り始める。

どうやら彼女も、言葉には出していないが本須原に行ってみたか



つたらしい。

「慌てなさんな、もう決めてあるから。本須原駅テクノストリート口の改札を出て右に曲がったところにある広場に11時集合で、どう？」

「11時？　なんだ、ずいぶんゆっくりなのな」

「うん。だつてあそこ、11時にならないと開かない店もあるし。

余裕を持ってつてことで、ね」

「いや、しかし場所も細かく決められるなんてすごいな。よく行くのか？」

「う、うん。最近行つてないけど……。つて、私のことはどうでもいいでしょっ！」

「……。なににせよ、楽しそうで何よりだよ。俺、このクラスになりたかつた……」

樹里たちの様子を見ながら、竜造が寂しそうにつぶやく。

彼はこのグループの中で唯一別の組であり、自分のクラスだとかや浮いた存在となっている。

頭もよく運動能力も高いが、口数が少ないためクラスメイトとの交流はあまりなかった。

そこに現れたのが、野球部でバッテリーを組む海斗。

彼との出会いにより、ほのかに想いを寄せる都を筆頭とした仲間と出会えたのだった。

余談だが、竜造は海斗がキャッチャーをやっていないと実力を上手く発揮できないらしい。

そんな彼のつぶやきを聞いたのは都のみだった。

彼女は静かに席を立ち、竜造のもとに歩み寄る。

「クラスは違うかもしれないけど……。おれらはいつでも竜造くんを待つてるから。いつでも来てくれていいんだから……」

「都さん……。ありがとう」

「……ゴホン！」

都と竜造が2人だけの世界に入ろうとした瞬間、果緒梨がいかに

もわざとらしく咳払いをする。

それにより我に返った都だが、果緒梨に人差し指を向けられてこ  
う言われる。

「みやびよん！ あたしの見てる前で誰かとベタベタすんの禁止！」

「がっ……」

「……きゃあああ！ かつ、かわいい！ 今の顔、めっちゃ  
かわいいく〜ん！！」

「うっさい！ ジュリーはその誰彼構わずかわいい言うの控えれ！」

「ええ〜？」

「……」

樹里たちが楽しそうにはしゃぐ中、瑞奈だけはその輪の中に入れ  
ないでいた。

その様子を見た爽太は、他のみんなに気づかれぬように声をか  
ける。

「……大丈夫か？」

「う、うん。合いそうな話題になったら入っていきこうって思ってる  
から」

「そっ……か。じゃあ、オレが合いそうな話題に持ってってやる」  
瑞奈のことが気になる爽太は、会話の切れ目を見つけて樹里に話  
しかけた。

「な、なあジュリーよ。行くのはいいんだけど……そこへ何しに行  
くんだけ？」

樹里はその質問に対し、ひと呼吸置いてから答える。

「えっとね、私のことをもっとよく知ってもらいたくて。ほら、み  
んなが私を受け入れてくれた場所ってあのカフェだったじゃない。  
だから私も……自分がよく行くところをみんなに教えて、いつもと  
違う私を見てもらいたい」

「へ〜……。別にそんなつもりで連れてったわけじゃなくて、単に  
あたしらの溜まり場があそこだったって話なんだけどな」

「いいのいいの。……で、向こうにはいろいろお店とかあるけど、

そこで買うもよし。ただ見て回るでもよし。ともかく、せつかく友達になれたんだから、私の事をもっともっと知ってもらいたいの。……いいでしょ？」

樹里はおずおずと全員を見渡すが、それに異議を申し立てる者はいなかった。

「もちろんいいに決まってるじゃねえか！ ジュリーの素つてのを見てみたかったしな！」

「ありがと。……それじゃ、明日でいいよね？ 時間と場所はさっき言った通りで」

「うん、いいよ。えへっ、楽しみだなあ。何着ていこつかなあ……」

「へっ？」

「みんな、明日は出来るだけ動きやすい服装で来て！ みずにゃんの私服がどんなのかはわからないけど、フリルばりばりの甘口みたいのは勘弁な！」

「ふええっ！？ そ、そんなの持ってないよ……。動きやすいのでいいならそうするけど……」

「結構歩くかも知れないし、その意味でも動きやすいに越したことはないからさ」

「ま、その辺はあと回していいんじゃない？ ジュリーが全員にメールしとくとか」

「そーね……って！ もうお昼終わっちゃうじゃないの！ ……いただきっ！」

「……あっ！ それ、俺のじゃないか！ いつの間に……」

「油断してるほーが悪いのよーん。そんなんで全国目指せるのー？」

「くっ……！ 俺を甘く見てもらっちゃ……困る……！」

果緒梨に自分の昼食を取られてしまった竜造だが、その行為は彼の中に眠る鷹を目覚めさせてしまった。彼は目にも止まらぬ動きで、この場にいた全員のおかずを一品ずつ奪い去っていた。

「あつ！ ひとつ足りない！」

「これが汐野学園野球部エース、稲村竜造の本気だ。ありがたく俺の血と肉にさせてもらう」

「……あれ私のだ。辛いぞ……？」

相変わらぬの激辛メニューで構成されている樹里の昼食もかすめ取った竜造だったが、彼は意外にも平気な様子で口に入れてしまった。

「……えっ？ 竜造くん、ジュリーの食ってもなんともないのか？」

「ん？ なんともないって？ …… ああ、そう言われてみれば確かにちよつとピリツと来たな」

「すごい……」

「稲村くんっ！ キミ、すごいよ！ まさか私の激辛メニューを平気で食べられるなんて思わなかった！」

「いや、自分で激辛って言ってちや意味ないじゃないか……」

こうして今日も、にぎやかな昼休みは過ぎてゆくのだった。

そして翌日、ここは本須原駅の広場。広場と言ってもバスケットゴールが設置されているわけではないが。

集合場所にいたのは、樹里だけであつた。無理もない。今の時刻は午前10時を少し回ったくらいなので、本来の集合時間はまだ先なのだから。

今日は完全にアドバイザーに徹すると決めていたので、自分の買い物は先に済ませてしまったためにやや早く来ていたのだ。

ちなみにこの日の樹里の服装はTシャツとハーフパンツ、日よけのサンバイザーと荷物がたくさん入る大きめのトートバッグといういでたちで、見てくれなどまったく気にしていなかった。

そして今日は胸にさらしも巻いていないため、その大きな胸はよりいっそう強調されている。

「さーて……久々の本須原だ。買えなかった本とかCDとか画材とか揃えなくっちゃ！」

樹里は人ごみを掻き分け、目的のものを次々と買い求めてゆく。  
「やゝ、大漁大漁！ さすがに全部は買えなかったけど、あとは通販かな……」

全ての買い物を終えて再び集合場所に戻ってきた時には、間もなく11時になるうとしていた。

まだ集合時間にはなっていないかったが、そこにはすでに瑞奈がいた。

初めて訪れた場所のためか周りの雰囲気がかめず、落ち着かない様子できよろきよろしている。

樹里はそんな彼女に声をかけようとしたが、寸前で思いとどまる。驚かせれば小動物のようにおびえおののくであろう瑞奈の反応を見るのが、最近の樹里の楽しみであるようだ。

瑞奈に気づかれぬよう、人ごみにまぎれつつ彼女の背後を取った樹里。そして……。

「そーれっ！」

「ふええええっ!?!」

もちろん何の抵抗もできず、樹里に抱え上げられる瑞奈。

道行く人は何事かと振り向くが、樹里は手足をばたつかせる瑞奈しか見えていなかった。

「うふふ……きゃわい〜！」

「ふえ〜ん……下ろしてえ〜……」

「……あんたら、何してんの？」

「ほら、みんな見てるぜ」

集合時間の5分前、樹里の行動にあきれながら果緒梨と都が声をかけてきた。

そこでようやく瑞奈を下ろした樹里だが、恍惚の表情は変わらなかった。

「ひどいよお、ジュリーちゃん……」

「いや〜、ごめんごめん。もうおなかいっぱい」

「さて、あとは爽太だけか。あいつ迷子になってんじゃないの？」

「そうかなあ？　これだけわかりやすい場所なのに？　あとね、ゆうべわたしに行き方聞いてきたんだよ」

「あ、でも迷子の風間くんもそれはそれで萌えるわ」

「いやジユリー、それとはちよつと違うんじゃない……」

樹里は先ほどからかなり浮かれているように見える。

それは都にも同じことが言えるようで、駅を出る前から始まる独自の世界にすっかり目を奪われていたようだ。

「うわ、すっげえ！　ちくしょうっ、なんで潤さんはこんな楽しいところにおれも連れてつてくれねえんだ!？」

「み、みやびよん……。それはきつと、今みたいな反応するからじゃないのかな」

「そ、そうだったのか……」

「ここつてだいたいのは一人で行って自分の用を済ませたいって思ってるから、彼氏さんもきつと自分の買物に専念したいってのがあるんだよ」

「で、でも潤さんは圭輔さんとよく行くぜ？」

「それはきつと、その2人の趣味が合うからじゃない？　……男2人で本須原……。しかも趣味が合う……。これはひよつとするとひよつとしちゃうかも!?　きゃ〜!〜!」

「や、やめてくれよ！　圭輔さんはわかんねえけど、潤さんにはきつとそつちの興味は……。ないと思う……」

「はっ、ごめん……。そうだ、みやびよん。彼氏さんってどういうのが好きかわかる？」

「えつと……。あ、最近『ひとさじの隠し味』っていう漫画買ってきてたぜ」

「学園ものねえ。他には？　漫画じゃなくて小説とかない？」

「小説かあ。……。『姉ちゃんの　とボクの××』だったかなあ」

「身内もの……。それも、年上……。？　他には？　ゲームがいいな」

「……。ちよつと待ってる」

　　都は辺りを見回した。作品名が出てこなくとも、絵さえ見れば思

い出せるのではないかと思ったのだろう。

「あ、あった！ あれだ！」

「どれ？ うわ、『ま・る・て・く』だ！ とうとう人間じゃなくなっちゃったか……」

「で？ 潤さんはどんなのが好きなのかわかった？」

「……ごめん、これだけじゃわかんない。共通点がないんだもん。意外と浅く広くっていうタイプなのかな……？」

「そっか……。あつ、爽太のヤツ来たみたいだぜ」

「わりー、遅れた！ いや、髪形がなかなか決まらなくてさ！」

集合時間に遅れること10分少々、ようやく爽太が到着した。

髪形が決まらなかったことが遅刻の理由のようだが、お世辞にも整っているとは言えなかった。

（うっわ、うっわ！ 今度はアホ毛ですか！？ ショタっ子の必須アイテムきた！）

「そんじゃ、全員揃ったみてえだし、そろそろ行くっせ」

「う、うん。じゃ、最初どこに行く？」

にやけた顔を元に戻し、その場にいる全員に尋ねる樹里。

その時、瑞奈の手がゆっくりと上げられた。

「ごめん、ジューリーちゃん。わたしお腹空いちゃった……」

「あー、あたしも。言われてみればもうそろそろお昼だもんね」

「えっ！？ ちょっと待ってよ、みんな朝ごはんちゃんと食べてきてないの！？」

「うん。あたし休日は朝ごはん食べない派だから」

「オレもだ。休みの日ってついギリギリまで寝ちゃうんだよな」

「おれも！ 潤さんが食わねえからよ、作り甲斐なくて……」

「わたしは食べてきたけど、量が少なかったからかな」

「ぐぐぐ……。完全に予想外だよ！ お昼も食べるんなら予約してたのに……」

「え、そんな人気あるところに行くつもりだったの？」

「行くんなら、ね。私の予定じゃ初めからお昼食べる予定なんてな

「かったよ」

「それじゃお腹空いちやうじゃん！ ごはんー！」

「あーっもう！ わかったわよ！ それじゃ急ぎましよ。早めに行かないと並ぶから。その後のことはそこで話すね」

「その方がいいね。ここ、人がいっぱいいてちよつと怖い……」

「あー、ごめんねみずにゃん。じゃ早く行こ、ね！」

小さな瑞奈の背中を押すように歩き出す樹里。彼女の計画は、いきなり変更させられてしまった。

道中はかなりの人ごみで、樹里以外の慣れていない全員は歩きにくそうだった。

果緒梨と都ははぐれないよう、自然と手を繋いでいた。

都はさらに、爽太の手も掴む。

「み、都？」

「ばーか、勘違いすんなよ。はぐれねえようにしてるだけだからな。

……ほら、お前も瑞奈の手、握ってやれよ」

「……え？ オレが？」

「お前以外誰がいんだよ。おれはもうかおりゆんの手も掴んでるし、かおりゆんは瑞奈から遠い位置にいるから、お前にしかできねえの。ほれ、早く！」

「わかった！ ……よし」

爽太は覚悟を決め、隣にいた瑞奈の手を掴む。その様子を見届けた都は、小さく微笑んだ。

「わっ……。爽太くん？」

「ああ、オレだ。はぐれねーように、だからな」

「うん……。でも、嬉しいな」

人ごみの続く横断歩道を渡りきるまで、樹里を除く4人は手を繋いでいた。

「さ、着いたよ。……あちゃー、結構並んでるよ」

駅から歩くこと10分少々、目的の店らしき場所に到着した一行。



しかし数人が列を成しており、入るまでには多少時間がかかりそうだ。

「並んでるぜ。どうすんだ？」

「ジュリー、他のとこってないの？」

「あるにはあるけど……どこも同じくらい並んでると思う」

「マジカー！ 本須原ってすげー！」

「……あれ？ ジュリーちゃん、ここってもしかして……」

瑞奈は本日のおすすめメニューが書かれている立て看板を見て気がついた。

彼らが今から入ろうとしている店が、いわゆるメイド喫茶であるということに。

「うん。メイド喫茶だよ？」

「ふえっ……！？ め、メイド……？」

「なーに驚いてんのよ。マスターのとこだって女の子雇う時はそれに近い服装せてたじゃない。おねーちゃん、まだあれ持ってるよ」

「そうそう！ おれもまだ持ってるぜ！」

「は！？ ちょっと2人とも、それどういうこと！？ ていうか、くれー！」

実はカフェ Hexagramは、何らかの事情で女性従業員を使う場合はユニフォームがメイド服だったりする。

そこでの労働経験がある都と果緒梨の姉がその服をまだ持っているという話を聞いた樹里は、その話に食いついてきた。

「やだよーだ！ あれかわいいから誰にだってやらねえよ！ それにあれ、おれがちつとキツいくれえなんだからよ、ジュリーじゃ着れるわけねえだろ？」

「くっ………！ 資料として手元に置いときたいのに………！」

「んでー？ 潤さんは着てくれとか言わないのー？」

「がっ、がっ………。そ、そういえばそんなこと言われた覚えない………」

「あれま、意外。そーゆープレイとかもう経験済みかと思ってた。

を「っほっほっほ」

「うつ……。ば、ばかあ……。！」

「かおりゆん……。それ、セクハラ発言……」

紅潮した顔を両手で覆いながらしゃがみこむ都と、それを見て高笑いをする果緒梨。

樹里はそんな都を見て、胸をときめかせるのだった。

「ひゃううつっ！ かつ……。かわいいいい……。ん！！ だつこー！ だつこさせてー！」

「よっし！ んじゃージュリーは右から！ あたしは左からね！  
せーのでいくよ、せーの！」

「ぎゅーっ！！」

行列からはみ出そうな勢いではしゃぐ3人の姿を、道行く人だけでなく同じ列に並んでいる人たちも何事かと注目していた。

爽太と瑞奈は他人のふりをしようとして試みるも、効果はあるはずがない。

瑞奈は、恥ずかしさから爽太の手を握ろうとしていた。彼はそれに気づき、ゆっくりとその手を受け入れる。

そして瑞奈の方を向き、ぎこちなくも精一杯の笑顔を見せた。  
爽太の不器用でさりげない優しさに触れた瑞奈は、握られた手を力強く握り返す。

（ありがとう……。爽太くん……。わたし、すっごく嬉しい……）

待つこと5分。目的の店は地下にあるようで、一行は下り階段に差し掛かっていた。

「あっ、ここから下に降りるんだね？」

「そうだよ。私ね、ここの落ち着いた雰囲気が好きなんだ。その空気は、ちよつと他のメイド喫茶にはないね」

「……。ってことは、だ。ジュリーは何度かこういうところに行ったことがあるのか？ 行ったこともねえのに批評はできねえもんな」

「まあ、それなりにね。いろいろ行ってみて、私にはここが合って

るんだなっと思った。その証拠になるかわかんないけど……これ」

樹里はパスケースをまさぐり、一枚のカードを取り出した。

「なにこれ？」

「このポイントカード。ポイントためるといっんなものがもらえるんだよ」

「へえ、そりやすげーや！……あ、入れるみたいだぞ」

「ホントだ！ いやー、やっと涼しいところに入れるわね」

一行は、ようやく店内に通された。

樹里以外のメンバーにとっては、ここで起こる全てが初めてのこ  
ととなるだろう。

まずは、来店時の挨拶。この時点で彼らはカルチャーショックを  
受けることになった。

「お帰りなさいませ、お嬢様！」

## 第7章：現実逃避

一般的な喫茶店との違いのひとつでもあり、もっとも大きな違いでもある入店時の店員の挨拶。

シックな作りの内装に反した声が、樹里を除く全員を驚かせた。

「うわっ！ いらっしやいませじゃねえ！」

「この時点で普通の喫茶店とは違うのよね……。あ、あれ？ そういえば今『お嬢様』って言ってなかった？」

「お、よく気づいたね。女性客だけで来るとそう呼ばれるんだよ」

「わあ、おもしろい……。でも、爽太くんは男の子だよ……。？」

「……。やっぱりオレって、オレって……。？」

「ああ……。そ、それはそれ！ これはこれ！ た、多分だけど

……。私の陰に隠れて見えなかつたんじゃ……。？」

「慰めはいいよ……。……はあ」

「あわわわ……。あ、あの……。……彼、いちおう男の子なので、その、

『ご主人様』って言ってあげてくれませんか……。？」

「た、大変失礼いたしました！ お帰りなさいませ、ご主人様……。？」

5人は店内奥の席に通されていた。

カフェ Hexagram よりも一回り以上広く、店員もフロアとキッチン合わせて5〜6人が常に忙しく動き回っているようだ。

樹里以外の4人は見慣れない世界に興味を引かれ、目を皿のようになしながら店内を見回していた。

「なんかすっごい洒落てるね。メイド喫茶ってどこもこんな感じ……。？」

「じゃないよね」

「まあね。私が知らないだけかもだけど、これだけ落ち着いた雰囲気のところはここしかないと思う。あくまでも喫茶店というカテゴリーではね。他にも居酒屋とかバーとか出来てきてるし」

「そんなのまであんのかよ！ やっぱ需要あるんだなあ」

「そうだね。……早いとご注文しちゃお。ここ、時間制限あるから」  
「え、マジで!？」

「うん。私たちだけじゃないからね、入りたい人」

「待ってる人いっぱいいたもんね……わたしたちの後ろにも。……  
わあ、これかわいい。爽太くん、見て見て」

一番初めに空腹を訴えた瑞奈はメニューを眺めていたが、数少ない写真つきの料理に目を奪われていた。

「これか? 『妖精さんの愛情たっぷりオムライス』っての」

「うん! わたし、これにしたいなあ」

「みずにゃん、いいもの選んだね。これね、自分の好きな言葉とかをケチャップで書いてくれるんだよ」

「ぶっ!?! なによそのベタベタな演出!」

「なによそれって、おれは結構いいサービスだと思うぜ?」

「え? なんか露骨すぎない?」

「かおりゆんは硬派だなあ。……あ、おれは明太子パスタな」

「んじゃあたし、カルボナーラ。あとで分けっこしようね、みやびよん!」

「私はもう決まってるから……あとは風間くんだけだね。なににする?」

「う〜ん……。じゃあオレ、チビ奈と同じのでいいや」

「ふええっ!?! お、おんなじの……?」

「あははっ、よかったじゃん。それじゃ注文しちゃおっか」

全員の注文が決まったことを確認した樹里は無言のまま右手を小さく上げ、指を鳴らす。

すると、その仕草に気づいた店員の一人が彼らのテーブルに近づいてきた。

4人はここでも、見慣れない光景にあいた口がふさがらなくなるのだった。

「お待たせしました、お嬢様! ご注文をどうぞ!」

「ランチセットひとつ、明太子パスタひとつ、カルボナーラひとつ、

愛情オムライスふたつ。セットのドリンクはアイスコーヒーでお願いします」

「かしこまりました。少々お待ちくださいませっ！」

樹里の、まったく無駄のない注文。少しの間、誰も何も言えなかった。

「……………す、すっごくいい！」

「な、慣れてるってレベルじゃねえよお前！」

「ジュリーって……………恐ろしい子！」

「いやー、そんなにすごい事じゃありませんよ。ね？」

謙遜する樹里だったが、近くを通りかかった店員にあまりにも自然に話しかけたので、再び全員を驚かせることになった。

「お嬢様はいつもこんな感じですよ？ よく来て下さいますし。でも、お知り合いの方を連れてこられたのは初めてですよね」

「うっ……………。は、はい……………」

「よく来てるって、どのくらい？」

「今年になってからはこれで6回目かなあ。先月行けなかったし」

「今年で6回で、先月行ってないってことは……………だいたい月一ペースで行ってるってことか？」

「なんかすごく少なくて感じるのは、あたしらがほぼ毎日マスターの店行ってるからかね」

「そうだろうね。さすがにここに毎日行ってたら、お金がいくらあっても足りなくなっちゃうよ。交通費もかかるし……………」

「だよな。……………で？ お前はマスターのとこととこと、どっちが好きなんだ？」

「……………それをここで言えっつて！？ 究極の選択じゃん！……………って、風間くんさっきからおとなしいね。どうしたの？」

確かに、店内に入ってから爽太の口数が少なくなっている。

そんなに入店時に女性扱いされたことが気に障ったのだろうか、樹里は少し心配になった。

「へっ！ どうせメイドさんに見とれてんだろ！？」

「なっ!? バ、バカヤロ! んなことしてねーよ! チビ奈があのゆるーの着ても似合わないだろうし……」

「ふえっ!? なんでそこでわたしが出てくるの……?」

「み、みずにゃんのメイド服姿!? そ、そりやまずいって! 反則だよ!」

「もー! ジュリーったら興奮しすぎ! ほらほら、ここ入ったのはお昼食べる以外にも目的あったでしょー?」

「そ、そうだった。この後どこ行くかだったっけ。……こほん。というかさ、みんなはどういったのを見たいわけ?」

樹里は逆に、全員に尋ねていた。予期せぬ質問に面食らった4人は、互いに顔を見合わせる。

「つつてもなあ……。どこでもいいんだよな、おれの場合。どこ行っても新発見ができるだろうし」

「えー? あたしはアニメシヨップとかいうところに行ってみたくて思ってるんだけど。地元にはないからね」

「わたしも……。かおりゅんと同じでいいよ」

「じゃ、みやびょんも同じでいいね? それなら3人は同じ……と風間くんは?」

「オレか? オレは……」

「へへ、どーせえっちいのだろ? このスケベ!」

「ばっ……。バカヤロ、ちげーよ! お、オレは硬派だからそんなの興味……」

「あるんでしょ? 男の子だもんね、仕方ないよ。そういうのが必要ならいつでも言ってるね。ある場所教えてあげるから」

「だーかーらー違うって! わ、わかったよ、正直に言うよ。……」

オレさ、昔のなんとかレンジャーってのが好きでさ、今でも見てるんだよ。そういうののグッズとか、昔のものとか見たいかなって思ってたさ」

「わあ、男の子っばいね」

「最近も女性もよく見てるけどね……。……うん、そういうのもある」

から安心して。ただし、ちょっと高いかも知れないけど」

「あたし知ってる。昔のはプレミアついてたりするんでしょ？」

「そうそう。ネットのオークションとかだと、当時の数倍の値段と  
かっついてたりするんだよ」

「は、っ、すっげえな。んじゃ、最初に行くところは決まったな」

「だね。また駅前の方に戻ることになるけど、いいよね？」

「異議なし。……あっ、来たみたいよ」

相談事がひとまずまとまったと同時に、全員分の料理が2人がかりで一度に運ばれてきた。5人の会話が終わるのを待っていてくれたのだろうか。

そして、メイドの一人が爽太と瑞奈の席の近くに立ち、説明を始める。

彼女の名は『雛山ひなた』。この店で一番人気があるメイドらしい。

「ご注文ありがとうございますっ、お嬢様にご主人様！ 文字はどうしますか？」

「ふえっ？ も、文字……？」

「自分の好きな文字書いてくれるんだよ。まあ、あんまり長いのは難しいだろうけど……」

「そう……だったね。えっとね……じゃあ、『なかよし』でお願いします！」

瑞奈がそう告げると、メイドは慣れた手つきで手際よくオムライスの上に文字を書いてゆく。

それだけでなく皿の上にも、いくつものハートマークをちりばめてくれてもいた。

「わあ、かわいいっ！ ありがとうございます！」

「どういたしましてっ！！ ご主人様はどうされますか！？」

「オレ！？ ……それじゃあオレは『男』で！」

「えっ？ なんでっ？」

「えーじゃない！ オレは男だからだ！」



「かしこまりました」

騒がしいテーブルの対応をするもう一人のメイド『氷上セツカ』は、言われたことを迅速にこなす。

だが、そこに書かれた文字は『漢』というものだった。

文字の太さも、先ほどよりはかなり太くなっているようだ。

「あつはははははは！　こりやいや！　かつこいいい！」

「やべえ！　このメイドさん、違いが分かってんじゃねえか！　漫

画とかだとよく、これで『おとこ』って読ませるよな」

「意外とアドリブが利くのね……。メイド喫茶を侮ってたわ」

「は……。はは……。あ、ありがとうございます！　そうだ、オレはこつちの漢でありたい！　……。ジュリー！」

「ひぎつ！？　な、なに！？」

「この店を選んでくれてサンキューな！　オレ、今日お前の誘いに乗ってよかったぜ！」

「そ、そう？　喜んでもらえたなら私もうれしいよ。あはは……」

「よっしゃあ！　もうみんなの来たんだろ！？　さつさと食って次んとこ行こうぜ！　それ、みんな声をそろえて、いただきます！」

「い、いただきます！」

男としての自信を取り戻した爽太は、涙を流しながら食事を始めるのだった。

「こりやうまい！　最高だっぜ！」

「爽太くんすごい……。あ、でも本当においしい」

「ふん、ちゃんと作ってあるのね。さすがにマスターには及ばないけど」

「いや、こりやかなりのレベルだと思うぜ？　パスタがもう少し太かったらもつとよかったけどな」

「ふふつ、みんな楽しんでくれてるみたい。……。よかつたよ」

5人はメイド喫茶『マーメイド』の味を堪能し、会話を弾ませていた。

食事を終えた一行は最初の集合場所に帰り、その近くにある『デジメイツ』に入った。

この店のイメージキャラクターが一人歩きし、さまざまなメディアに進出したのは本須原の常識のひとつとなっている。

そして、ここにはアニメ・漫画・ゲーム関係の品物が新旧問わず一通りそろっているので、本須原といえばここを挙げる人も多い。

「最初の目的地ね」

「うん。とりあえずここには大抵のものがあるから、きっと興味引くものが見つかると思うよ」

「……あつ！ひとさじの隠し味だ！すげえ、これ何冊も出てたんだ……」

「どれどれ？……あらまあ、ずいぶんかわいらしい絵なこと。そつかそつか、潤さんも圭輔さんもこーゆーのが好きなのね」

「初めて見る本がいっぱい……」

「ここは新刊のフロアだからね。上に行けばそれ以外の本とかCDとかゲームとか、グッズもあるよ」

「なあジュリー。もしかして似たような店って他にもあるのか？」

「うん、もちろん」

「え、じゃあなんでここにしたのよ？」

「なんだかんだで、私ここでいつも買っちゃってるからね。カードのポイントもたまってるし」

「ここにもカードなんてあるの？」

「あるよ。見てみる？」

樹里はパスケースから、この店のカードを取り出して瑞奈に見せる。

そこに印字されていたものは、3桁の数字だった。

「339ポイント？結構たまってるね。1ポイントいくら？」

「1000円」

「ふえええっ！？1ポイント1000円もするの！？じゃ、じゃあジュリーちゃん、30万円以上使ってる……の？」

「そういうことになるかな。たまーにポイント倍付けの日とかあるから厳密にはわからないけど。……あれ、他のみんなは？」

樹里たちが話し込んでいる間、他の3人は普段なかなか目にしない絵柄の書籍に見入っていた。

「ったくよお、どれもこれも必要以上に目がでけえなあ。顔の半分以上が目とかありえねえだろ？」

「きつとそーゆーのが好きなんだよ。潤さんもそうかもねー。をーっほっほっほ」

「がっ、がう……。じゃあ、ぶち整形みたいなのしなきゃダメなのかな……」

「いやー、その必要はないと思うぜ？ 都お前、んなことしなくたって充分いけるって！」

「へへ、冗談でもうれしいぜ。……あ、ありがとう」

「……もうっ！ みやびよんってたまにそうやって照れたりするけど、それがめっちゃカワイイんだからっ！」

「そうそう！ 今オレ、ちっときゅんって来ちまった！」

「やめるよお、照れちゃうじゃねえかよお……。……がっ」

「おやおや？ ここにツンデレっ娘がいるのかなあ？」

紅潮した顔を隠すように、両手で覆う都。

その様子を見た樹里が鼻息も荒く、彼女に近づいてきた。

「現実世界のツンデレは百害あって一利なしって聞いたけど、案外そうでもないってのが今証明された気がする」

「っ……。つんでれ？」

「あたし聞いたことある！ いつもはそっけないか怒ってばかりだけど、二人つきりとかになると途端にデレちゃうからツンデレ、でしよ？」

「まあ、だいたい正解。ああ、かおりゆんにも微妙にその気配あるよ」

「ぶっ！？ あ、あたしがツンデレ！？ ……なんか複雑」

「一番その気配があるのはみやびよんだけだね。……じゃ、次はど

「うるする？　というかもう満足？」

「うん……。特に欲しいものはなかったけど、面白かったよ」

「そうね。じゃ次行きましょ。どうする？」

「どうするも何も、みんなが決めてくれていいよ。ここの上行ってもいいし、他の店に行くのもいいし」

「あ、じゃあいいかな……」

その時、瑞奈がおもむろに手を挙げた。何か提案があるのだろう。  
「ん？　みずにゃん、どっか行きたいところある？」

「えつとね……。かわいいお洋服とか置いてあるお店、ないかな？  
「服う！？　コスプレ用の衣装くらいしかないけど、それでもいいなら」

「うん！　お洋服には変わりないでしょ？」

「わかったわかった。それじゃ次はコスプレショップに行こうか」

「おーっ！」

一行の次なる目的地は、瑞奈の希望によりコスプレショップとなつた。

その道中でさまざま看板や店を通り過ぎ、樹里以外はその光景にしばしば足を止めて見入ってしまった。

「あつ、ゲーセンだ！　あとで行こうぜ！」

「え？　ゲーセンならさっきのここにもあつたぞ」

「こんなにいっぱい同じような店ばかり……。潰し合いとかないのかしらね」

「人がいっぱいいる……」

「さ、着いたよ」

「ここ？　衣装なんてどこにあるの？」

「いや、このビルの上。見えるでしょ？　『シリウス』っていう名前の店が」

「あ、ホントだ。同じビルに違う店が入ってる場合もあるんだな」

「場合もあるんじゃないかって、ここに関してはそれが普通だよ。さ、

行こ」

大通りに面した入り口からは、ビルの入り口は見えない。ビル自体へ入るには、わき道に一本入る必要があった。

「ここね。……あ、エレベーター」

建物内でエレベーターを見つけた一行だが、樹里はその近くにある階段を上がろうとしていた。

「ジュリーちゃん、乗らないの？」

「うん。だってそのエレベーター、定員4人だし。……ほら、私って重いから、重量オーバーになっちゃうでしょ」

樹里の身長は180cmを超えており、一般的な成人男性と比較しても明らかに高い。

それに加え、規格外の大きさのものを2つも持っているため体重もかなりある。

重さで言うならば、瑞奈と爽太の体重を足してようやく抜けるほどだった。

詳しい数値は本人の名誉のために、ここでは控えさせてもらうが。「この6階だからね。じゃ、お先に！」

樹里はそれだけ言い残して、一足飛びで階段を駆け上がってゆく。残された4人はエレベーターに乗り込む。幸い、重量オーバーにはならなかった。

「ジュリーちゃんって、やっぱり体重が気になってるのかな？」

「なってるんじゃないの？ 言っちゃ悪いけど、あいつちつと太めだからな。あ、これジュリーには内緒な」

「でもさでもさ、胸とかめっちゃでかくね！？ なにあって感じじゃね！？」

「そうそう！ で、すげー弾力あるんだぜ！」

「……ちよつと待て爽太。お前、なんでそんな事知ってたんだ！？」

「爽太くん、まさか……！ さ、触っちゃった……の？」

「変態だー！ ここに変態がおるー！！」

「わざとじゃねーって！ こないだのことなんだけど、振り返った

ところにあいつがいてさ、ちょうどあいつの胸とオレの顔が同じ位置にあつて……押し返されちまった」

「弾力で!? なにそれ、あんなでかくて形もいいなんて完璧じゃん!」

「いいなあ……。あつ、着いたよ」

樹里の話で盛り上がっているうちに、エレベーターは6階に到着していた。

扉に近かった瑞奈が飛び出すように外に出ると……何かに押し戻されてしまった。

「きゃっ!」

「わぶっ!? な、なんなの……?」

「おっと、大丈夫かチビ奈。……って、ジュリーか!」

瑞奈を跳ね飛ばしたものは、先に到着していた樹里だった。

「も〜、いきなりなんなのよ……」

腕を胸の前で交差させながら、樹里が抗議する。

「ごめんね、ジュリーちゃん……。でも、ホントに弾力あるんだね!」

「……なっ、なによ。そんなに見ないでよっ!」

「な、なあジュリー? そ、それどうなつてんだよ!? その、力ツプとか……」

「カップ……? 胸の? えっと、確かエ……いや、Jだったかな?」

「あ、EかJですつて!? えーびーしーでいーいー……10番目!?! 嘘よっ!」

「う、うるさいな! 大きいのも大変なんだから! 合うサイズの制服ないから特注だし、それでも胸がキツイからさらし巻いて締め付けてるんだから。水泳の授業なんかもつと大変よ」

「……え、じゃあそれつけてなかったらもつと大きく見えるのか?」

「まあね。今日は巻いてないけど」

「いやいや、あたしらはとんでもない娘と友達になれたもんだわ」

「……で、さ。どうやったらそんなに大きくなっただんだ？」

「どうやったらって……。普通の生活してるだけだよ。牛乳は毎日少ずつ飲んでるし、お風呂でマッサージとかしてるけど」

「お、おれだつてやってる！ 小魚とか食ってカルシウムたくさん採ってるし、マッサージは自分じゃよくわかんねえから……。潤さんにやってもらったり……」

「ゴホン！ みやびよん、まだそんな時間じゃない！ ほら、早く入りましょー！」

エレベーターのすぐそばにある入り口からは殺風景な雑居ビルの風景が一変、明るい雰囲気の内が見えた。

どこかで見えたことがあり、しかし街中ではまず見ることが出来ないといった服などが所狭しと並べられている。

「うわっ、すげー！ って、さっきからオレって驚いてばっかだな」「仕方ないよ、爽太くん。わたしだつてビックリの連続だよ。普通だつたら来ないもんね」

「確かにねー。そういう意味では、あたしら今すっげー貴重な体験させてもらってるって事ね」

「あはっ、ありがと。……って、みやびよんがいないよ？」

都はすでに店内の物色を始めており、ある一点を見つめていた。

どうやら、彼氏である潤の所持する漫画作品などに出てくるキャラクターの着ている服もあったようだ。

「これもこれも……。見たことある。こういうの着れば……。もっともっと仲良くなれるのかな……。？」

都の眼は、恋に恋する乙女のそれに変わっていた。

「あちゃー、みやびよんだったらラブラブモードのスイッチが入っちゃったみたいね」

「かわいいな……。今の都ちゃん」

「普段が普段だけにな、余計にそう思うぜ」

「ちよつと私、様子見てくるよ。みんなは適当に店の中見てて」

「あいよー。んじゃ瑞奈に爽太、行きますよ」

樹里は未だその場から動かない都のもとに近づき、様子をつかがった。

「ね、みやびよん。なんか気になるものでもあった？」

「う、うん……。ほら、これなんだけどね。『Nocturne』  
っていうゲームだったかのキャラが着てるダツフルコート……」

「あー、これね」

この時、樹里は都の身に起こった小さな変化に気がついていて、彼女の口調が、穏やかになっているのだ。

都は自分では気づいていないが、彼氏のことを考えるなどで幸せな気持ちになると心が落ち着き、普段の粗野で乱暴な口調が普通の女の子の口調に変わってしまうのだった。

ちなみに果緒梨は都のこの状態を『ラブラブモード』と呼んで冷やかしている。

「これが気になるの？」

「うん。ゲームのやつだけど、なかなかしつかりした作りだなんて思ってた」

「高いものはそういうのが多いよ。それに、これは普通に着ても違和感ないだろうし。でも、今はコートの季節じゃないよね」

「でも……これ、欲しい。冬になって寒くなったら……潤さんのために着てあげたい……。それであの人が喜んでくれるなら……」

「あーもう！　なんでこんなに健気なのあんたって子は！　……とりあえずさ、他のも見てみようよ」

「うん！」

一方その頃、他の3人は少し離れた場所にある服の物色をしていた。

皆、自分が着たらどのようなものだろうかという想像をしているようだった。

「思ったんだけど、必要以上にありえない服って意外に少ないのね。そりゃ魔法少女とかが変身した後のアレだけど」

「そうだな。オレ、もっとものすげーのかと思ってた。コスプレ衣



装って」

「えつと……もしかしたら、そういうのは自分で作ったりするのかな？」

「あつ、それよ！ きつとそれ！ なければ作っちゃえばいいじゃんみたいな考えの人はそうするのよ、きつと」

「それ、すげー！ なんていうか、そこまで入れ込める趣味があるのって幸せだよな」

こうして、彼らの楽しい時間は瞬く間に過ぎていった。

この後は別のアニメショップに入ったり、爽太の希望だった戦隊シリーズを扱っているような店に立ち寄ったり、裏通りを足早に通り過ぎたり、ゲームセンターで遊んだり……。

そのうちに時間は、いつの間にか夕方の6時を回っていた。

「もうこんな時間かよ！ ったく、時間が過ぎんのかって早えよな」

「でも楽しかったね！ ……一人で行くのはちよつと怖いから、また連れてってね。ジュリーちゃん」

「もちろん！ みんなもまた行きたくなったらいつでも私に言ってね。今日行けなかったところにも連れてってあげるし」

「今度は潤さんと来よう……。それで、もつとあの人のことを知らなきゃ！」

(よかった……。みんな楽しんでくれたみたいだ)

駅前に着いても楽しそうな顔を変えない仲間たちを見て、言いよらない喜びに包まれた樹里。

そんな彼女に、爽太がこっそりと声をかけた。

「今日はありがとな、ジュリー」

「ん？ ううん、いいの。楽しんでくれたなら、私も嬉しい」

「また誘ってくれよな。お前と行けるならオレも楽しいからな！」

「えつ……？ えつ！？ わわっ！」

彼の言葉に動揺したのか、樹里は持っていた財布を落としてしま

……その光景を見逃さなかった者がいた。

「いけないいけない、落としちゃ……あつ!？」

樹里が拾い上げるより一足早く、誰かがその財布を持っていつてしまった。

「あつ、あんにやる! ジュリーの財布持ってつちまいやがった!

追わなきゃ!」

「なんだって!? 爽太、おれも行く!」

樹里の財布が盗まれたのを目撃した爽太は、弾かれるかのように犯人を追いかけた。

爽太のただならぬ様子に気づいた都もまた、犯人を追いかけていった。

「えっ!? ジュリー、どうしたの!? みやぴよんと爽太がいなくなってるし……」

「……ドジって財布落としちゃって、拾おうとしたら誰かが持ってつちやって……」

「マジで!? ドロボーじゃん! みやぴよんたちはそいつ追っかけてったわけね」

「ともかく、私たちも行こう。こんな上等決められといて、黙ってなんかいられない!」

「うん! 早く行かなきゃ見失っちゃうからね!」

このままでは済ませないという思いで、樹里たちも犯人を追いかけようとした。

しかし、その足は一人の女性によって止められることとなる。

「はいストップ。大丈夫だから、行かなくて。……あれ? あなた達……」

「……? えっと、どこかで会ったことありますよね? あー誰だっけ……。おねーちゃんの知り合いにいた気がするのに」

「う、うん。……そんなことより、みんなは行かなくて大丈夫だから。ボクの彼氏も追いかけてるから、すぐ解決するよ」

「は、はあ……」

その頃、犯人を追いかけていた爽太と都は、その犯人を追い詰めていた。

しかし相手は成人男性。男子高校生ではあるが体格に恵まれない爽太と、ケンカの腕は確かだが女の子の都ではたとえ二人がかりでも分が悪い。

そのため、追い詰めるまではできたがその先の一手が思いつかなかった。

「追い詰めた……けど何されっかわかんねえから、うかつに手は出せねえぜ」

「そうだな。どうするよ都、なにか手はないのか？」

「ない……。くそっ、せめてもう一人いれば……って、誰かが近づいてくる……？」

膠着状態の続く中、そこに現れた一人の青年。

都は彼の顔に見覚えがあったが、すぐには出てこなかった。

「あつ！ あんたは……えっと、誰だっけ？」

「……？ 俺のことより、こいつから返してもららうもんを返してもらうのが先だろ。そっちの方がめんどくさくねえ」

「そっ、そうだ！ やいてめえ！ よくもドロボーなんかしやがったな！ ジュリーの財布、返しやがれ！」

「だ、そうだ。めんどくせえことになる前に、さっさと返したほうがいいと思うぜ？」

（この人……怖くねーのかな。相手なにしてくるかわかんねーってのに）

爽太が思うよりも早く、青年はその俊足を生かして犯人との間合いを詰めていた。

そして両腕を掴み、両足を自分の足で踏みつける。

「だらしねえ。こんなに簡単に自由奪われてんじゃねえよ。……さっさと返しやがれこの腐れ外道が！」

犯人の自由を奪ったまま、彼は怒声を浴びせる。

その声に驚いたか、犯人は財布を彼に手渡した。

犯人の腕を掴んだままで、青年は取り返した財布を都に手渡す。

「とりあえず取り返したけど、一応中身確認してみてくれないか」

「あ、おう！……うん、たぶん大丈夫だと思う。あいつこれにはお金しか入れてねえし、カード類は別のヤツに入れてたからな」

「だ、そうだ。これに懲りたら、もう二度とひつたくりなんかやるんじゃないぞ」

青年が力強く犯人をにらむと、犯人は一目散に人ごみの中に消えていった。

「殴り合いにならなくてよかった……。ん、そういえばそっちの子は見たことあるよな」

「そう！ あんた確か、周一さんだろ！？ 圭輔さんの友達の！よくHexagramに来てくれてたよな、おれ覚えてるぜ！」

「そ、そうだよ。えっと、君はたしか都ちゃんだったっけか。まだあのカフェで働いてんの？」

「いや、今はもうやってない。でも、ありがとな。ジュリーも喜ぶぜ」

「そうだ、早く戻ってやんねえとな」

どうやら都と、周一というらしい青年は面識があったようだ。

爽太はやや疎外感を覚えながらも、樹里たちのいるであろう駅前に戻ってゆく。

「……あ、戻ってきたよ！」

数分後、都は周一と会話しながら駅前に姿を現した。

「おかえり周一！ どうだった？」

「ああ、この通り取り返したぜ。……えっと、樹里ちゃんってのは誰だ？」

「わ、私です……。どうもありがとうございます」

「（うわっ、でかつ……。いろんな意味で……。じゃ、じゃあこれ。」

一応、中身確認しといてくれ」

「はっ、はい。……あ、大丈夫です。全額あります」

「そ、そっか。そいつはよかった……な」

「……？」

周一は樹里と顔を合わせぬまま財布を渡したが、樹里にはその姿がひどく滑稽に見えた。

そして彼は、一緒に来ていた女性のところに戻ると、彼女に何かを言われているようではつが悪そうに頭を下げている。

「もー周一！ あの子のどこ見たのよ!？」

「いや、どこも見てないぞ……」

「ごまかしてもダメ！ ……それとも、ボクのじゃ不満？ もっ

とおつきくなきゃダメ？」

「んなわけねえだろ。お前はお前だ、そのままがいい」

「うん、ありがと……。嬉しい」

「ちよ、くつつくなつて！ みんな見てるだろーがよ！」

「はっ、ごめんごめん。あはははは！ ……さて、と」

その後、周一の彼女らしき女性はこちらを向いて自己紹介を始めた。

「もしかしたら会ったことある子もいるかもしれないけど、一応自己紹介するね。ボクは上原芽衣っています。そして、こつちが彼氏の手塚周一くん！ 最近はあまり行つてないけど、Hexagramっていう喫茶店の常連なの。みんなもよく行くでしょ？」

「あ、そーだ！ 芽衣さんだ！ おねーちゃんが話してたっけ、元気があつてうらやましいって」

「おねーちゃんって、絵実梨ちゃんではないのかな？」

「そうそう！ ひっさしぶり〜！ 元気しました？」

「うん！ みんなも元気そうで何より！」

「あ、あの、えつと……は、初めまして。私、藤堂樹里です……。さ、さつきは財布ありがとっございました！」

「いいっていいって、気にすんな」

「うわあ、おつきいね！ 周一じゃなくてもこれは見とれちゃうね」

「は、恥ずかしいです……」

「あはは、ごめんごめん。……あつ、そうだ。ねえみんな、今あのカフェってマスター以外に誰か働いてる？」

芽衣は話題を、マスターの経営するカフェ Hexagramのことに変えてきた。

彼女の質問には、過去にウェイトレスを経験した都が答えた。

「いや、今はいないはずだぜ。ちょっと前にはおれと絵実梨さんがいたけどよ、絵実梨さんは就職して、おれは学校に専念するから辞めちゃった」

「そっ……か。都ちゃん、マスターの助けになっってくれてありがとね。あの人って疲れとか顔に出さないけど、実際けっこう体に来てると思うんだ。だから、みんなもそこは気遣ってあげてね」

「う、うん。……え、マスターってどこが悪かったりするの？」

「いや、そうじゃなくてね、なんていうのかな……。えつと、ボクたちはお金を払ってカフェを使わせてもらってるわけだよ。でも、だからってそれに寄りかかってるだけでいいのかな……って」

「……言いたいことは分かります。飲食店で提供するの食べ物とかだけではなく、その場所やサービスも……ってことですよね」

「そう。マスターはあのお店をたったの一人で動かしてる。どんなに忙しくても、いつも笑顔で。相談にも乗ってくれて……。たまに圭輔くんとかコーヒー一杯で朝から晩まで居座ってたりもするけど、そんな客がいても基本的に何も言わなくて」

「おい、芽衣。なんでいきなりそんな話してんだよ。こいつらに圭輔の話したって意味ねえだろ」

「周一は黙ってて。ボクの言いたいことはそこじゃないんだから。芽衣は優しい声で、しかし真剣な目で樹里たちに語りかける。

「そんなマスターの仕事がどれだけ大変か、考えたことはある？」

「……正直に言いますと、ありません。常連になったとは言え、私はまだその日が浅いので……実際にマスターが忙しそうにしているのも、見たことはありませんし」

「おれはあるぜ！……ていうか、何もわかんなかったおれをいっばしのウェイトレスに育ててくれたんだぜ？ 自分の仕事もあるつてのに。……おれがいろんな意味で暴走したりした時も何も言わないで許してくれたたり……。あんなすげえ人、他にどこ探してもいねえよ」

「うん。都ちゃんは優しいね。マスターのこと、ちゃんとわかってる」

「な、なんだよお。いきなり褒めるなよ、照れちゃうよ……」

「あははっ、ごめんね。……で、さ。そんなみんなに相談があるの。聞いてくれる？」

「なにになに？」

「もうすぐマスターの誕生日だからさ、いつもお世話になってるお礼として何かしてあげたいんだ。もちろん、もう時間はあんまりないから大掛かりなこととは出来ないけどね。いつもありがとっつて言っただけたり、寄せ書きとかしてあげようとか……さ」

「いや、寄せ書きっていなくなっちゃうわけじゃねえだろうに」

「こっこののは気持ちなの！」

「そういうのわかるぜ、オレ。オレって転校が多かったんですけど、そのたんびにみんながお別れ会やってくれて、それが嬉しくて……。気持ちだけとは言っけど、実際にやってもらおうとすっげー嬉しいんですよね」

「そうだったんだ……って、キミあまり見ない顔だね」

「オレもお二人は見た記憶ないですね。んじゃ自己紹介しようか。」

オレ、風間爽太。この春、こっちに戻ってきたんです。よろしく」

「爽太くんだね。うん、よろしくね！」

芽衣はそう言いながら、爽太の右手を取って握手した。

いきなり手を握られた爽太は顔を真っ赤にして、芽衣から目を反らす。

「うわっ！ な……なんかオレ、芽衣さんのこと直視できねー！」

「えっ？ ど、どっつして？」

「なんというか……その服がすごく似合っていて、かわいいなって」「わっ、わっ！ か、かわいい！？ かわいいって言ってくれたの！？」

爽太が直視できないという芽衣の服装とはピンク色のフレームのメガネとボーダーのタンクトップ、ひざ上10cmはあるうかというミニスカート、そして露出した脚部をすっぽりと覆い隠すようなサイハイソックスというものだった。

色調こそ落ち着いているものの、確かにこの服装は周囲の注目を集めそうだ。

「確かに、芽衣姉さんにすっげえ似合ってたな！」

「あー……なんていうんだっけ、そのミニスカとニーソの間の部分！ 喉まで出てんのに出てこない〜！」

「絶対領域……。まさか、こんなにキレイに決まる人がいるなんて！ まさに黄金比ね……！」

「そーよ、それ！ あーやっと思いついた……」

「樹里ちゃん、これわかるの？ 最初はちょっと抵抗あったけど、今では気に入ってるんだよ」

「フン。圭輔のヤツがしつこく勧めてくるから興味本位でやらせてみたら……思いのほか似合いやがってよお」

「あつ、周一さんの顔が赤いぜ！ へへっ、芽衣姉さんのそのカットがやっぱり好きなんだ〜」

「うっ、うるせえ！ ……あーそうだ都ちゃん。確か潤の野郎もこっぴどい感じの服装好きはずだから、参考にしたらどうだ？」

「えっ……マジで！？ で、でもおれなんかやっても似合うかな……っ。」

「似合うって！ 大丈夫だよ、たぶん」

「……でも、一番似合いそーなのはジュリーかなあ。こーゆーのってちょっとむっちりしてる方がいいんでしょ？」

「むっ、なにそれ！ ボクが太ってるってゆーの！？」

「……私は否定しないよ、かおりゅん……」



「でも確かに樹里ちゃんには似合いそうかもね。こういう服、持ってないの？」

「あつ、ありません！ わ、私は動きやすい服でいいから……。でも、着てみたいっていうのはあります」

「じゃーやってみりゃいーじゃん。どして着ないの？」

「……サイズがないの！ ああいうかわいい服だと、どれもサイズが小さいのよ……！ 自分で作るうにもさすがにそんなスキルはないし……！」

「それは確かに……」

「だから、私は他の人が着てるのを見て楽しむだけでいいんです……」

「……そっか。ジュリーにはそんな悩みがあつたんだな。かわいい服着てみたいのに体が大きくて着られない。でもオレはなんだ。女扱いされるのがいやだからってそういう服着るのはイヤときたもんだ。……よし、決めた！」

「えっ、何を……？」

「ジュリー！ オレ、お前のために一肌脱いでやる！ 一度だけなら、お前の望むような服着てやる！ 女装でもかまわないぜ！」

「えっ！？ ……えっ！？」

「オレ……お前にお礼がしたいんだ。今日こんな機会を作ってくれたことに……。さ。それに、お前の気持ちを知った以上、やってやりたくなつちまつたんだ」

「あつ……ありが……。とう。私、なんだかすごく嬉しい……」

「その代わり！ 一回だけだからな！ それで我慢しろよ！？」

「うん、うんっ！ あーやっべ、鼻血出てきそう！」

「へへっ、よかつたなジュリー！ その時はおれも呼んでくれよな。撮影すつからよ！」

彼らはテストを忘れ、充実した休日を過ごした。

しかし、2日後にはテストを控えているという現実からは逃れら

れない。

## 第8章：贈り物

彼らは翌日の日曜日と同じメンツで集まり、勉強会を開くことにした。

常に学年1位の樹里と、クラス内順位が樹里に次ぐ2位の瑞奈を交えた勉強会は、他の3人の成績を一気に引き上げた。

とは言え、樹里は試験範囲の内容を教えただけではなく、全員のテストの受け方そのものを修正しただけだった。

せっかちな果緒梨には早く終わらせたあとの見直しの徹底を。

字の汚さで損をしていた都には下手でもいいから読みやすい字を書かせることの徹底。

そして爽太には自分のわかる問題からやっつけていくことの徹底という、実に基本的なテストの受け方を徹底させるだけだった。

基本的なことに気がついていなかった3人はみな、目からうろこが落ちたようだった。

「なんだよ、ゆっくり書けばよかったのか！……確かに、人に読ませるってこと意識するだけでも違うな」

「あたしは見直しをすればいいだけの話だったのね。終わったらその時点で満足してたわ」

「今まで順番通りに答え書いてたオレがバカみてーだよ！ ジュリ、ありがとな」

「あはは、ありがと。みんな基本は出来てるんだから、もったいないよ」

「わたしが教えてもあまり成果出なかったのに……」

「瑞奈はねー、頭はいいんだけど人に教えるのは苦手だったみたいねー」

「うう……。そんなにはつきり言わなくても……」

「あっ、そうだ。おれずつと前から疑問に思ってたんだけど」

漢字の書き取りをしていた都が突然、思い立ったように言葉を発

する。

「なに？ みやびよん」

「おれってさ、みんなと同じように卒業できんのかなって」

「どうして？」

「だって、おれって高校1年生は経験してないし……。2年生だつて、3学期から始まったようなもんじゃねえか」

「……あ」

「みやびよん、大丈夫。私、先生に聞いた事があるから」

「え、どういうことだ？」

「みやびよんが転入してきた時、私先生に食って掛かったの。中学すらろくに行つてないような子をどうしていきなり高校2年生の、しかも3学期から始めさせたのか、って」

「あー、昔のいや〜なジュリーっぽいわ。で、どうだったの？」

「なんか煙に巻かれちゃつてさ。それまで社会経験を積んだという実績を教育委員会に認めさせたとかなんだかで、それまでの単位を免除させたみたいなこと言つてたよ」

「コタロー先生って……えげつねえ……」

「実際のところどうなつてんのかはわからないけど、先生が大丈夫だつて言うんだから大丈夫だと思うよ」

「つくづくいい加減ね……。まあでも、みやびよんが心配することはないってことでいーじゃん」

「よかつたと言えばよかつたんだろうけどよお、あとでめんどくなつたらヤダなあ……」

勉強会は、特に脱線することもなくスムーズに進んだようだ。

そして、1学期の期末考査が始まった。

進学を考える者にとっては、これが最も大事なテストとなる。

その真剣さは、他の時期と比べても明らかに違っていた。

「は〜、終わった〜あ……」

5日間というテスト期間の終了を告げるチャイムと同時に、樹里は小さく呟いた。

しかし、そのような小声を発したのは彼女を含むごく一部で、生徒の大部分はチャイムと同時に安堵のため息をもらしていたり奇声を発していたりしていた。

監督教師も注意を促すが、気持ちが分かるのか強く咎めることはなかった。

残り10日ほどを過ごせば、高校生活最後の夏休みが始まる。

テストの終わった3-E教室でも、その話題で持ちきりだった。

だが、一部の運動部は最後の大会に臨むためか、テスト終了後に召集がかかっている。

もちろん野球部もそのうちのひとつのため、海斗はHR終了後に小走りで教室を出て行くこうとしていた。

そんな彼を、爽太が呼び止める。

「なんでですか？ オレっち、さっさと行かねーと……」

「あーいや、すぐ終わる。……お前さ、次の試合出るだろ？」

「赤点さえなければな……」

文武両道を重んじる汐野学園は、テストの結果次第で大会等に出すメンバーを決める部活動もある。

野球部はそのうちのひとつだったようで、赤点1教科につき1試合の出場停止が言い渡されているらしい。

そういった部活動に所属する生徒のテストは優先的に採点され、部活動中に返却されるケースもあるという。

海斗は、今回のテストには手ごたえがあったようで一見冷静だが、内心は心配でたまらなかったようだ。

「じゃあ出れるって仮定して、いつだよ？ 応援に行きたいから教えてくれよ」

「おおっ！ あの時の約束はまだ生きてたんでっすね！ えっと、次の試合は10日の日曜日で、場所は牧田スタジアムでっす。あ、プレイボールは10時からな」

「うん、了解。原田くん、当日は私たちが精一杯応援するから、がんばってよね!」

「負けたらしょーちしないかね! せいぜいカッコいいところ見せなさいよね!」

「お……オレっちって奴あ、なんて果報者なんだ! んじゃそろそろ行ってくるでっす!」

「おー! がんばってこいよ!」

海斗を送り出した4人は続いて、マスターの誕生日プレゼントについての相談を始めた。

実はマスターはテスト期間中に31歳の誕生日を迎えていたが、彼らはテスト中はカフェに顔を出していないので誕生日を迎えた後のマスターには出会っていない。

「さて、と。次はマスターへの誕生日プレゼントね」

「うん。でも、あまり奇をてらうものじゃなくてもいいと思うの。例えば寄せ書きとか……」

「あたしもそんな感じのでもいいと思う。芽衣さんもこないだ言っただし。……それに、もうあたし持ってきてるんだ」

そういうと果緒梨は自分のバッグをまさぐり、無地の色紙を取り出した。

彼女の準備のよさに、みな驚きを隠せなかった。

「うわ、もう準備してたんだ! 相変わらず早いね」

「へへーん、ざつとこんなもんよ」

「それじゃあ寄せ書きでいいとして……それなら、あのカフェに来てる常連さんに来るだけ書いてもらいたいね」

「だな。でも店の中でやるとバレるぜ。そうでなくてもマスターは鋭いし」

「あたしらはここで書くとして……他のみんなはどうしよっか」

「あ、じゃあおれが潤さん経由で圭輔さんに渡させればいいんじゃないの? あの人ならいろんな人に渡せそうだしな」

「そうなの?」

「うん。圭輔さんってね、すつごく交友関係が広いんだから。わたしの知らない人もいっぱいいるの」

「そうなんだ……。私とは大違い。それじゃ、まず私たちだけでも書いてちょう。で、終わったらみやびよんに渡して、って感じで」

「そうね。じゃ、最初はあたし書く！」

相談がいい感じに煮詰まってきたところで、いよいよ色紙への記入が始まる。

我先に書き始めるは、やはり果緒梨だった。

マスターの誕生日はもう過ぎていくし、彼のことを考えると誕生日だからといって特別な振る舞いは見せないだろう。だが、ここにいる5人にはそれは関係なかった。

確かに、寄せ書きをするということのことを思いついた背景には彼の誕生日があるが、今となっては純粹にマスターへの日ごろの感謝の気持ちを伝えたいという思いが勝っていた。

夕方、帰宅した都は半分近くが埋まった色紙を潤に見せる。

「ん？ なんだこれ」

「これ、みんなでマスターへ少しずつ書いてんだ。潤さんもなんか書けよ」

「まあ書くのはいいけど、なんでまた？」

「ほら、マスターってこないだ誕生日だったじゃねえか。そのプレゼントってことで、さ」

「なるほど。了解」

「でさ……。それでなんだけど、潤さんから圭輔さんへ渡しといてくれねえか？ もちろん、マスターに感づかれないように」

「そういうことなら任せとけ。で、いつまで？」

「明日」

「……！？ 明日か……。間に合うかなあ。まあ、とりあえず呼んでみるか」

そういうと潤は都から色紙を受け取り、それに記入しながら携帯

電話を操作し始めた。

その行動を見た彼女は……ラブラブモードのスイッチが入ってしまった。

どうやら都は『2つ以上の行動を同時にやってのける』人やその行動にときめくようで、普段からながら行動の潤はその意味でも彼女にふさわしかったりする。

「よし、とりあえずメールはしといたよ。あとは来るのを待つだけだ」

「ありがとつ、潤さん。で、来るの？」

「来るだろー、あいつなら。今日は確か予定ないはずだから」

「あの人もヒマだよなあ。ちゃんとバイトとかしてんのか？」

「多少はやってんだろ。どこでやってんのかは知らないけど」

このように2人に噂をされているとは露知らず、圭輔は愛車を走らせて彼らのアパートに向かっていた。

そして15分を過ぎたころ、ドアをノックする音が聞こえてきた。

「おっ、来たな。はいよー！ 今開ける」

「よー、お二人さん！ 暇人が来てやったぜ」

「圭輔さん、こんばんは！ ほら、上がってけよ」

「はいよつと。それじゃあお邪魔しま……す！？」

言われるがままに玄関を通り抜けた圭輔は、思わず目を丸くして息を呑んでしまった。

何故なら、あれほどまでに散乱していた用途不明の置物などが一切なくなっており、すっきりと片付いていたからだ。

「え……ちよ、なんかずいぶんスッキリしたんじゃない？？」なに、思い切って捨てちゃった？」

「まあ……な。フリマとかで売りさばいたりしたのもあるし、カフェに提供したのもある。……ほら、二人で暮らしてるんだし、狭いのはちよつと……な」

「うん……」



「ケーツ！ おアツいことで！ んで、本題は？」

「そうだった。ほら、これよこれ」

潤はすでに半分ほどが埋まってしまった色紙を、圭輔に手渡した。先ほどのメールではまともな説明もなかったようだが、色紙に書かれた文面を斜め読みして目的を把握したようだ。

「なるほどね。これ、都ちゃんたちが考えたの？」

「おれらじゃねえよ。芽衣姉さんがこうしたらどうかなって言うてたから……」

「あー、芽衣ちゃんか。芽衣ちゃんといえば、最近ぐぐつと2・5次元に近づいてきたんじゃないかねえ！？」

圭輔は急に視線を潤に移し、同意を求める。彼も鼻息を荒くしつつ、首を縦に振った。

「だな！ 周一の野郎がうらやましいぜ！」

「……だが、彼女にも足りないものがある。それは！」

「それは！？」

「年下属性だ！ 悲しいかな芽衣ちゃんは幼なじみ、もしくは年上属性は備えているものの、妹や年下ではない！ それだけが……それだけが無念でならんっ！ そう思わぬか同志・潤よ！？」

「その通りだ！ お嬢様系ツンデレは優香さん、姉属性はリアル姉の絵実梨さんとオレらの周りには意外にもいろんな属性の娘がいるのに！ 年下がっ……年下がっ！」

「な、なんの話だよさっきから！？ よくわかんねえけど、年下ならおれが……」

「違うっ、違うんだ都ちゃん！ あいつは、現実と仮想現実の2つの次元にそれぞれ彼女を持つという稀有な存在……っ！ それぞれの次元に足りないものを補うという、相互補完を行っているのだ！」

「そんな！ 潤さん、浮気……」

「それは違う！ ヤツの名誉のために言っておくが、ヤツに浮気をする甲斐性なんてない！」

「いや、それ逆に名誉毀損……」

「ま、それはそれとしてだ。都ちゃんにひとつ尋ねよう。もしあいつがキミのその乱暴な言動がうざいから今すぐやめろって言ったとしたら、どうする？」

「う……。ガキの頃からずっとこうだから、今すぐやめろっつわれでも直せねえよ……」

「だろ？ だから、あいつはそれを強要しない。……でも、たまには普通の女の子とも接してみたい。でもやっぱり都ちゃんを見捨てるなんて出来ない。そんな時、潤は仮想現実到自己を投影し、そこでその願望を満たすんだ。そうだろ？」

「その通り！」

「ここで誤解しないで欲しいのは、これは浮気でもなんでもなくて事だ。悲しいが、我ら2次元戦士は肉体が3次元に残り続けてしまう。いつまでたっても3次元、すなわち現実世界から脱却できない！ それなのに現実世界に絶望したらどうなる！？ 死ぬしかないんじゃないか！ だが、生きていれば必ず希望はある。仮想現実とは、現実世界に絶望した人間たちの最後の希望。そう。仮想現実すなわち2次元とは、パンドラの箱に最後に残されたものなのだから！」

「……っ！ じゃ、じゃあ潤さんは！？ ……その、おれっていう彼女がいるじゃねえか。それでも現実に絶望してんのかよ……？」

「それも違う。あいつはどうも物事をオーバーに言いたがるから余計な誤解を生むんだ。わかかってやってるのかも知れないけどな。」

「……とにかく、オレには都ちゃんがいる限り絶望なんかしてたまるか。けどどな、これもわかかってやってくれ。確かに、都ちゃんには足りないところがいくつもある。それを補ってくれる存在が、たまたま仮想現実にあつたって話なんだ。だからって都ちゃんはオレの理想に近づこうなんて考えなくていい。……今のままのあなたを、オレは一番愛しているから」

「うれしい……！ そんなにまでおれの事を……。……大好き」  
「都は嬉しさのあまり、潤を吹き飛ばさん勢いで抱きついた。そし

て傍らに圭輔がいるにも関わらず、キスをした。  
その光景を目の当たりにした圭輔は、カフェで見慣れているはずなのに動揺しているようだった。

ひとしきり体を預けて満足したのか、都は潤に尋ねていた。

「で、さ。参考までに聞くけど、おれに足りないところってなんだよ？ こういう言葉遣い以外で」

「言ってもいいの？」

「いいよ？ いやむしろ言ってくれないと気になって仕方ねえよ。

……べ、別にキレたりボコったりしねえからよ」

「そんなに言うならばつちやけちまうぞ。覚悟しときな」

「う、うん……！ おれ、耳背けねえ！」

都は息を呑み、次の言葉に耳を傾ける。

「都ちゃん……背が高すぎる！」

「えっ！？ ……えっ！？ で、でかいのダメ……？」

「身長は、な。都ちゃん、キミに足りないものは背の低さだ！ あ

とは……メガネ！ そしてアホ毛！」

「あ、アホ毛！？ ……って、なに……？」

「それ以外のオレの萌え属性は全て持ち合わせているのに……っ！  
！」

「ご、ごめんよ潤さん……。その、おれがダメなヤツで……」

「いや、いーってことよ。完璧すぎても逆に気味悪いから、これでちょうどいいんだ」

「そっか……そうだよ……。うん、やっぱりおれは愛されてるんだ。へへっ、うれしいな……」

再び甘い雰囲気にも包まれる2人。

その頃の圭輔はすでに自分の書くところを埋めており、携帯電話をいじりながら暇をもてあましていた。

「よし、じゃあオレそろそろ行くわ。こいつをいろんな人に書いて

もらっからさ」

圭輔がそう話したのは、時間にして夜の8時半。すっかり日も落ち、辺りは闇に包まれている。

「お、そうか？ んで、何人くらいいいけそう？」

「ん〜……。10人かそこらかな」

「10人！？ そんなに書くスペースあつたっけ？」

「なんとかなるだろ。オレが中坊のとき実習に来てた先生にもああいうのあげたけど、30人が普通に一枚に書いてたから大丈夫だよ、多分。もしアレなら裏に書きちゃってもいいと思うし。そうだろ？」

「う、うん。あーでもだつたらもつと小さく書いとけばよかった」

「気にすんなつて。んじゃ邪魔したな。また来るぜ！」

「おう！ 気いつけるよ！ 後ろから刺されんなよな！」

「うっせー！」

圭輔は小走り気味にアパートを出て行った。

今から10人も人間の間に色紙を書かせるらしいが、果たして全員が書けるほどのスペースはあるのだろうか。

間もなく日付が変わろうかという頃、青山家の玄関のドアがゆっくりと開かれた。

「ただいま〜」

その声の主は、青山絵実梨。果緒梨の実の姉であり、社会人一年生でもある。

実は、彼女も先ほどまで圭輔の呼びかけに参加していた。

そして、彼女の持つバッグの中にはシートにくるまれた色紙が入っている。

寄せ書きをしようと言い出したのは高校生たちだったため、実際にマスターに渡すのも彼女らがよいだろうという判断から、最終的には高校生の果緒梨を妹に持つ絵実梨に渡ったのだ。

彼女は着替えもそこそこに、妹の部屋のドアを開けた。

「ただいま〜。寄せ書き〜、持ってきたよ〜」

「やった！早く出して出して！」  
「わかつてるよ。はい、これ」  
「どれ！？うわっ！すっごいたくさん書いてんじゃん！あたし、もちつと書くスペース縮めた方がよかったかも」  
「これを、明日渡しに行くんだよね？」  
「うん！おねーちゃんも行く？」  
「行く〜！」

カフェ Hexagramでは、開店前から何故か常連が列を作っていた。

これにはマスターも目を白黒させずにはられない。

「おいおい、今日はいつたい何が始まるんだい？こんな大勢集まつちやつて」

「それを聞くのは野暮ってもんよマスター！ま、あんたをビビらせてやるって事だけは伝えとくぜ」

「それは楽しみだ。んじゃ、暑い中待たせるのもアレだからもう入り口だけは開けちゃうか。入った入った」

マスターは外で待つ常連たちに店内に入るよう促した。

20人が入ればほぼ埋まってしまうような店だが、これでもまだ全員揃っているわけではない。

野球部の2人は翌日の試合のための最終調整を行っているため欠席しているし、ほぼ毎日のように来ているみさきや優香、そして今回のサプライズ誕生日会の発起人と言ってもよい存在の芽衣の姿もなかった。

実はその3人は、この場所とは別のところでプレゼントを準備している。

3人が10本ずつ別の種類の花を用意し、合流してからひとつの束にまとめるという計画を立てていたのだ。

本来の開店時間を30分ほど過ぎた頃、ようやく姿を見せなかつ

た3人が来た。

その手に、それぞれが選んだ花を10本ずつ持ちながら。

マスターはこの時点で何が行われようとしているのかおおよその見当をつけていたが、気づかぬふりをしながら応対した。

「いらつしゃ……い？ は、花束？」

みさきは見とれるくらいに紅いバラを10本。

優香は対照的に真っ白なユリをやはり10本。

芽衣はそれらを引き立たせるようなかすみ草と、アクセントになるガーベラを5本ずつ。

こうして集められた合計30本の花を、優香がひとつの束にまとめ上げた。

大きく、立派な花束が完成するまで、数分もかからなかった。

「さっすがお嬢！ めっっちゃキレイじゃん！」

「これほどまでに大きいものを束にするのは久々でしたが……。では芽衣さん、呼んできていただけないかしら？」

「うん！ ちなみさーん！ もういいよー！」

（……っ！？ 千奈美さんが、なんだって！？）

ここに来てマスターの思惑が外れてきた。彼の妻である千奈美までもが自分の誕生日を祝うために一役買っていたことを、まったく予想していなかったのだ。

何故なら、本来の誕生日である数日前にすでに2人だけでささやかなパーティーを行っていたからだ。

だが、これは彼にとって嬉しい誤算でもあった。

芽衣に呼ばれた千奈美は、ひときわ大きなひまわりを一輪だけ持って現れた。

みさきたち3人が10本ずつ用意したので30本。そして彼女が持ってきた一輪を加えて、31本。

本数で言うと中途半端だが、これでマスターの年である31と同じになった。

年齢と同じ本数がまとめられた花束が今、マスター本人の手に渡

る。

それと同時に、割れんばかりの拍手が巻き起こった。これには関係のない客もつられて拍手を送るしかなかった。

プレゼント攻勢はまだ終わらない。拍手の興奮も冷めないうちに、総勢20人ほどによって書き込まれた寄せ書きがマスターの手に渡る。

この時に渡す役になっていたのは、瑞奈だった。

「マスター、いつもありがとうございます。そして、ちょっと遅れちゃったけど……お誕生日おめでとう！」

それと同時に、再び拍手が巻き起こったのは言うまでもない。

瑞奈から色紙を受け取った直後、マスターは上を向いてしまう。涙が落ちるのをこらえているのだろうか。

そして、そのままの体勢でゆっくりと言う。

「本当に……本当にありがとう。こんなに嬉しい誕生日は生まれて初めてだよ。こんなにも素敵なみんなと知り合えて、僕は本当に……幸せだ」

「……」

マスターは率直に、感謝の言葉を述べた。

またのらりくらりとした反応をされるのかと思った圭輔などは、いささか拍子抜けしたようだった。

「……へっ！ 年寄りつてのは涙もろくていけねーや。せいぜい体調とかに気遣うんだな」

「肝に銘じておくよ。……今日は最高の気分だ。いつ死んでも……満足だ」

「だめ〜！ だーりんまだ死んじゃめー！ めーなの！ 冗談でも死ぬなんて言っちゃめー！」

マスターが冗談交じりに死ぬといった時、千奈美は彼にしがみついた。

彼女とマスターは同じ年なのだが、まったくそう見えないのは彼女が幼さを残しているからであろう。

「そうだね。ごめんよ、千奈美さん。二人の子供も出来てないのに、死ぬわけにはいかないよね」

「えっ!? えええっ!? あ、赤ちゃん!? ……ふ、ふみゅ〜!」

「はあ〜……。ちなみちゃんさー、もつと年考えねー? ホント、アタシらが中坊の頃から変わんないっつーか、ますます幼くなっちゃったんじゃない?」

「だって、だって〜……」

こうして常連メンバーが盛り上がる中、いまいちその輪に入りきれない者が数名いた。

常連になったのがつい最近で、本日集まったメンツの顔と名前の半分ほどが一致しない爽太と樹里だ。

「一人のためにこんな大勢集まれるなんて……考えられない」

「ホントにすっげーな。マスターってカリスマか?」

「カリスマ……。言い得て妙ね。知らない人だったらそれこそ喫茶店のお兄さんとか認識しないんだろうけどさ」

「でも、オレってぶっちゃけマスターのすごさってあんまりよくわかってないんだよね」

「私もだよ。そりゃ、たつたの一人でお店を経営してるのとかあんなにたくさんの人に慕われてるのとかはすごいと思うけど」

気づかないのも無理はない。マスターは決して自分を必要以上に誇示しようとせず、あくまでも『喫茶店の店員のひとり』を貫き通しているのだ。

彼らは願った。マスターと、マスターの経営するカフェ Hexagram がいつまでも残り続け、人々の癒しの場となることを。



## 第9章：悲しきBetraye

「あつ、選手入場だよ！」

「みんながんばれー！ー！ー！ー！」

さまざまな声が飛び交うこの場所は、牧田運動公園内にある牧田スタジアム。

本日は夏の高校野球大会の初戦が行われる予定であり、汐野学園ナインがグラウンドに姿を現し始めた。

しかし、一塁側の観客席のほとんどが空席であり、学校側の期待は薄そうであった。

「なんだよなんだよ、こっちの応援少ねーぞ？」

「期待されてないんだね……。かわいそうに」

「あつちはブラバンまで呼んで結構本格的なのに、こっちはあたら含めて30人いるかいなかった感じね」

「そんなの関係ねえよ！ 勝つのはおれらだぜ！」

「あはつ、みやびよんったら張り切ってるね」

「……あ、始まるみたいだよ」

そしてついに、汐野学園野球部の戦いが始まった。しかし……。

「フォアボール！ ランナー一塁！」

「……くっ！」

試合も中盤にさしかかっていたが、汐野ナインは苦戦を強いられている。

何故なら、エースである竜造の制球がまったく定まっていなかった。

初回こそ三者凡退で抑えたものの、現在の4回までに与えた四球はすでに6つ。

普段の針の穴をも通さんばかりの正確無比なピッチングが、完全に影を潜めている。

これにはたまらず、バッテリーを組む海斗がマウンドに駆け寄った。

「どうしたんでっすか竜造！ お前らしくもない……」

「俺だつて……わかんねーよ。なんか、みんなが応援に来てくれたつてのがプレッシャーになつてるのかも知れない」

「そんな！ そりゃ、せつかく来てくれたみんなに失礼つてなもんでっす！ そのせいで負けたとかシャレにならねーでっすよ!？」

「わかつてる。俺はこの程度で崩れたりはしない。全国、行くんだろ？」

「お、おう」

「俺はもう大丈夫だ。戻ってくれ」

竜造の乱調は、応援席の瑞奈たちまで心配させる。特に都は気が気でなかった。

「がうう……。竜造くんどうしまつたんだよ……?」

「緊張してるのかな？ 稲村くんらしくないけど」

「そんな！ 竜造くんに限つてそんなことは……」

「ない、とは言い切れないでしょ？ 彼だつて人間だもん、緊張くらいするよ。ましてやこれが最後の大会となると、余計にね」

彼女らの心配をさらに大きくするように、竜造はなおも乱調が続く。

球速もあるので打たれることはほとんどないが、自らのエラーなどによって何点も献上してしまつている。

こちらも負けじと打線が奮起しているため、点差自体はほとんどない。

しかし、この調子ではいつ勝ち越されるか分かつたものではない。汐野学園には竜造以外にまともに投げられる投手がない（いたが赤点を取つたため出場停止）ので、このまま彼が投げ続ける他なかった。

8回まで進んでも竜造の調子は戻らず、ついに勝ち越されてしま

った。

球数はすでに130球を超えており、さすがに疲れが見えてきている。

そのためさらに制球が悪くなり、ついにノーアウト満塁のピンチを迎えた。

この状況で今以上の点差がつくことはすなわち、負けを意味する。満塁になったところで内野手が集まる……が、キャッチャーの海斗がついに手を出した。

「……っ!？」

「竜造。お前、本当に全国に行く気があんのか!? そんなノーコンで、通用するとも思ってるのか!？」

「い、いや……」

「だったらっ! ……オレっちたちを全国に連れてってくれ……!」

「プレッシャーなんかになんかに負けてねーで……!」

「……」

竜造はちらつと、空席の目立つ応援席のほうを見た。そこでは、応援団が気もそぞろという表情で観戦していた。

(都さん……来てくれてるんだよな。俺のせいで彼女に……。……プレッシャーがなんだ。全国じゃ、こことは比較にならない衆人環視のもとでやらなきゃならない。こんなところで終わってたまるかよ……!)

……竜造の表情が、変わった。

追われる獲物の助けを請うような顔から、眼光鋭く獲物を狙う王者の顔に。

もう1点も、いや、ヒットすら許さない。

こうなった彼を止められる者は、もういない。

竜造は裏の攻撃でも実力を発揮した。

ランナーを一人置いた彼の打席の初球、真芯を捉えた打球は吸い寄せられるように場外へと消えていった。

この一振りで、逆転。最終回は3人を三球三振に打ち取り、最終的には10-9で辛くも一回戦を突破したのだった。

「……勝った！ 勝った！ やったぜ竜造！ オレっちたち勝ったんでっすよ！？」

「まだ一回戦だ。それに、俺のせいでこんなに苦戦させた……。もう今日みたいなピッチングはしない」

勝利の便りに、応援席のほうからも安堵のため息が聞こえてきた。

「ふう……。ヒヤヒヤしたわね」

「うん……。どうしちゃったのかな」

「最後立ち直ったからいいけど、これからもこの調子じゃちょっと厳しいよね」

「だな。なんだよ、稲村のヤツたいしたことないじゃんか」

「……っ！ 竜造くんを、悪く言うんじゃねえ！！」

爽太が何気なく放った一言が、都の逆鱗に触れてしまったようだ。彼女は涙目になりながら、爽太に食って掛かる。

「ろくに知らねえくせに……適当なこと言うんじゃねえよ！ ……ぐすっ……！！」

「ちよつと2人と、落ち着いて！ どうしたのよみやびよん……」

「ジユリー、知らないの？ みやびよんはね、稲村くんのが……」

「……好きなのよ」

「えっ……！！？ だ、だってみやびよんには彼氏がいるでしょ？」

「いるよ。でもね、それとは別に彼のことも好きなの。これはみやびよんが出した答えだから、あたしには口出しできない。しっちゃいけない。自分が正しいと思いつける限り、それはその人にとっての正解なんだから」

「そんなの……おかしいよ！ それじゃみやびよんが苦しいだけじゃない！ 彼氏もいて、さらに他に好きな人もいるんだっつたら……どっちを選べばいいのよ！？」

「……それは、オレっちから説明するでっす」

「原田くん！？ もういいの？」

「みんなが揉めてりゃ行かないわけにはいかねーってなもんでっす」  
全体的なミーティングは学園に戻ってから行うということらしい。  
海斗はせっかく応援に来てくれた仲間が揉めているところを発見し、駆けつけてきたようだ。

「って、そんなことはどうでもいいんでっす。委員長や風間のヤツは事情を知らねーみてーだから、オレっちから教えるでっす」

爽太はついに泣き出してしまった都をなだめるのに手が放せないようで、彼の話は樹里のみが聞くこととなった。

「まず……竜造は女性恐怖症だった。女の子に見られたり触れられでもしたならそれこそ動けなくなるくらいに。それを克服させたのが、他にもない都ちゃんだったんでっす」

「女性恐怖症……。またどうして……」

「それは今回の件には関係ないから割愛するでっす。で、竜造は都ちゃんと一緒に出かけるとかをしているうちに、いつの間にか都ちゃんのことを好きになってた。でも、知っての通りあの子には彼氏がいた。もうその時点で。だからあいつは自分の気持ちを抑制したそれが都ちゃんへの思いやりだ……ってことで」

「でもその彼氏……潤さんはいい加減な人で、すぐどっか行っちゃってたのよ。みやびよん置いて、ね」

「そう。あの人は放浪癖があるのかどーだか知らねーでっすけど、すぐ海外とかに行っちゃまって都ちゃんをほっぽらかしたりしてたんでっす。……そこで竜造は約束したんだ。潤さんがいない間は、自分が都ちゃんの寂しさを取り払うと」

「そのうちにね、みやびよんも稲村くんのことを好きになっちゃったんだって。でも、潤さんとは別れられない。稲村くんも潤さんからみやびよんを奪おうとしない。だから潤さんと稲村くんの関係はこじれるどころか結構いい感じだったりする。ここで奇妙な三角関係が生まれちゃったってわけ。……あたしはみやびよんのこと一番よくわかってるつもりだけど、そこだけは納得できない。今でも、ね」

果緒梨は以前、どちらも選ぶという意志を表明した都に対して悪意を持って罵った事があった。

彼女は電光石火かつ猪突猛進な性格のため、浮気などという不浄なる行為を極度に嫌う。

都のその選択も潤に対する浮気、裏切りというように判断したため争いに発展してしまった。

彼女らはそれらを乗り越え、今の関係を形成しているのだ。

樹里はようやく都たちの置かれている状況を把握した。そんな彼女がまずしたことは……泣きじゃくる都を優しく抱きしめることだった。

「わぶっ!? な、なにすんだ……?」

「みやびよんは……幸せだね。自分を愛してくれる人が2人もいて家族はいないかも知れないけど、もうみんながみやびよんの家族のようなものじゃない。みやびよんはみやびよんらしく……今の幸せを育んでいってね」

「う、うん……」

「……ごめんね。みやびよんの気持ちも知らないでいい加減なこと言って……ごめん……」

「も、もういいって……。でも、おれ幸せ……」

「……すまん! 悪かったよ都! オレもよく知らなくて適当なこと言って……ごめん!」

「だからいいって。本当に悪いと思うなら、おれじゃなくて竜造くんに謝ってくれよ」

「わかった……! じゃあ今から……」

「ダメだ。今のあいつには反省材料が多すぎるから、余計な情報は入れなくていい。オレっちがそれとなく伝えとくから」

「あ、ああ。そうしてくれ」

「あと……ホントにもーしわけないんですけど、もう応援には来ないでやってくれ! 特に、都ちゃん!」

「えっ……!?!?」

「見ただろ、今日の試合。最後立ち直つたし相手も弱かつたからいいものの、2回戦3回戦とまたあんな調子じゃ全国なんてとてムリでつす。みんなの気持ちだけでありがたいから、頼む！ あいつに全力で投げさせてやってくれでつす！」

海斗は恥も外聞も掻き捨て、地面に頭をこすり付けた。男の中の男、原田海斗の一世一代の大立ち回りだ。

そんな彼に最初に声をかけたのは、樹里だった。

「頭上げてよ、原田くん……。わかった、私たちは応援から手を引くよ。その代わり、絶対にいい試合をしてよね！ 私たちがいなかつたから負けたなんて言わせないんだから！」

「委員長……。！ も、もちろんでつす！」

「ま、まあ、竜造くんはおれがいなくなつてしつかりできるからなつ！ 海斗！ 試合中に限つてはお前が竜造くんの奥さんなんだからな、しつかりリードしてやれよ！ でなきや、おれが許さねえ！」  
「当然でつす！ じゃあ、そろそろ戻らなきや。本当に……。来てくれてありがとうでつす！」

海斗は脱帽して深々と頭を下げながら、他の選手たちに合流していった。

この後、汐野学園野球部は順当に勝ち続け、ついに地区予選の決勝にまで辿りついた。

最初の試合ではあんなに少なかった応援団も勝ち進むにつれてその数を増やしていき、準々決勝ではついに吹奏楽部が加わってしまった。

しかし竜造もその衆人環視に慣れてきたのか、初戦のような無様な姿を晒す事もなくここまでチームを引っ張ってきた。

その決勝の相手とは、過去の威光を取り戻しつつある名門校、龍哭大学附属高校。

今年度のこの地区は、決勝の相手以外にも数多くの有名校が存在していたが、その強豪たちも次々と涙を飲んでいった。

10年ぶりの地区優勝を目指す、あまりにも強大なる龍哭大附属を、汐野学園ナインは乗り越える事が出来るのだろうか。

地区予選決勝、汐野学園対龍哭大学附属高校の試合が始まった。汐野学園の攻撃から幕を開けたこの試合は、静かな立ち上がりだった。

息詰まる投手戦。まさにその言葉がふさわしかった。だが、そんな中で光るものを見せている選手がいる。

汐野学園主将、稲村竜造だった。両軍の打線が完全に沈黙する中、彼のみが長打を連発している。投げて6回まで一塁すら踏ませぬピッチングを見せ、いよいよ一人舞台の様相を呈してきた。

そんな試合の均衡が崩れたのは7回裏、相手の攻撃からだった。竜造にとっては、不運の連続だった。

先頭打者をショートゴロに打ち取ったかと思ったがショートが打球を取りこぼし、その間に一塁を踏ませてしまう。記録はエラー。次にこの走者が盗塁を決め、無死二塁。さらに2番打者が送りバントを成功させ、一死三塁。

ノーヒットでピンチを迎えるも、竜造は冷静に自分を信じて投げた。

3番打者の打球は高々とライト方向に飛んでゆき、危なげなく捕球。

しかし、それと同時に三塁ランナーはタッチアップを始めていた。急いで返球をするも時すでに遅し。犠牲フライ成功で、ついに龍哭大附属に1点を許してしまった。

この1点はあまりにも大きく、そして重かった。

竜造以外の汐野学園ナインは、誰一人として塁に出していない。

8回によやく海斗が内野安打を決めるも、やはり後に続かない。



9回表、汐野学園の最後の攻撃が始まった。

前の回に海斗が塁に出ていたため、この回には4番の竜造に4度目の打席が回ってくる。

相手投手は9回になっても球威の衰えをまったく見せておらず、簡単にアウトを2つ取ってしまった。

9回表、ツーアウト。ここで竜造が倒ればその時点で彼らの夏は終わる。

彼はこの試合の全打席で安打を決めており、次こそはという期待が否が応にも高まる。

バッターボックス内で、彼は静かに眼を閉じる。

ここまで勝ち抜いてきたことを、思い出していたのだ。

その間にもカウントは積み重なってゆく。カウントは2 - 1。

竜造はここで考えるのをやめた。そして……自然の流れに身を任せ、振り抜く!!

その瞬間、全ての動きが凍りついた。

いや、そう感じていたのは彼だけだ。

打球は地面スレスレのところを驚くべき速度で駆け抜けていった。センターとライトの間を破り、フェンスに直撃したその打球はあまりの勢いでそのまま内野方向へと戻ってゆく。

竜造は2塁を回り、3塁に差し掛かっていた。そこでようやく相手のライトが捕球する。

3塁も回り、一気に本塁を狙う竜造。そうはさせまいと、ライトからの返球を待つ相手キャッチャー。

汐野学園野球部主将・稲村竜造は鬼気迫る表情で……叫ぶ!

「そこをどけええええええ!!!!」

静まり返る、球場。

立ち上る、砂煙。

選手も観客もみな、ホームベース上で交錯する2人の選手に注目している。

注目から外れていた主審は、球場全体に響き渡る声で宣言した。

……アウト、と。

この瞬間、汐野学園野球部の夏が、終わった。

「そっか。……負けちゃったんだ」

野球部が敗れたという知らせが樹里の耳に入ったのは、決勝戦の翌日だった。

彼女らは夏休みに入っていたが、瑞奈などは受験のために勉強時間を増やしたので全員が集まる機会はあまりなかった。

「決勝まで行ったのに残念だったね。でも、本当にお疲れさんだよ。よく頑張ったね！」

「だけど、竜造の調子は完璧だったんでっす！ 向こうにヒット一本も打たれなかったし、打つ方も全打席ヒットだったし……」

「それでなんで負けちゃうわけ？」

「うっ……。そ、それは……。向こうのピッチャーもすごくて、あいつ以外誰も打てなくて……」

「点はどうして取られたの？」

「エラーと盗塁と送りバントと犠牲フライでコツコツやられたんでっす……。ヒットもフォアボールもなしで負けたなんて……」

「あちゃー、それは災難だったね……。でも、負けたからってへこんでないでよ!？」

「わ、わかってるでっすよ！ 竜造のヤツも、まるで勝ったみたいーにいい顔してたし」

「じゃあ原田くんも、こんなところで私に愚痴ってないで気持ち切り替えな？」

「お、おう! ……しっかし委員長、いやジュリーちゃん。以前とずいぶん印象変わったでっすよね?」

「なっ、なにによいきなり。こないだまでみたいなお堅い私のがよかった?」

「あーいや、そういうわけじゃなくって。なんか思うところでもあったんでっすか?」

「うん、まあね。……友達は一人居や絶対に作れないんだから」  
樹里は話題を変え、自分の印象が変わった理由を話し始める。

「私、今まで欲しいものは全部手に入れてきた。でも、以前のままじゃ絶対に手に入れないものの存在を知った」

「それが、友達ってことですか?」

「うん。今みたいにもずにやんたちと仲良くなったら、今までとは違った楽しさつてのを味わうことが出来た」

「確かに。野球もチームプレイというか、仲間との信頼があって初めて成り立つものだからな」

「思うところがあるとすれば、そこかな。友達を作るために動いてみたら、たまたまみんなの印象が変わっただけの話」

「オレっち、感謝してるんでっすよ。応援に来てくれたのとか」

「そ、そう?」

「それもきつと、ジュリーちゃんの印象がよくなってなかったら絶対なかったことだろうし」

「あ……ありがと。そんな風に褒められるのも、悪い気はしないね」

「いやー、今のジュリーちゃんの顔とか見てみてーでっすね。きつと照れてんだろーな」

「ばっ、バカ言わないでよ! ……もうっ、からかうんだったら切るよ?」

「いや、そろそろ他のみんなにも伝えようかと思ってたところだし切るのは別に……」

「……原田くん、きつとあと数年は女の子にもてないね」

「がっ……。な、なにを根拠にそんなことを?」

「でもまあ、長いこと電話させるのもあれだし、切るね。うん、わざわざありがと。またね!」

「あつ、そんじゃまたでつす！」

通話を終え、携帯電話をクッションに放り出す樹里。

その顔は当然、照れなどで赤く染まっではいなかった。

「ほんとにあの子ってデリカシーないんだね。みさきさんの弟とは思えないや」

8月に入り、外の世界はよりいっそう暑さを増してゆく。

カフェHexagramでも、涼を求めてやってくる人が増えている。

しかし、ここ最近では常連組、特に高校生たちの集まりが悪い。

暑くて外に出たくないという理由もあるだろうが、彼らの大部分が受験生という理由もあるだろう。

その受験を最も重く考えているのが、瑞奈だった。

この日も朝からずっと机に向かっていている彼女は、夏休みが始まってから外出をしていない。

一日平均12時間の勉強時間を確保しても、まだ不安のようだ。

「ん〜……疲れたあ……」

ペンを動かし続けること3時間。瑞奈は勉強を中断し、飲み物を作るため台所に向かう。

作った飲み物はホットミルク。砂糖を多めに入れ、バニラエッセンスを一滴加えるだけの簡素なもの。

彼女は、幼い頃からそうして作ったものが大好物だった。

「ふー、ふー……。うん、おいしい」

時刻は夜の10時を少し過ぎてている。彼女は睡眠時間も多く確保しているのに、11時には寝なければならなかった。

だがそんな彼女もいい加減勉強漬けの生活に飽きてきたのか、息抜きを考えるようになった。

「そろそろ疲れちゃったな。誰かと遊びたいけど……誰がいいかなあ」

ホットミルクのカップを持ったまま自室に戻った瑞奈は携帯電話

のアドレス帳を開く。

几帳面にいくつかのグループに分類されているが、全体の登録件数は20件にも届いていなかったりする。

「ジュリーちゃんはどうかなあ……。いいや、かけちゃえ！」

瑞奈は意を決して発信ボタンを押す。すると、コール音を1回鳴らしただけで樹里が出た。

「もしもし、みずにゃん？ どしたの？」

「あつ、夜遅くにごめんなさい」

「いいよいいよ。私にとってはこれからが夜の始まりなんだから。で、どうしたの？」

「えつとね、明日ってジュリーちゃん、暇だったりする？」

「明日？ うん、予定はないよ。なに、息抜きしたくなったの？」

「うん！ さすがにちよつと疲れちゃって。えへへ」

「んじゃまあ、とりあえずカフエで合流しようよ。そこからどこ行くか決めればいいよね。夜も遅いし」

「うんうん！ じゃ時間は11時くらいでいい？」

「いいよ。……。よし、明日のお昼は私がおごっちゃおうかな」

「ふええつ！？ い、いいの？」

「いいのいいの。みずにゃん、がんばってるじゃない」

「ありがとう……。それじゃ、また明日ね！ おやすみなさい」

「うん、おやすみー」

瑞奈は翌日、樹里と遊ぶ約束を取り付けた。

電話を終えた樹里はやってきたゲームを中断し、クローゼットを開いていた。

「明日、なに着てくかね……。」

樹里は、先月会った芽衣の服装を見てから彼女の着ているような服がどこにあるのかを探していた。

そしていくつか自分も着られそうなものを見つけて購入していたが、まだ実際に組み合わせたことはなかった。

「スカートだけなら短めのを選ばいいからすぐ見つかったけど……だ、大丈夫かな？」

汐野学園の校則には『女子生徒の制服のスカート丈はひざ下10cmからひざ上5cmまでとする』とあるが、一部の生徒はそれを守っていない。

樹里の場合はサイズがないので特注だったが、それでもひざを全て覆うことはできていなかった。

今用意したスカートはそれよりもさらに短く、脚部の露出がかなり広くなっている。

「あとは……ニーソか。これもはくの初めてなんだよな……んしょ」次に彼女は、ひざ上までを包む長い靴下を装着する。これにより脚部の露出部分は10cmに満たなくなった。

「絶対領域できた……。なんか変な感じだあ」靴下とスカートの間に生じた空間を見ながら納得する樹里。

芽衣のように整ってはいないものの、自分でもあの服装ができたという事実は彼女を安心させるのだった。

翌日のこと。

たつぷり9時間は寝た瑞奈はタンスを開け、本日着ていく服を選んでいた。

「動きやすいのがいいのかな、それともかわいいのがいいのかな……」

彼女は樹里とは逆の理由で着られる服が限られているが、樹里ほど困ってはいないようだ。

迷った末に選んだのは、薄手のキャミソールと七分丈のレギンスだった。

「キャミソールなんてあんまり着ないけど……似合ってるかな？」期待と不安を抱きつつ、瑞奈は太陽が強く照りつける外へ出かけてゆく。

「こんにちは。……涼しい！」

「いらつしゃい。……お、今日はなんだか印象が違うね」

瑞奈より先にカフエに着いた樹里を迎えたマスターは、いつもと違う雰囲気の彼女に尋ねていた。

「わかります？　ちよつといいの見つけちゃって、初めて組み合わせてみたんです。……似合ってますか？」

「ああ、とても似合っているよ。スタイルが強調されてて、いいと思う」

「た、例えば？」

「例えば……か。その長い脚とかかな。あと、全体的に細く見える気もするよ」

「そう……ですか？」

「あとは……さらに胸が大きく見えるが、どうしてだろうな」

「胸……。ああ、今日はあれ巻いてないからですね」

樹里はその大きすぎる胸を目立たせないよう、普段はさらしをきつく巻いている。

それでも隠し切れないのだから、その大きさは相当のものであると思われる。

「それで、今日はこれから何かあるのかい？」

「あつ、はい。みずにゃんの息抜きに付き合っんで、ここで待ち合わせしてるんです」

「そうなんだ。しかしあの子もがんばるよな。一日の半分は勉強してるんだってね。キミはどうなんだい？　瑞奈ちゃんと同じところ狙ってるんだろ？」

「私ですか？　……正直、今の私ならこの調子でも聖浄には入れると思います。でも、私自身はそこに入りたいわけではなくて、もっと自分をさらけ出せるようなところに行きたい……」

「なるほど。ん？　ということとは、その聖浄というところに入れっ  
て言ってる人が別にいるのかな？　キミ自身が狙ってないのなら」

「はい。そう言ってるのは私の母なんです……母は私をそこに合

格させるために今まで育ててきたようです。でも、最終的に聖浄に合格するのであればその過程は問わないとも言っていました。だから私は通いやすい高校を選び、学校では優等生を演じながら遊び歩いていたんです。もちろん、成績は常にトップでしたけど」

「……それでキミは、どうしたい？」

「さっきも言ったけど、入りたいわけではない……いや、行きたくない。もっともっと遊びたいし、自分を偽りたくない。それに、私は人と人のつながりを蔑ろにしたまま今まで過ごしてきたので、つながりを大事にしたいんです」

「なるほど、そういうわけか」

「はい。そこに行ったところでどうせ以前の私のような人間ばかりじゃないというのは容易に想像できます。……例えばここに近い牧浜なら、きつといるいろいろなタイプの人がいると思います。そういう人たちのつながりを持ちたい……！」

「大丈夫だ。キミならできるよ」

「でもっ！ そのためには母を説得しないと……」

「その必要はない。言ってしまうえば、お母様はキミが聖浄に合格さえすればいいわけだ」

「は、はい……」

「だったら、聖浄に合格すればいいだけの話。出来るだろう？」

「それは出来ますけど……それじゃ……」

「だから、合格『だけ』すればいい。聖浄以外のほかの大学も受けてそこに合格し、実際に通うのはそちらにすればいい。そうすればキミは聖浄に合格もするし、自分の行きたい大学に行けることになる。違うかな？」

「あっ……！ そうだ、何も『行け』とまでは言っていなかった気が……」

「やはりか。お母様はキミに合格してほしいのであって、入学しろ通学しろというのを強要はしていない。どんな形であれ合格さえしてしまえば、お母様も何も言わないだろう」



「そう……。そうよ！ 私は聖浄に合格だけすればいいのよ！ 行かなくてもいいって考えが何で今まで出てこなかったんだろ……」  
樹里はマスターに教えてもらうことで、ようやく自分の進みたい道を確立することができた。

母親の望みである聖浄大学には合格するが、実際に通う大学は別のところにしてしまえばよかったのだ。

「なーんだ、そうと決まれば悩む必要もないや！ マスター、チョコパフェといちごパフェひとつずつ！」

「か、かしこまりました。2つも食べるの？」

「はいっ！ あ、気にしないでください。栄養は全部ここに吸い取られちゃいますから」

胸を親指で示しながら、笑顔で答える樹里。

夏の日差しにも負けないほどにまぶしい彼女の笑顔は今まで誰も見たことがないし、本人も同じことを思っていた。

「最高の笑顔だね、気に入った。腕によりをかけて作ってくるから待っていてくれ。……っと、いらっしやい」

マスターが奥のキッチンに引込もうと後ろを向くと、ドアの開く音とともに瑞奈が来店した。

「あつ〜い……。あつ、ジュリーちゃん。待たせちゃった？」

「ううん、大丈夫。そんなことより、相変わらずちっちゃくてかわいいねえ」

「ふええっ!？」

「ほらほら、隣座りなつて！ あつはははは！」

「ど、どうしたの？ いつにも増してテンション高いね……」

「そう？ なんか嬉しくなっちゃってね」

「いいことでもあったの？」

「うん、とつても！ あつはははは！」

「えへっ。こつちまで嬉しくなっちゃっ」

瑞奈にはなにが樹里をここまで喜ばせているかわからなかったが、その笑顔につられて自分も嬉しくなってきた。

そこにマスターは、樹里の注文したパフェを2つ運んでくる。

「お待たせいたしました。チョコパフェといちごパフェでございます。ごゆっくりどうぞ」

「わっ、2つも食べるの？」

「うんっ！ いやいや、おいしそ〜！」

「何があつたか知らないけど、今日は楽しくなりそう。えへっ、ジュリーちゃんを誘ってよかったな」

樹里は終始笑顔のまま、目の前にあつたパフェを2つともぺろりと平らげた。

体が大きい事を気にしている彼女だが、その理由は単純に一般的な成人女性が一日に摂取すべきカロリーを超えているからであり、ある意味自業自得と言える。

昼食を終えた2人は、これからの動きを話し始めた。

ちなみに、樹里はパフェを2つ食べたあとにも別に昼食としてランチメニューを注文していた。

「みずにゃん、どこ行こっか。ていうか、どこ行きたい？」

「えっとね、お買い物がしたいな」

「買い物……ねえ。じゃあ、ちょっと遠いかも知れないけどベイサイドアベニュー行ってみる？」

「うん！ 最近行ってなかったから、ちょうど行きたかったの」

「じゃあ決まりね。マスター、ごちそうさまでした！」

「ごちそうさまでした。行ってきます！」

「ああ、行ってらっしゃい」

マスターに別れを告げ、自転車に乗り込んだ2人。

夏の日差しを受け、サドルがすっかり熱を持ってしまっていた。

「うっわー、暑いね……」

「うん……」

日差しを避けるようにゆっくりと進んでいたが、信号で足止めを食らってしまっ。

「あーもう、こんな時についてないな」

「……あれ？ 爽太くん？」

辺りを見回していた瑞奈は、同じように足止めを食らっている爽太を発見した。

爽太も瑞奈たちを見つけると、彼女たちに近づいてくる。

「よー！ チビ奈にジュリーじゃねーか！」

「やっぱり爽太くんだ！ 久しぶりだね！」

（うわっ！ ちょ、爽太くんじゃん！ うわわわ、なんでこーゆー服着てる時に会うかね！？）

「どうしたんだ2人して？ ……つーかジュリー、お前ずいぶん大胆なカツコしてんのな。その、もともとでけーのがさらにでかく見えるみたいな」

「うんうん！ すっごいよね！ あこがれちゃうなあ、わたし」

「な、なによお。そんな見ないでよ……」

「い、いや！ チビ奈は……そう、でかなくていいんだよ。うまく言えねーけど、お前がでかくなっちゃったらチビ奈じゃなくなっちゃまうじゃねーか……ってちげーよオレ！ あーもう、自分でも何言ってるかわかんなくなってきた！」

「……？」

しどろもどろになりながら説明する爽太だが、瑞奈には全く通じていない。

そんな爽太を見かねた樹里が助け舟を出した。

「そのままのみずにやんでいい、って言いたいんでしょ？」

「そう！ それ！ そのままでいいってことだよ！ そ、それに……」

「それに？」

「で、でかくなっちゃったら……オレに、つ、つり合わなくなっちゃまうだろ？」

「ふええっ！？ つ、つり合っつてどういこと……？」

「だーっもう！ 言わせんな、こっ恥ずかしい……。んで？ 話戻

すけど、どこ行こうとしてたんだ？」

「えっとね、わたしの気分転換にジュリーちゃんが付き合ってくれてね、ベイサイドアベニューに行こうって事になったの」

「そっかあ。いいなあ……。それ、オレも行っっていい？」

「えっ！？」

爽太の申し出に驚いた樹里は不可解な声を出したが、爽太は気にせず話を続ける。

「ちょうどオレも買い物が終わっちゃまってヒマだったんだよ。お前らがどんなところ行くのかつても興味あるし」

爽太は2人からゆっくりと視線を逸らしつつ、続ける。

「だからさ……。連れてってくれよ。いいかな？」

「うん！ いいよ！ えへっ、爽太くんと一緒にどこか出かけるのってすごく久しぶりだね」

「……」

瑞奈は爽太の同行を許可し、3人で目的地まで行く事になった。しかしこの時から、樹里の心の中に少しずつ黒いものが渦巻いてきていた。

（なんだよみずにゃん、だったら最初から爽太くんを誘えばよかったじゃないの。私が風間くんのこと好きだって知ってるでしょ……？）

爽太は徒歩だったため、2人は自転車を降りて彼のペースに合わせることにした。

瑞奈と爽太が隣り合わせになり、樹里はその一步後ろから追従する。

結果的に樹里は、前の2人が楽しそうにおしゃべりしながら歩く姿を見せつけられている形になっていた。

その光景は、樹里の心をゆっくりと、しかし確実に傷つけていく。

（うざい……。うざい！！ あてつけにしても酷くね……。？ ねえ、みずにゃん……）

それから一時間弱してから、一行はようやく目的地であるベイサイドアベニューに到着した。

手ごろなものから高価なものまで一度に揃えることができるため、幅広い層に人気のショッピングモールである。

樹里は相変わらず、楽しそうな2人を一歩引いたところから見守っている。

爽太と合流してからの瑞奈はずっと彼と話をしており、樹里とは目も合わせることもなかった。

まるで、自分が誘ったという事を忘れていくかのように。

初めから、爽太とだけここに来たかのように。

(……ああ、そういうことなんだね、みずにゃん。爽太くんが来たから、私はもうどーでもいいってことね)

樹里は意を決し、2人に切り出した。

これ以上、楽しそうな2人を見ている事が出来なくなったのだ。

「あのさ、2人とちよつと……いいかな？」

「なあに？ ジュリーちゃん」

(……！ 『なあに？』じゃねーっつ……！ 私を誘ったのはあんた！ 私はあんたの都合に合わせてるの！)

「えつと……私、お母さんが心配だから帰ってあげなきゃ……」

「え？ お前の母さんがどうかしたのか？」

「そ、そーなのよ。私のお母さんね、ちよつと前に倒れちゃってさ、無理とかさせらんないのよねー」

「そうだったな。じゃあ早く帰ってやんねーとダメじゃん」

「……ごめんねジュリーちゃん。わたしのために無理して出てきてくれたんでしょ……？」

「う、うん。それじゃまた今度ね。ばいばーい!!」

樹里は精一杯の笑顔を作り、逃げるようにその場を去った。

自転車をこぎながら向かった先は、自宅ではなく行きつけのゲー

ムセンター。

彼女の目が、変わった。

「今から私と当たる人は運が悪かったと思ってあきらめることね。今の私は……手加減なしよ」

樹里がよくプレイする対戦格闘ゲームは、さすがに以前ほどの賑わいはなくなつたにしろ今でも数人が列を作っていた。

今は夏休みということもあり、学生と思われる人が目立つ。

彼女が台の前に座ると、場の空気が一変した。

台の向こうの相手は、すでに5連勝を成し遂げていたようだ。

しかし樹里はそんな相手をもともせず、何もさせずに勝つてしまふ。

その後も挑戦者は次々と現れるも、誰一人として樹里には敵わない。

一時間ほど経過し、樹里が10連勝を成し遂げた頃、台の向こうから大きな音が聞こえてきた。

どうやら、今回の挑戦者が負けたことに腹を立てて筐体を殴りつけたようだ。

そして相手は、向かい側に座っている樹里に向かって因縁をつけてきた。

「# ン+<?》!）¥ （訳：何故そのような事をなさつたのですか？）」

「えーマジ台バン!? きも〜い! 台バンが許されるのはあ、幼稚園までだよ! あっはははははははは!」

だが樹里は一步も引かず、逆に相手を煽るように対応する。

「@† 「? （訳：非人道的行為ですのでやめていただく存じます）」

彼女は、この不良の操る言葉を全く理解できていない。

しかし、敵意をむき出しにしているという事は察知したようだ。

見下ろされているは不利だと感じて立ち上がると、逆にこちらが

相手を見下ろす形になった。

「なんですか？ 負けたからってリアルファイトですか？」

「\$、% (訳：人をコケにするのも大概にしたらどうです)」

「なに言ってるかわからないわよ、そんな前衛的な言語使われても自分の国の言葉で話さない」

「> ?”ふ、/ (訳：静かにしてください。外へ出ましよう。思い知らせて差し上げます)」

いきり立った不良はわめき散らしながら、樹里の腕を乱暴に掴む。だが樹里はしめたと思い、逆に相手の腕をひねり始めた。

「||\x &%—^\*(訳：これはとても痛みます)」

「あらら？ ちょっと腕ひねられただけでおしまい？ で、どこに連れてつてくれるんですかあ、おにーさん？」

ふざけ半分に言いながらも、その目つきはしゃがみ込んだ不良に畏怖の念を抱かせるには充分だった。

すっかり縮こまってしまった不良はもちろん、それ以上何も出来なかった。

「つまんないの。じゃ、店員さんに怒られてきなさい」

そう言つと樹里は不良の服の襟を掴み、そのまま引きずりながら店員を探す。

すると、店員の方から話しかけてきた。

「どうかなさいましたか？」

「あの、この人さつき筐体叩いてたんで、連れてきました」

「は、はあ……」

「あと、いきなり腕掴まれたんですけど、そこは別に気にしてないんで」

早口でまくし立てると、樹里はそのまま店をあとにした。

「ちよつとやりすぎちゃったかなあ……。……う」

店の前に止めてあった自転車に乗ろうとした彼女は、突然強い空腹感に襲われた。

「おーなーかーすーいーたー！ …… またカフェ行こつと」

「いらつしゃい。いや…… おかえり、かな？」

本日二度目となるカフェは、相変わらずの様子だった。相変わらずなのは店内の様子だけではなく、顔ぶれまで普段通りだった。

……樹里にとって、その普段通りの光景は望ましいものではなかった。

特に、ほんの数時間前まで行動を共にしていた2人にだけは会いたくなかったはずだ。

だが、そんな彼女の望みは残酷にも打ち砕かれる事になる。

そこには、買い物を終えたと思われる瑞奈と爽太が、別れた時と同じように仲睦まじく会話に花を咲かせていたのだ。

(な……なんているのよ……！ 心を落ち着かせるためにここに来たつてのに……！)

マスターは当然、彼女らに何が起こったのかを知る由もない。

それどころか、樹里以外には何も起こっていない。

なので瑞奈は、樹里が来たのならば自分たちの席に誘うはずだ。

その流れは、本当に自然に行われた。

「あつ、ジュリーちゃん！ お母さん、大丈夫だったの？」

「……う、うん。ていうかいなかった。今日も仕事みたい」

樹里は必死に感情を抑えつつ、できるだけ自然に笑顔を作って返事をする。

(それで満足でしょ……！？ もう話しかけてこないで……！)

これ以上は抑えられない。樹里はそう確信していた。

少しでも揺さぶられたら、その感情はダムが決壊するがごとく流れ出てしまう。

……だが、目の前の無邪気な少女は、屈託のない笑顔で再び樹里に話しかける。

「ジュリーちゃんにね、おみやげ買ってきたの」



そう言いながら、瑞奈は傍らの小さな箱をテーブルに乗せた。

「はい、これ！ 『シルバーメイデン』のプリンアラモード！ ジュリーちゃんが喜ぶかなって、2人で選んだの。ね？」

「ん？ あ、ああ。そうだな」

（2人で選んだ……！？ どこまで人の心をえぐれば気が済むってんだよ……！？）

自分の言葉で、目の前にいる友達のことをどれだけ傷つけているかなど、瑞奈にはわかるはずがない。

そしてついに、次の言葉で樹里は……壊れた。

「それでねそれでね、また2人だけで行こうなって約束し……ふえっ？」

バアアアア……ン。

その声は、樹里がテーブルを力任せに叩いた時に生じた音によりかき消された。

瑞奈の顔からも笑顔が、消えていた。

ふと見上げた樹里の目は、自分たちと交流を持つ前の誰も寄せ付けぬ冷たいものとなっていた。

そして、あまりにも冷たく言い放つ。

「どうでもいい。心底からどうでもいい。……いつまでも色ボケやつてな。この肉便器」

場の空気を一瞬にして凍りつかせてから、樹里は大股で店を出て行った。

あまりに突然の出来事だったため、マスターですら口を挟む事が出来なかった。

「ジュリー……ちゃん……？ どうして……？」

瑞奈は震えていた。悲しみよりも、恐怖の感情が勝っているよう

だ。

爽太もまた、この状況を把握するのに時間がかかっている。

「くそ、どうなってやがる！？ おいチビ奈！ ジュリーとなんかあったのかよ！？」

「う……………」

爽太が尋ねるも、瑞奈は返事をする事が出来なかった。

「はっ、まさかオレのせい！？ ホントは今日、お前ら2人で遊ぶ予定だったのにいきなりオレが入っちまったからジュリーの機嫌が悪くなった……………のか？ なあチビ奈！」

「やめるんだ、爽太くん」

震えが止まらない瑞奈に掴みかかろうとしたところに、マスターが割って入る。

「瑞奈ちゃんは今、ひどく気が動転している。まずは落ち着かせないと何にもならないが、落ち着くまで時間がかかる。そして、キミ自身も落ち着かなければならない」

「はっ……………あぶねえ、オレはまたチビ奈を……………」

「そうだ、それでいい。まずは深呼吸だ、いいね。瑞奈ちゃんのこととは気にするな」

マスターは爽太の目を見据え、落ち着かせる。

その勢いに気圧されたか、爽太も深々と息を吐いた。

「ふう……………おっけ」

「よし。では改めて聞くよ。いったい何があったんだ、昼から今の間に」

「オレの方が聞きたいけどさ、心当たりはないわけでもないんだ」

「さっきキミ自身が言っていたね。キミが樹里ちゃんと瑞奈ちゃんに付き合ったからではないか……………」

「だけど、それでなんでジュリーがキレるかわかんねーよ」

「原因がキミにあるかも知れないなら、キミはその原因を突き止め、解決せねばならない。わかるね？」

「はっ、はい。自分で蒔いた種は自分で刈り取れ……………ってことだよ

な

「そうだ。瑞奈ちゃんはここで僕がしっかりと見ているから、行ってくるんだ」

「わかった！ マスター、頼んだぜ！」

そう言い残し、爽太はカフェから出ていった。

「……これも青春、か」

樹里は、カフェの裏手にある小さめの公園にいた。

公園とは名ばかりの空き地のような場所で遊具はなく、ただベンチが二基と水道が用意されているだけであった。

しかし近くにはコンビニや自動販売機もあるため、ここで一息入れている人も少なくはない。

樹里は近くの自動販売機で間違って買ってしまった熱い缶コーヒーを飲みながら、昂ぶった気持ちを少しずつ静めていた。

「あつっ……。これ。なんで夏の暑い盛りはまだあったかいの売ってんのよ……。まあ、周りが見えてなかった私も悪いんだけど……はあ」

時刻はようやく午後5時をまわったところだが、周囲はまだ明るい。

「どうして……。私あんなこと言っちゃったんだろ。しかも気になる子の目の前で……」

「……ジュリー？ ジュリーか!？」

「はっ!? 風間くん!？」

深いため息をつきながら自分の行動を後悔している彼女の前に現れたのは……。爽太だった。

樹里は大慌てで、彼に視線を向ける。

「どうして……。ここにいてわかったの？」

「近いところから探してたんだけど、いきなりここにいるとは思わなかったぞ」

「……そう」

「とりあえずさ、落ち着いて話そうぜ。隣、いいだろ？」  
「う、うん……」

自分の隣に爽太を座らせた樹里は、落ち着かない様子でちらちらと爽太を見ている。

その様子に気づく事のないまま、爽太はゆっくりと切り出した。

「で、さ。単刀直入に聞くけど、いったいどうしちまったんだよ」

「……私って、まだまだ子どもだなんて思った」

「え……？」

自分の考えていない回答が返ってきたので、爽太は目を白黒させた。

樹里は今日の事を思い出しながら、少しずつ話を進めていく。

「私ね、あなたに嫉妬してたのかも知れない。みずにはんは私を誘ったはずなのに、風間くんに会ったら私のことなんかほったらかしで……さ。私、なんのために呼ばれたかわからなくなっちゃったの」

「やっぱりそうだったのか！ オレ、なんか空気読めてなかったな」  
「いやいや！ 風間くんは悪くないよ！ 悪いのは……私だけ。みずにはんにはなんの罪もない。私が勝手に暴走してあの子にひどいこと言っちゃった……」

樹里は傍らの熱いコーヒーを一気に飲み干し、伏目がちになりながらさらに続ける。

「結局、私ってなんにも変わってなかったね。表面上はみんなと仲良くなれたのかも知れないけど、ふた開けてみたらみんなを引っ掻き回してた」

「ジューリー……」

「あははっ。やっぱり私なんて誰とも関わらないで独りである方が似合ってるよね。あはは」

「……ふざけるなよ」

自虐的に笑う樹里に、爽太は釘を刺した。

「えっ？ な、何……？」

「ふざけんなよって言ったんだ！ なんでそう決めつけんだよ、自

分ですよ！」

「だって実際そうじゃない。ついさっき、私はみずにやんの心を酷く傷つけた。そんな事するような奴がどうして他人と仲良くなれるっていうの!？」

「だからっ……! そんなことはたいした問題じゃねーんだよ!

時にはケンカとかもするけど、それを乗り越えればさらに絆が深まっていくんだよ! それが友情だ! 仲間だ! 違うか!? 違うのかよジュリー!？」

「……っ!」

樹里には、今まで友人らしき人間がいなかった。いや、作ろうとしてこなかった。自分は他の者とは違う、そう思い続けてきた。

有り余る才能とそれ以上の努力で、欲しいものは全て手に入ってきた。しかし、たった一つだけ手に入れないものがあつた。それが、友情だつた。

手に入らないのなら、自分には必要のないもの。自分にそう言い聞かせる事で、手に入らない事実を認めなかった。

だから、彼女には友情、そして仲間がわからない。そして、それを信じる事が出来ない。

「いいかジュリー。友情つてのはそんな簡単に壊れたりしないんだ。以前チビ奈と青山さんがひと悶着起こした時も、2人はお互いを信じあふことで乗り越えた。それはお前も見ただろ? だから今回のお前の件も、お互いが腹を割って話し合えば絶対に解決するはずだ!」

「……」  
だから、こうして爽太が友情の大切さを説いても、解決方法を提示しても、彼女には届かない。

「そんなことで解決するなんて、ずいぶん安っぽいんだね。その友情だか仲間だかつてのは」

「だから……違うつての……。じゃあわかった、言い方を変えてやる。ジュリー、お前はチビ奈のこと、信じてたのか?」

「当たり前じゃない。でも素敵に裏切ってくれちゃったよ。それが

友情？ 仲間？ へそで茶が沸くわ」

「……。それじゃ、チビ奈が自分の気分転換にお前を誘ったのはどうしてだと思うよ？」

「私が一番ヒマそうにしてたから？」

「それだけじゃ、大親友だとお互いに思ってる青山さんを差し置ける理由にはならない。……きつと、お前ともつと仲良くなりたかつたんだよ、あいつは！」

「私と……もつと仲良くなりたいたから？」

「きつとそうさ。友情の深さは関わりを持った時間で決まるわけじゃないけど、青山さんや都に比べればお前とチビ奈が関わった時間は明らかに短い。チビ奈は、それを埋めたかつたんだ」

瑞奈がなぜ自分を誘ったのか。

その答えは本人からではなく、爽太から告げられた。

樹里は小さく微笑み、ひと呼吸置いてから言う。

「風間くんはすごいね。いろんな人の気持ちがわかって」

「な、なんだよ急に!？」

「ううん、本当にすごいと思う。どんな勉強したって、人の心なんか読めないもの。私がどう足掻いてもできないことを、あなたはこつと簡単にやつてのけてしまう……」

「ジユリー……?」

「だからなのかな。私が風間くんのことを……好きになったのは」  
「……えっ!?! 今、なんつった!?!」

それはあまりに突然の、そしてさりげない告白だった。

樹里はついに、自分の気持ちを本人に向けて明かしたのだ。

「私、あなたのことが好き。友達とかそんな安っぽい感じじゃなく……一人の男の子として」

「え、いや、ちょ……ええ!?! ま、待ってくれ。こつちにも心の準備つてもんが……」

「そんなの言い訳に過ぎない。回答に窮した場合によく用いられる常套句でしかないわ」

「そんな風に言われても困るんだけど……。じゃあいいよ、そこま  
で言うなら仕方ねー。オレの気持ちも……。明かしてやるっじゃねー  
の」

「……いいわ、聞きましょう」

樹里は息を呑み、彼の次の言葉を待った。

「オレはチビ奈のことが好きだ。お前じゃない。誰にも渡したくね  
ーし、オレもチビ奈以外の奴と付き合う気はねー」

2人の気持ちは、すれ違った。

## 第10章：想いの果てに

「…………そう。ってことは私は、最初から眼中になかったんだ」

「酷い言い方をすればそうなる。…………お前がオレのこと好きだって言ってくれたのは嬉しいよ。でもな、オレは自分の気持ちに嘘はつきたくないんだ。オレはチビ奈のことが、もう片時も忘れられないほど愛しくなっちゃったんだ!」

爽太は顔を真っ赤にしながら、自分の気持ちを全てぶつけた。

「それ、みずにゃんには言ったの?」

「告白はしたけど、ここまで突っ込んだことは言ってない」

「じゃあ、言わなきゃダメだよな」

「…………ごめんね、聞いてちゃった」

「うええええええええっ!?!」

その時…………物陰から、カフェにいたはずの瑞奈本人が出てきてしまった。

「ど、どうして…………」

樹里が何故ここにいるのかを尋ねようとする前に、瑞奈が口を開く。

「ジュリーちゃん、やっぱり爽太くんのが好きだったんだね。」

…………はつきり聞いてちゃった」

「なんで? どうして盗み聞きしたの? ねえどうして!?!」

「ひっ…………。ごめんなさい…………」

「やめるジュリー!。チビ奈が怖がってる」

「いつもこうだよな、みずにゃんって。誰かがこうして守ってくれるから、気にかけてくれるから勇気が持てるんだよね」

「…………っ。違う…………もん…………」

「ど、どこが!? なにがどう違うってんだよ!? 言いなさいよ!」

ほら…………!」

「ジュリー!!! いい加減にしろってんだよ!」



「ちつ。……あんたもあんただよ。こんな子と付き合ってたら、いつか神経すり減らしちゃうよ」

「それでもいいよ。オレは千比奈のことが好きなんだ。そういうところも含めて好きになっただ」

「はっ、おめでたいわ。なんにも見えてないって幸せね。今の私たちの会話を盗み聞きするような子よ？」

樹里の態度が、先ほどの穏やかな様子から一変してしまった。

彼らと交流を持たなかった頃よりもさらに嫌味に、2人を口汚く罵っていく。

（もういい……もういい！ 私は嫌われてもいい！ この2人の絆とやらを強めるためなら、私は悪役にだってなってるよ！）

「恋愛感情は病気と同じだって聞いたことあるけど、本当なんだね。あんたら見てたらそう思うほかないよ。だってバカみたいにお互いにかばいあつてんだもん！ プギヤーツ！！」

「ジュリーちゃん……。くすん……」

「どーしたの？ なに泣いてんのー？ あっはははは！ おっかしー！！」

「おかしいのはてめーだよ、ジュリー」

「あらら？ こっちはおっかなーい。あっはははは！」

「……お前も、泣いてるじゃねーかー！！」

「……？」

「さっきまでの、本心で言ってるんじゃないんだろ？ わかってるよ、そのくらい」

「……なに言ってるのかわからないよ。私が泣いてるだって？ あっははは！ なにそれ、すっごくおかしーんだけどー！！」

声を張り上げ、高らかに笑う樹里は……泣いていた。顔は笑っているし、自分でも笑っているはずなのだが、涙が溢れて止まらない。

「あっ、あれ……？ どうしたのかな……私。あっはは、なんで……こんなに涙が出てきちゃうの……かな……」

「ジュリー、お前はすごいよ。こんな時でも明るく振舞おうとして

る。そして、わざとオレらに嫌われようとしてる……」

「……なんだ、そこまでバレてるんだ。それじゃ仕方ないね」  
どうやら樹里の目論見は、爽太には看破されていたようだ。

樹里が悪役を演じて2人の絆を深めようとしていたこと、そこま  
で見通されていた。

これ以上続けても仕方ないと思ったのか、樹里は観念した様子で  
言葉を紡ぐ。

「私は……私は、あなたのことが本当に好きなの！ きつとこの気  
持ちはみずにやんにだって負けてないはず。なのに……どうして私  
じゃいけないの!？」

流れる涙をそのままに、樹里はありつたけの感情を爽太にぶつけ  
ていった。

「私と仲良くしてくれたみずにやん。その幼馴染だった……爽太く  
ん。みずにやんは、爽太くんとはただの幼馴染だって言ってたよね  
それがなに？ いつの間にこんなことに？」

視線を爽太から瑞奈へと視線を変えると、身長差を活かして見下  
ろすように言い放った。

「……ひどいよ、みずにやん。どうして私から取っちゃうの!？  
何もかも!！」

「ジュリーちゃん……お願い、聞いて！ 違うの、違うの……」  
樹里の迫力に圧され、何も言えなかった瑞奈は、ここに来てよう  
やく口を開いた。

様々な感情が入り混じって今にも泣きそうになっていたが、ひと  
かけらの勇気を振り絞って樹里に言い返す。

「わたしは……本当に爽太くんとはふつうのお友達でいたかった。  
でも……あの時ジュリーちゃんが爽太くんのこと気になるって言っ  
たよね」

「あの時って……カフェでみんなと顔合わせた時の帰り道？」

「そう。ジュリーちゃんがそう言った日、帰ってから落ち着いて考  
えてみたら……わたしも爽太くんのこと考えた時に体が熱くなって

……」  
「ふーん。じゃあもうその時点で好きだったわけだ。で、そんな中で爽太くんに告白された。それが決定的な決め手になったと」

「……うん」  
「じゃあ何。私が見ずにやんに教えさえしなければ爽太くんへの気持ちに気づかなかったと」

「うん……」  
「ま、まあ、遅かれ早かれオレはチビ奈に告白するつもりだったけど。でもなジュリー、お前には告白するつもりはなかった。違っ点を言うなら、そこだ」

爽太は樹里を『友人』、瑞奈を『幼馴染』から『恋人』と想っていた。

樹里は爽太のことが『好き』、だがその爽太は瑞奈のことが『好き』。

瑞奈は樹里のために爽太をあきらめるつもりでいたはずが、自分の気持ちに気づいた時はもう遅かった。

三角関係だったものはいつしか、爽太と瑞奈の結びつきに樹里が割って入る形になるうとしていたのだ。言うなれば、垂直。

「……あつはつは！　なんだよそれ。私……ダメじゃん！　アホじゃない！」

樹里は、日の落ちかけた空を見上げた。自虐的とも取れる発言を続けながら。

「結局はアレじゃん！　出来レース？　爽太くんとみずにやんがくつつくつてのが最初から決まってた？　なにそのクソゲー。私はいくらフラグ立てても意味ないって？　バツカでー！」

彼女は、全てを知ってしまった。どう足掻いても覆せない結果があるという事を、知ってしまった。

完璧主義者である彼女はそれを受け入れる事ができず、気丈に笑い続けていたが、ついに……。

「うっ、ぐっ……。うわああああ〜ん！！！」

樹里が、泣いた。

子どものように、泣いた。

周りもはばかりず、泣いた。

その場の誰も、何も出来なかった。

そのうちに瑞奈も悲しくなつて、もらい泣きをした。

「ひぐつ……。ごめんなさい……。ごめんなさい……」

「はあ、勘弁してくれよ……。オレだって泣きてーっての……」

爽太は自分もつられて泣きたくなつたが、その感情をどうにか抑えつつ、どうするべきかを考えた。

そして、一つの結論を出した。

「くすん……。ふえっ？」

爽太は泣き続ける2人の少女のうち、本当に自分が大切だと思う方を抱きしめた。

「泣くんじゃねーよ、もう。ほら、オレはここにいるから。それに

……。お前は悪くない。どつこも悪くない」

「だって……。だって……。ジュリーちゃんから爽太くんを……。取っちゃおうような事しちゃって……」

「違う！ オレがいつジュリーのものになつた！？ 誰のものにもなつちやいねー！」

「でも……。ひぐつ……」

「でもとかそんなのどうでもいい！ ……じゃあ、今からオレはチビ奈……。いや、瑞奈のものだ！ それでいいな！？」

「爽太くん……。うれしい……。けど、ジュリーちゃんが……」

少しずつ落ち着きを取りもどしつつある瑞奈を抱きながら、爽太は樹里へと視線を向ける。

彼女はすでに泣くのをやめているが、その目は虚ろだった。

「ははっ。もういい。私は……。初めからこの恋愛戦争に参加なんかしてなかつたんだ」

その口がかすかに動き、何かを言っているようだったが、2人には聞こえなかった。

樹里は2人が聞いていようがいまいがお構いなしといった様子で、ぼそぼそと呟き続ける。

「いや、参加しているつもりになってバカみてえに暴れてるだけだった！ あーっはっはっはっはっは！！ バーカバーカ、私のバーカ！！」

だが、その呟きはいつしか叫び声に似たものになった。その姿はあまりにも哀れで、見ていられない。

爽太はそんな樹里に近づくべく、抱いていた瑞奈からゆっくりと離れる。

「なっ、なによ？ こんな負け犬に……今さらどんな情けをかけようっていうの！？」

「……………」  
何も言わず、樹里の背後を取る爽太。そして……背中から、彼女を抱いた。

「……………!?!」  
思いがけない行動に、樹里は一瞬脚の力を失い、その場に跪いた。爽太はなんとかその体を離すこともなく、転倒を防いだ。

「ジュリー……ごめん。オレは、お前の気持ちに伝える事はできない。応えられないけど……痛いほどよく伝わった。オレなんかを好きになつてくれて……ありがとう」

「あっ、あっ……………」  
「……………しっかりしてくれよ、ジュリー。オレけっこういい事言ったんだぜ？」

「……………ご、ごめん。驚いちゃって……。さ、最後に一つだけ、お願い聞いてもらっても……………いい？」

「ああ、いいぜ。お前と付き合えてこと以外ならな」

「ははっ、わかってるよ。……………これのお返しすることで、私にもあなたを、抱きしめさせて。それで……………頑張つて吹っ切るから」

「よし、わかった！ 全力で飛び込んできな！」

「……………っ！」

樹里は、その大きな体を全て彼に預けた。爽太は倒れそうになりながらも、彼女の最後の望みを受け止めてやるのだった。

「爽太くん……。私……。私……。あなたのことが本当に好きだった！ 私だけのものにしたかった！ でも……。みずにゃんのほうが好きなら……。私は身を引くしか……。！」

「ごめん……。ごめんよ、ジュリー。オレも、お前の気持ちに伝えてやれないのが……。！」

「いいの、謝らないで。私が身を引けばいいんだから……。でも、これだけは約束して……。これからはいいお友達として、今日のこととか全部なくして、私と付き合っ……。お願い！」

「わかってるよ。お前は……。オレの最高の友達だ。何物にも変えられない、仲間だ！ オレは、こんなにかわいくて……。素敵なお前と友達になれて、本当に嬉しく思ってるんだからな！」

「ありがとう……。！ ありがとう……。うっ……。うっ……。！」

樹里は爽太の体に顔をうずめ、声を殺して泣いた。

そして……。爽太はそんな樹里の頭を優しく撫でた。

こんなにも強く、こんなにも優しい樹里が、初めて人前で見せたであろう、涙。

これまで泣くまいとしてきた爽太も、彼女の涙には敵わなかった。  
(ジュリー……。もし違った形で出会っていたら、オレたちは……。)  
夕焼けは、3人を優しく照らした。

「いらっしやい。……。おや、樹里ちゃんか」

「はい。……。まだやってますよね？」

「ああ。あと数分で閉める予定だったけど、キミが来たなら少し延ばそうか」

「おい！ オレらまだいんのに閉めるつもりだったのかよー!?」  
店の奥から軽い声が聞こえてきた。

その声の主は、カフェの常連の中でも最古参組にあたる青年……

秋野圭輔だ。

他には都の彼氏である古賀潤と、樹里が会ったこともない人物がいた。

「あ、こんばんは……」

「む！？ おつ、おい圭輔！？ なんだあの子！ あの子からん子も知り合いか！？」

「落ち着けて、翔司。あの子は都ちゃんの友達のこと……えっと……」  
「樹里ちゃんだ。ここに来るようになったのは最近だから、お前が知らないのも無理はない」

「あー、けしからんってもしかして私の胸見て言ってます？」

「げ、聞こえちまったか！？ ……ごめん、つい」

「いいんですよ……。胸がいくら大きかろうが、ダメなもんはダメなんだから……。あはは……。つく、ひつく、うっ……」

カフェに入ったことで安心したのか、樹里は再度涙を見せ、力なくカウンター席に座る。

そんな彼女を気遣うように、マスターはそつと声をかけた。

「この目で見ただけではないからわからないが、キミにとって非常に辛いことがあったのだろう。もしよければ話してみしてほしい。それで落ち着くこともあるだろうから」

「……はい、ありがとうございます……」

樹里は、自分の中に溜めていたものを一気に吐き出した。

話が始まるまでは興味本位で見っていた後ろの連中も、次第にその話に真剣に耳を傾けていた。

「さつき……私は好きな男の子に告白して来ました。人生で一番勇気を使ったと思う。でも……」

「キミの気持ち、その男の子には伝わらなかった……のかな」

「ひでー奴だな、そいつ。どんな事情があったか知らないが、こんなけしからん子をソデにするなんざ、男として最低だ！」

「同意しておくが言葉を慎みやがれヘタレキング。……いいぜ樹里ちゃん、続けてくれ」

「……はい。でも、その子にはもうすでに好きな子がいたみたいで、私のことなんか眼中にもなかったみたいで……」

「あちゃ、もういたのか……」

話しているうちに落ち着きを取りもどしつつある樹里はうつむくのをやめ、全員に顔が見えるようにした。

その目は真つ赤に染まっていて、見ている方にも涙を誘ってくる。

「そりゃ、私が彼と過ごした時間は彼を好きになった子に比べると短い。でもそんなの関係ないでしょ？ 大事なのは時間の長さじゃなくて質。もしくは密度。そして、彼への思い」

「樹里ちゃんは、ホントにそいつのことが好きだったんだな……」

「はい。こんなに誰かを好きになったのは……生まれて初めての経験でした。どれだけ勉強して知識をつけても、好きな人に想いを伝えるということは……実らなかった……」

「……ちよつといいかな、樹里ちゃん」

それまでほとんど口を挟まず聞くだけに徹していたマスターが、ようやく口を開いた。

「頭のいいキミには回りくどい言葉は必要ないだろうからこう言う。……この結果を受けても自暴自棄にだけはなってくれるな、と」「自暴自棄に……なるな？」

「ああ。キミのように今まで全て自分の実力で乗り越えてきた子が一たび壁にぶつかり、大抵は人並み以上に挫折感を味わうものだ」「私は今その挫折状態にあるから、変な行動するなってことですか？」

「まあ、そういうことになる。……前にね、いたんだよ。どうしていいかわからなくなったのか、手首切っちゃった子が。しかもこの店の中でやるもんだから、さすがの僕も……」

マスターはふと自分の右手を眺め、ため息をついた。だが樹里には、その行為が何を意味するかを推し量る事は出来なかった。

「まあいいか。ともかく、大切なのはここからだ。どうか気持ちを切り替えて、気持ちを伝えられなかった子と後腐れを残さないよう



にして欲しい」

「大丈夫……です。私……そんな弱い女じゃ……ないから……。約束だっと思ってきました。明日からはいいお友達として、やり直そうって……！」

必死に強がってみせる樹里だが、体の震えまでを抑えることは出来なかった。

圭輔、潤、翔司の3人は目配せをしてからゆっくりと立ち上がり、涙をこらえている樹里の周りに集まり始める。

そして……代表して圭輔が、彼女の震える肩に手を置いた。

「えっ……？」

「泣くんじゃない、樹里ちゃん。キミはやれるだけの事を全てやった。それでいいじゃねーか」

「そうだぜ！　ちゃんと自分の気持ち伝えられたんだろ？　悔いなんか残ってねーだろ！？」

「長い人生、うまくいかない事だつてあるさ。でも、それに直面した時にどう立ち回れるかが重要なんだぜ」

「……はい。その通りだと……思います。今回はうまくいかなかったけど、全てを出し尽くしたから悔いはない……。そして、次こそは……と思えるようになりました。私、またひとつ成長できた……」

樹里は以前『友情』を学んだ。そして今回、新たに『失敗』を学び取った。

これまでただの一度も失敗をした事がなかった彼女は、当然ながら壁にぶつかる事もなかった。

そのため『失敗したから次こそは』という観念自体が、初めから備わっていなかった。

再チャレンジなど失敗を繰り返すような弱い人間の逃げ道、もしくは言い訳が何かとしか思っていなかった。

だが彼女は今、こうして失敗を味わっている。生まれてから初めて、自分の望む結果が得られなかったのだ。

「そろそろ何か飲むかい？ あつたかいのでもいいよ」

「…………ぐすつ。…………はい。それじゃあ…………ダージリンティーで」  
「かしこまりました」

時間はすでに夜の7時を回っており、本来ならばこのカフェも閉店時間を迎えているはずだった。

しかしマスターは、失意の樹里のために営業時間を久々に延ばしたようだ。

「えっと、樹里ちゃん…………でよかったかな？」

「は、はい…………。あの、あなたは？」

「オレは古賀潤。都ちゃんと付き合ってる奴といえばわかってくれるかな。そうそう、こないだあの子を本須原に連れてってくれたんだってな。すげー喜んでたよ、ありがとな」

「あなたが潤さん…………。ちょうどよかった。私、前からあなたに聞こうと思ってた事があるんです」

「なんだい？ なんでも聞いてやるよ」

「あなたはみやびよんの彼氏…………でいいですよね」

「あ、ああ。そうだけど、それが？」

「…………では、どうして稲村くんがみやびよんと仲良くしてるのを黙認してるんですか」

真っ赤に腫れ上がってしまった目をまっすぐに向けながら、潤に尋ねる樹里。

潤はその気迫に若干押されながらも、自信たっぷりにこう返すのだった。

「それはな、都ちゃんがオレのことを愛してくれてるからだ！」

「うっひょお！ 愛してくれてる発言いただきました！」

「黙ってる、恥ずい！ ……コホン。あの子は、確かに竜造くんのこと好きだ。でもオレの事はそれ以上に好きでいてくれる。そういうことだ」

「じゃあ…………取られるとかは考えてないんですか？」

「ああ、取られたらそれまでだ。オレの力が及ばなかった、その程

度のこった。竜造くんとも、都ちゃん本人ともそういう取り決めでやってるしな」

「なっ……!?!?」

「あきらめな樹里ちゃん。こいつは言ったからってはいそうですかと聞くようなヤツじゃない。それだけ確固たる信念があるんだ」

「間違ってる……。間違ってるよそんなの!　こないいい加減な人が……。あんなに純情でいじらしいみやびよんの彼氏だなんて……。!」

「はは……。言ってくれるなあ、ずいぶんと」  
ため息交じりに潤が漏らすと、樹里は立ち上がりながら彼を鋭い目で見下ろす。

「ああそうよ、言ってやるわよ。あなたはいいい加減よ。みやびよんをいよいよにたぶらかしてるだけよ」

「へえ。まるでオレが、都ちゃんをだまくらかしてるとでも言いたそうだな」

「違うの!?　あなたはみやびよんの心を弄んでいるだけよ。人を好きになるってのは、その人を一生かけて守っていくだけの覚悟を持ってすることですよ!?　それがあなたは何?　付き合ってる相手がいて、その相手が離れたら追いかけないの?　……。ふざけんじやないわよ!　私なんか、その資格すらないってのに……。!」

潤に向けられる、樹里の怒声。彼女の目にはまたも、大粒の涙が浮かんでいる。

見かねた圭輔は、必死に涙をこらえる樹里の両肩を掴み、自分の正面に向けさせる。

彼女は久々に目線を下げないまま、他の誰かと向き合うことになった。

「落ち着くんだ、樹里ちゃん。こいつのことをわかってないのはキミのほうだ」

「ぐすっ……。なんでよ!?　私が何をわかってないっての!?!?」

「潤のヤツが、都ちゃんと2人つきりになったのを見た事があるか?」

「あるわけないじゃない。あの人と私は今日が初対面だもん」

「じゃあ仕方ないか……。2人つきりになった日にやそりやあもう、筆舌に尽くしがたいスイーツな空間……。いや固有結界を作り出しちまうんだ。そうだろ？」

「こ、固有結界って……。ま、まあ、そんな感じだよ」

「そうそう！ あーあ、オレも音遠ちゃんともっと仲良くなりてーぜ」

圭輔を筆頭としたこの常連3人は、緊迫した店内の空気を一気に軽くした。樹里もその雰囲気を感じ取り、少しずつではあるが落ち着きを取り戻していた。

「で、だ。話を戻すけど、たとえどんなにキミが納得できなくても、潤と都ちゃんの間には理屈じゃ計り知れないものがある。そこんとこを、キミはわかってないと言ってるんだ」

「……。じゃあ、ものわकारいの悪い私にもわかるように教えて下さいよ。その理屈じゃ計り知れないものを」

「いいぜ。簡単に言うなら……。心、だ。もっと言えば、絆だな」

「心……。絆……。？」

「そうだ。2人の間は強い絆で結ばれている、ということだ」

「どんなご大層なことを言ってくれるかと思えば……。馬鹿馬鹿しい。心？ 絆？ そんな抽象的な言葉で取り繕うなんて、馬鹿げてる」

真剣な表情で言い放つ圭輔だが、樹里には伝わらなかつたようだ。「じゃあ何？ 私がふられたのはその絆とやらのせい？ 私との間にはそれがなかつたっての？ それで全部片付けられるの？ つくづく馬鹿げてる」

「バカらしいと思うならそれでもいいよ。恋愛ってのには、いくら理屈をこねても納得できねーのがあんだ。……。そうだ、翔司。お前にも見せ場作ってやるから代われ」

「えっ、オレ！？ つつても、何言えばいいんだよ？」

「お前には難攻不落と呼ばれたお兄ちゃん大好きっ娘な音遠ちゃんを射止めたっていう実績があるだろ？ それを絆だかそーゆーのに

関連付けて語ればいいんだよ。ほれ、目立ってこい！」

突然、話の主役に立たされた翔司は、潤と場所を代わって樹里の隣に座った。

「初めてだと思うから自己紹介しとくよ。オレは森野翔司だ。よろしく」

「……どうも」

「いきなり話振られたからちと戸惑ってるけどさ、樹里ちゃんはなにが納得できない？」

「全てです。恋愛を絆などといういかにも抽象的なものに置き換えるという考えにも、あなたたちにも」

「おーおー、こりゃ手ごわそうだ。でもな樹里ちゃん、人を好きになるってのには理由はいらねーんだよ」

「……どうしてですか」

「それは、人間誰しもが心に秘める欲求だから。誰かと繋がってた、誰かを大切にしたい、誰かを愛したい。……ってのにはみんな、理由なんてない」

「違う。私はあの子たちと友達になったとき、この子たちのことをもっとよく知りたいという理由で友達になったんです。そのおかげで、あの子たちと仲良くなれた。これを理由と呼ばずして何と云うんですか」

この言葉で、圭輔が動いた。樹里の隣に座っていた翔司を押しつけながら。

「それが本心だとしたら、最低だな」

「なっ……！？ なにを根拠に!？」

「……理由の存在する関係は、いつか消滅する」

先ほどまで外に出ていたのか、姿を見せなかったマスターがぼつりつつぶやいた。

「マスター、サンキュ。今マスターも言ったけど、理由のある関係はいつか消えちまうんだ。考えてみるよ、さつきキミはなんて言ったよ。……その、告白した子たちと友達になった時」

「……あの子たちを、もつと知りたいから」

「だとして、もしもその子たちのことを全て知ったらどうなる？  
もう友達づきあいする理由がなくなるじゃねーのよ。……だから、  
理由があるといつか消えるんだよ。その理由が果たされると同時に  
さ」

「……。だから、本当にいい人間関係を作るのには理由はいらない、  
いやむしろない方がいい、と？」

「そう。これ言ったら傷つくかも知れねーけど言わせてもらう。…  
…今日キミがふられたのは、きつと理由を求めていたからだ」

「理由を求めていたから？　じゃあ逆に、向こうは理由を求めてな  
かったとでも？」

「だろうね。お互いにただ好きだった、お互いに心の底から求めて  
いたからだと思う。そこに理由は存在しない。……そして、想いが  
強ければ引き寄せられる」

「どういうことですか」

「オレが今付き合ってる子はな、実の兄が大好きだったんだ。そい  
つを兄としてではなく、男として見ていた。キスもしたらしいし、  
その子がそれ以上を求めようとしてたらしい。それでもオレは…  
…今、その子と付き合っている。この意味が分かるか？」

「わからなくもないです。強い想いとやらで、お兄さんからその子  
を奪ったからでしょ」

樹里は年上であるはずの翔司を見下すように言うと、またさらに  
続ける。

「気持ちが強ければ、どんな壁も乗り越えられる。そしてその力を  
引き上げるのは、理由なき想い……とでも言いたいのね」

「なんだよ、わかってきたじゃねーの。理由を求めすぎると破綻す  
る、わかるな？」

「……ふん」

本当にわかっているかどうかは定かではないが、樹里は一応納得  
したという顔でティーカップを持ち、中の液体を一口飲んだ。

「はあ。どうして恋愛には参考書みたいなのがないのかな。それさえあれば……私も失敗なんかしなかったのに」

「ないなら、作っちゃえよ。自分なりの恋愛哲学を記した、自分だけの恋愛マニュアルをさ」

先ほどまで険しい顔をしていた圭輔も、その表情を和らげて樹里に進言する。いつものように、彼女の両肩に手を乗せながら。

「いいこと言うね、圭輔くん。確かに、恋愛とかそういうことに対する教科書はないかも知れない。だが、それは裏を返せば『もう持っているから必要ない』ということじゃないかな？」

「ど、どういうことですか！？ ああもう、私ってばさつきから質問してばっかり……くやしっ！」

樹里はあっさりと言ったのけるマスターに食って掛かる。

質問攻めに遭うことはあっても、こうして自分が質問する立場になったことはただの一度もなかった。彼女は、それが許せないのだ。

「落ち着くんだ、樹里ちゃん。一つずつ答えてあげるから」

「……はい。それで、さっきの話はどういうことなんですか」

「持っているから必要ない云々、のことでもいいのかな。……僕はね、こう思うんだ。人には、自分にしか見ることの出来ない心の中の本をいくつか持っていて、最初は全部真っ白なんだ。何も書かれていない。でも、経験を積んでいくうちに、そこに少しずつ書き込まれていく。もちろん、一緒にたに書かれていくわけではなく、いくつかにカテゴリーズされているだろうけど」

「その中の一つに、恋愛について書かれていく本がある……ってこと？」

「そう。様々な経験を積んで書き込まれていったその本は、持ち主の財産になる。樹里ちゃんの場合、やや偏っていたんだろうな。勉強とかそういう点に関しては誰よりも詳しく書かれているものを持っているだろうが」

「だとしたら、私は『人との接し方』なり『恋愛』なりについて書かれた本を持ってないか、たいして書き込まれてない……んですね」

「まあ、そんなとこだ。……焦る事はない。完璧な人間などいないのだから。たまたま、樹里ちゃんはその本については完璧でなかっただけの話だよ。例えば、ここにいる圭輔くんなんかだと……人と接し方については不必要なほどに細かく書き込まれているが、それ以外はろくでもないことしか書かれてなかったりな」

「おいそのおっさん！ さりげなくオレをデイスってんじゃねーYO！」

「だっはっは、お前社交性だけの人間だつてよ！ 出会い厨とかマジ勘弁！」

「……だが、それはその人の武器になる。彼の社交性によって出会い、結ばれた人間は数知れず。この店がいつもあたたかな雰囲気で見られるのは彼のおかげと言っても過言ではない。それらは全て、圭輔くんだけの持つ本に書かれた内容を、彼が最大限に活かしているからだ」

マスターの話をやや離れたところから聞いていた圭輔を含む3人は、その言葉に息を呑んだ。

樹里は……希望を完全に失ったという顔で、マスターを見ていた。「じゃあ私は……どうすればいいの？ あれだけ頑張ってきてまだ完璧じゃないの……？ 完璧つてなに……？ もう疲れちゃったよ……」

そこまで言い切ってから、体を震わせて嗚咽する樹里。

潤と翔司はその姿を見て慰めに行こうと立ち上がったが、それを圭輔が制止する。

「ここで甘やかすのはあの子のためにならねーよ。大丈夫、樹里ちゃん強い子だからすぐ立ち直るって」

「だったらいいけどよ……。にしても、あんな気が強い子が泣くなんてよっぼどだな」

「それだけ好きだったんだよ、告白した相手かさ」

閉店時間を過ぎたカフェに響くは、恋に破れた少女のすすり泣く声。



それは、藤堂樹里という一人の人間が見せる等身大の姿の証明。  
彼女もまた、完璧ではなかったのだ。

「落ち着いたか？」

「くすん……。……。うん」

樹里が去ってから、瑞奈はしばらく泣き止む事はなかった。

爽太はその間、ベンチに座りながらずっと彼女を抱きしめ続けていた。

同時に、一つのことを考えていた。これからどうするか、を。

これからは長期的な意味ではなく数時間後……。いや、数分後のことである。

泣いている瑞奈を落ち着かせたら、家に送らねばならない。

しかし、そのまま帰したら泣きはらした顔を彼女の両親に見せることになる。

瑞奈の両親……。特に父親は度を越えた心配性であり、幼少期から親交のあった爽太もそのことを知っていた。

よってこのまま帰すとすると、よい結果は得られないだろう。

普段ならお世辞にも頭の回転がよいとは言えない爽太だが、この時ばかりは実によく頭が回っていた。

類稀なる冴えを見せた頭脳が導く結論を、彼はついに実行に移す。

「それじゃあそろそろ帰るか？ ……ほら、親心配させちゃまずいんだろ、お前んとは」

「いいの。もうしばらく……。このままがいい」

爽太の計画は、抱きしめた彼女によって遮られた。こうなったら先のことは瑞奈に委ねるしかない。

彼は両手にさらに力を込め、次の言葉を待った。

「爽太くんを抱かれて幸せなの、わたし。この幸せを……。もっと味わってたい」

「……。っ！」

言葉にならなかった。これが感無量なのか……と思うよりも先に、爽太は瑞奈との繋がり求めた。

日の落ちた公園を包んでいた静寂は破られ、代わりに2人の絡み合う音が支配し始めた。

(んむ……ちゅぷ……)

(……いや、待って！ こいついきなりベロ絡めてくるか！？ やべ、興奮してきた……！)

瑞奈のキスが思いのほか手馴れたものだと感じた爽太は、そのまま座っていたベンチに彼女だけを横たわらせる。

抵抗もせず、まどろむような眼で爽太を見上げる瑞奈。もちろん周囲には誰もいない。

「わたし……どうされちゃうの……？」

瑞奈が妙に艶かしい声でそう呟くと、爽太はようやく我に返った。

「んなっ！？ ど、どーもし、しな、しないぞ。 あーしない！

きっ……キスマでだっ！ だだだだっ、オレらまだ高校生だし……

……

「えへっ、どうしたのそんなに慌てちゃって。ごめんね、ちょっとからかってみたの」

ずれたキャミソールの肩紐を直しながら、瑞奈は体を起こす。

まだ目の赤みは取れていないが、すっかり落ち着きは取り戻したようだ。

「はー、ビビった……。てかお前、いつの間にあんなこと覚えたんだ！？」

「あんなことって……なに？」

「このヤロ……！ ほっほら、キスの時にベロ絡ませてきたろ？」

「あれはね……都ちゃんが教えてくれたの。こうするともっと気持ちいいって。わたしにも役に立つ日が来るなんて思わなかったけどね」

「ったくあんにやる……。こーんなぴゅあぴゅあなチビ奈にヘンなこと吹き込むなっつ」

「むっ、今またチビ奈って言った」  
「え？」

「さつきは瑞奈って、下の名前で呼んでくれたでしょ。今度からはそっちで呼んでほしいの」

「や、やだよ恥ずかしい……。さつきはだな、オレも感情がアレだったからつい……」

「じゃあ、さつきみたいになればまた呼んでくれる？」

「さつきみたい……って？」

その質問には答えず、無言で彼を抱きしめる瑞奈。

「え、これって……」

抱きしめられたのは嬉しいのだが、彼女の意図を読み取れない爽太。

だが確実に、先ほどと同じように感情が昂ぶっているのを実感している。

そして……ゆっくりと口を開く。

「……み、瑞奈」

爽太は再度、彼女の名前を呟いた。

それを聞いた瑞奈は彼の方に向き直り、悪戯っぽく笑いながら言う。

「そうそう。そうやって素直に呼んでくれればいいんだよ」

「おいおい……勘弁してくれよ。なんだってお前はそうなっちゃまったんだ？」

「……わかんない。でもね、あなたのためならなんだってできる……」

……そんな気がするの」

「そりゃありがたいや。……じゃあ、いいかな？」

「ふえっ……？ なに？」

「こうして瑞奈と付き合うようになったことを……お前の両親に打ち明ける！」

「ふええっ！？ ……でも、やっぱり言わなきゃダメだよな」

「隠しといてあとでバレたらまずいだろう？ そうなるより先に言っ

といた方がいって」

「そう……だね。考えたら、どこにも後ろめたい事なんてないんだもんね」

「じゃあ、もう今日言いに行っちまうか？ たぶんお前もそうしたいんだろっし」

「うん！ ……いつしよに帰ろ、ね？」

「あ、ああ」

瑞奈が差し出した手をしっかりと握る爽太。  
気持ちを通じ合った2人は、共に歩き出す。

商店街の一角に佇む、昔ながらの店構え。

橋本自転車店は近所に一つしかない、自転車を扱う店だ。

そこでいつも汗や油、鉄サビにまみれながら商店街の人々の足を守るのが、瑞奈の父親だった。

娘である瑞奈には誰よりも甘く、彼女の話題が出たりすると威厳もなにもあったものではなくなってしまう。

そんな父親だから、娘に彼氏が出来たと聞いたたらどんな反応があるかは想像に難くない。

爽太も瑞奈も『きつと大丈夫だろう』という楽観的な考えと『何か言われたらどうしよう』という悲観的な考えのはざまに立ちながら、ゆっくりと運命の場所に近づいていく。

もちろん、その手は繋いだままで。

「ただいま……」

その声に反応したのは……父親ではなく母親だった。

「お帰りなさい、瑞奈。あら？ そちらは……」

「ただいま、お母さん。あのね、爽太くんだよ。覚えてない？」

「爽太くんって……もしかして風間さんとこの！？ あらあら、久しぶりじゃないのよ〜」

「ど、どうも……」

「もしかして遊びに来てくれたの？ でもごめんなさいね、この子

「つたら受験勉強が忙しいらしくて」

「……あのっ！ オレの話聞いてください！」

「は、はい？ どうしたのかしら……？」

「久々の対面を懐かしむ事もなく、爽太は本題に入った。」

「おっ、オレ……えっと、瑞奈と付き合うことになりました！」

「……う、うん。お願いお母さん、わたしたち真剣なの。いいですよ……？」

「……」

「周りの空気が、重い。」

「爽太は下腹部に嫌な違和感を覚えるのだった。」

「緊張したり、切羽詰まった状況に陥ると襲われる、あのなんとも言えない感覚だ。」

「お母さん……？」

「ちよつと待つて。お父さん呼んでくるから」

「ついに、瑞奈の父親が姿を現す。」

「爽太の背筋に、戦慄が走る。」

「娘の前以外では、チンピラ程度なら存在だけでその場から逃がしてしまうような威圧感を持つ男がこの場に降臨するのだ、無理はない。」

「（ど、どうしよう瑞奈！？ これ、断られるとしか思えねーんだけど！？）」

「（そんなのやだよお……。わたしも協力するからがんばろ、ね？）  
2人分の足音が少しずつ大きくなってゆき……。そして、止まる。」

「爽太と瑞奈の目の前には、お世辞にも好意的とは言えない表情を浮かべた壮年の男性が立っていた。」

「2人はその場から逃げ出したいという気持ち在必死に堪え、震える両脚をしつかりと踏みしめるのだった。」

「その時……全てのものを恐怖で凍りつかせんばかりの声色で瑞奈の父親が言葉を発した。」

「うちの大切な一人娘と付き合いあってえって奴あ、いってえどこのど

いつだあ？」

「……お、オレだっ！ おじさん、オレのこと覚えてねーか！？  
風間んとこの爽太だ！」

「風間んとこのボンだあ？ だからって娘と付き合っついていいってことになるたあ、限んねえだらあ！？」

「うっ……。でも、オレはこいつが好きなんだよっ！ たとえ誰に反対されても、オレはこいつと一緒に生きてくんだけ！」

「お願い、お父さん。わたしも爽太くんのが大好きなの。だから、付き合うことを許して……」

「……（なあ母さん、もういいだろお？ おらあもう、2人いじめたくねえよ）」

「……（そうね。……じゃあ最後に『瑞奈のどこが気に入った』のかを聞いてちょうだいな）」

両親は、爽太たちに悟られぬように相談をしているようだ。

一瞬の沈黙の後、幾分か穏やかな声になった父親の声で静寂が破られる。

「それじゃあ最後に聞く。……おめえさんは娘の、瑞奈のどこに惚れた？」

爽太は迷わなかった。お互いに目を合わせて頷き合ってから、自信満々に告げる。

「……心。心、だ。もっと言うなら優しさ、思いやりだ。こいつは友達のために自分を犠牲に出来る、優しい奴だ。だけど時々、さじ加減をミスってお互いに傷つく事がある。そんな時に支えてあげたい。そう思ってから、こんなにも愛しい存在はないって確信した。オレは一生、こいつを守っていくんだって思った。……それじゃダメか？」

言い切った。ここまで、淀みなく言い切った。

しかしそれと同時に、心臓は早鐘を打ち、両脚は武者震いを始める。

そんな彼に近づくと影がひとつ。

彼は全ての覚悟を決め、目を閉じた。そして……。

「おらっ！ 目え開けな、息子よ！」

「……はっ！？ む、息子お！？」

爽太はこの時、どんな苦痛も耐えてみせるといふ意気込みを見せていた。

だが、ふたを開けてみると『息子』という呼ばれ慣れない呼称で呼ばれる始末。

予想だにしない結果に、爽太も瑞奈も呆然とするほかなかった。

「あつたり前よお！ 瑞奈の旦那にふさわしいのは、おめえさんしかいねえつてなもんでえ！」

「あらあら、うちの人に気に入られたみたいね。爽太ちゃん」

「おばさんまで！ なんなんだよ……」

「もうおばさんなんて呼ばないの。これからは『お義母さん』って呼びなさい。ね？」

「ふええっ！？ え、じゃあ……ええええっ！？」

「そうよ、瑞奈。爽太ちゃんは今私たちの息子。つまり、あなたの旦那さんよ」

「ちょ、待って！ たっ、確かにオレは瑞奈が好きだけど、そんないきなり……」

「そうだよ……。まだわたしたち高校生だよ？ 爽太くんはまだ18になつてないから法律の上でもダメだし、2人とも進路も決まつてないのに決められないもん……」

「つとと、そうだったなあ。めんどくせえなあ……。じゃあこうしよう！ ボンと瑞奈は、あつしらが見てる前で婚約をしたつてことで、どうでえ！？」

「そうね。焦つて決める事ではありませんからね。……ねえ爽太ちゃん。あなた、婿入りする気はない？ そして、ゆくゆくはうちの店を継いでくれれば……」

「うん……。こればかりはオレ一人じゃ決められないよ。さつきからとんとん拍子に進んでるけど、オレの一生を決めてる気がす

るんだよね。だから、もう少し待ってもらっても……」

「構わないわ。でも、これだけは約束すること。瑞奈を、どうか幸せにしてあげてください。私たちのかわいい一人娘を……」

「も、もちろん！……オレ、頼りないかも知れないけど、頑張るよ。婿入りの話も前向きに考える。そして……瑞奈とは、高校卒業したら……結婚します……！」

「爽太くん……！わたし、うれしい……。わたしの王子さまは、爽太くんだったんだね……」

「瑞奈、恥ずかしいセリフは禁止よ。……それじゃあ爽太ちゃん、今日はもう遅いし、この話はまた後日しましょう。お母様によろしくね」

「はっ、はい！で、ではっ！こっ、これからよっ、よろしくお願ひしま、します……。お、お義母さん、お義父さん……！」

こうして、急激な勢いで爽太と瑞奈は結婚の約束を取り付けてしまったのだった。

残るは風間家の同意が必要だが、帰宅した彼を待っていたのはあまりにも急な展開だった。

「また転勤！？しかも今度は、海外！？」



## 終章：String Of Love

「な、なんだってー！ー！？」

数人の生徒の絶叫が、夏休み中の登校日の3E教室を揺るがした。4月にここ3Eの仲間に加わった少年、風間爽太がまたも引越してしまうという報せは一気に教室中を伝播し、彼の周りには人垣が形成される事になった。

ちょうど、彼が転校してきた日と同じように。

「うっそ、うっそ！ ウソだよっ！ なんてそんないきなりなの！？」

「だってまだ半年もいねえじゃねえか！？ そんなにコロコロ引越すもんかあ？」

「そんなねえ、ネタの尽きたラノベみたいな急展開認めないよ」

彼と特に仲のよい青山果緒梨と神崎都、そしてこのクラスの委員長（非公式）である藤堂樹里の質問攻めに遭う爽太。

そんな声をまとめて吹き飛ばすかのように、全身から声を発した。……うるっせー！！ おめーらそんなにオレを厄介払いしてーのかー！？」

「いや、だって親の転勤って……。ふっつう転勤つつつたら転校だべ？」

「そういうのっておれなんていうか知ってるぜ。死亡フラグっていうんだろ？」

「みやびよん、全然違うからそれ。この場合の死亡フラグってのはね……『オレ、この夏休みが終わったら引越すんだ……』って言わなきゃ成立しないよ。……やべ」

樹里は何故か、慌てて口をふさぐ。何らかの失言をしたのだろうが、どの辺りにまずい言葉があったのかは誰にも分からない。

その時、人垣の後ろの方から一人の女子生徒の声が聞こえてきた。「へー、委員長ってば詳しいんだ」



だから、この中の誰かが声を搾り出すしかできなかった。

「なん……だと……？」

そこでようやく沈黙を打ち破った3Eの仲間達の視線は爽太ではなく、隣の瑞奈に向けられる。

クラスの中で最も小柄で、ゆえに目立たない存在だった彼女が、こういった形で注目を集めるとは誰が予想したであろうか。

……その時、誰かが手を叩いた。

その乾いた音に触発され、いつしかそれは拍手へと変わった。

「ひゅーひゅー！ お2人さん、おめでとー！」

「結婚式とかいつなのー？ うちらも参加したいー！」

「っーかみんなで行けばよくね？ クラスの仲間の門出じゃん！」

「悔し〜い！ あんなちっちゃな子に先越されるなんてえ！ でも

……嬉しいのはなんで？」

「い、今だから言うけど！ オレ、橋本さんのこと好きでした！

オレのこと忘れないでね！」

「あっ、ずりーぞ！ おっ、オレも前からかわいいなって思ってた

！ 幸せになつてな！」

「み……みんな……」

今まで会話すら交わしたこともなかったような生徒までもが、瑞奈と爽太を祝福し始めたではないか。

樹里はその様子を一步引いて見渡した。そこには『仲間』と幸せを共有する『仲間』の姿があった。

「これが……友情……？ これが……仲間……？ だってみんな、ほとんどみずにちゃんと話なんかしてなかったじゃない。それがどうして……？」

その瑞奈は、クラスの仲間全員に囲まれ、何かを言っていた。

「えっと……なんて言っていていいかわかんないけど……あ、ありがとう。わたし……わたし……みんなにあんまり気に入られてないかと思っただけど……嬉しい……です……」

「うっひよおおおお！ かわいいいいいいっ！！」

「てめえ風間！　こんなかわいい子を泣かせたりしたらシメるからな！」

「くっ……！　どうしてクラス発表の時点で目をつけておかなかつたんだろう……！」

大多数の男子生徒の歓声が上がる中、瑞奈は樹里の姿が見えないことに気がついた。

担任を除いた3Eの仲間の中で最も背が高く、ゆえに最も目立つはずの彼女が自分の目につく場所にいないのは不自然だ。

今の自分がこうしてられるのは、全て樹里のおかげだと思っ  
ている瑞奈。

2人は、夏休み中に気持ちぐすれ違っ  
てしまい、未だにお互い謝罪ができていない。

とは言え、プライドの高い樹里が自分から謝るというのも、瑞奈には想像ができなかつた。

今こうしてクラスの仲間祝福されているのは、樹里の協力があつてこそ。

だからこそ瑞奈は、この場で樹里に謝罪と感謝の気持ちを伝えなかつたのだ。

瑞奈は、樹里がまだ教室内に  
いることを信じ、勇気を振り絞つて伝えた。

「ジュリーちゃん！　……ありがとう、そして……ごめんなさい！」

本当は、もつと気の利いた言葉を伝えなかつた。

もつともつと、謝罪の気持ちを伝えなかつた。

だが、言えたのはたったの一言だつた。

しかしだからこそ、姿の見えなかつた樹里の心に真つ直ぐに届いて  
いた。

樹里は涙をこらえつつ、最愛の親友へと近づく。

ついでに果緒梨と都も、樹里の後ろについていった。

「ごめんね、みずにちゃん……！　こんな私だけ……まだ友達でいてくれる……？」

「もちろん……。だってジュリーちゃんは、わたしにいつも勇気をくれたんだもん……」

「……今日ばかりは、私のみずにちゃんに勇気をもらったよ。私……誰かの幸せを何倍にもできる素晴らしいみんなに今まで酷く当たったり……自分を偽ってた……。あはは、最低だよね……私って」

「ジュリーちゃん……？」

「でも、みずにちゃんに勇気をもらった今なら……自分を偽ったりしない！　みんな、私から目を離さないでね」

その時だった。樹里はおもむろにメガネを外し始め、髪を結わいていたゴムも外す。

そこには、気のおけない仲間には見えなかった、藤堂樹里という少女のありのままの姿があった。

教室中は一転、どよめきに包まれる。

樹里はその様子を構う事もなく、話を続ける。

「みんな、今までごめんなさい。さっきまでの姿は本当の面じゃないの。メガネだって伊達だし、髪なんか結ぶのすつごく痛かったんだから。それに……」

「それに……ってことは、ジュリー？　あんたまさかその先まで言っちゃうの？」

「うん。それに、本当の私は委員長みたいな堅っ苦しいんじゃないで、ゲームとかアニメが大好きな……オタク女なの！」

つい数刻前、今と同じ状況になったはずだった。

時の止まった空間が、再び形成されてしまった。

だが今回は先ほどとは違い、完全に動きの止まっていない者もいた。

その中の一人である都がぼつりと呟いたところで、教室内の時は再び動き始める。

「あーあ、言っちゃったぜあいつ。おれ知ーらないつと」

「いや、ありじゃね？ いやむしろ、かわいくね？」

「うんうん！ 髪下ろした委員長、絶対かわいいって！」

「いや！ 顔もそうだが胸だ！ あの胸に心惹かれぬ男は男ではない！」

「オタクがなんなの？ いいじゃんいいじゃん、全然恥ずかしい事じゃないって」

「そうだそうだ！ オレだって動画サイトでアニメとか見てたりするし！」

「オタクであることを告白した委員長は、まことに素晴らしいと思います。過去の事実もなかったことにできましよう。つきましては後日、拙者と今期のアニメについての討論をば……」

ありのままの自分を晒した樹里に寄せられる、仲間達の温かな言葉。

みな、過去に見下されたりひどい事を言われたりした事実を忘れたかのような態度だった。

「み、みんな……！ ホントにそう思ってくれるの……？ だって

私、みんなを見下してたんだよ……？」

「それとこれとは話が別でしょー、ジュリー。あんたが知らないだけで、みんなすっげーいいヤツなんだから」

「そういうこつた。ほら、仲間ができたろ？ オレらは汐野学園3年E組っていうクラスの仲間なんだ。オレは違うけど、みんな3年も学校で顔合わせてたんだぜ？ 人生の6分の1だけ？ 仲良くならないのがおかしいって！」

「そう……だよ。それなのに私……。……よしっ！」  
バシッ！！

樹里は自らの両頬を力強く叩き、気合を入れる。

「うっわ、すげえ……。ジュリーの奴、気合入ってんなあ」

「だーね。ま、あたしらは生温かく見守ってあげましょ」

そして樹里は、仲間に見守られながら言った。

「わ、私……！ い、今までみんなにひどい事してきちゃった……。今さらなんだって気がするけど……。その、ご、ごめんなさいっ！！！！」

樹里は勢いよく頭を下げ、誠心誠意謝罪した。

その直後、誰かからの声がかかった。

「はいー、ごめんなさい入りました！ それじゃー今までのことはこれで？ セーのー！」

「……キャラー！！」「……」

「仲良しのまま、卒業しようぜー！！」

風間爽太は自分の道を見つけ、愛する者と結ばれた。

橋本瑞奈は勇気と愛を知り、幸せを手に入れた。

藤堂樹里は絆と友情を知り、罪を滅ぼした。

彼ら3人が中心となって紡がれた物語は今ここに、一つの区切りを迎えた。

繋がったものもあれば、繋がらなかったものもある。

将来、それがどうなるかは誰にもわからない。

また繋がるかも知れないし、切れてしまうかも知れない。

あるいは、存在自体がなくなってしまうかも知れない。

だからこそ、今の繋がりを大切に、強固にしていかねばならないのだ。

どこかの場所のどこかの時代、今日も彼らは生きている。

そして何かを、いつも探し求めている。それは、誰もが持つてる

『Precious Melody』。

その繋がりを、永遠に。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4592o/>

---

Precious Melody 4 -String Of Love-

2011年1月11日23時11分発行